

新世紀エヴァンゲリオン・鉄華。

トバルカイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三日月・オーガスはバルバトスと共に最後までギャラルホルンと戦い。死んだ。

その魂は碇シンジへと生まれ変わり、前世の三日月の魂の全てを受け継いだ。

そして彼は前へ進み続ける。その結末は誰も知らない。

目次

序章・生まれ変わって、また明日。	1
第一話・使徒襲来。	6
第二話・戦慄のシンジ	19
第三話・アラヤシキモドキ。	25
第四話・歩む力と生きる血潮。	40
第五話・腹が減っては戦はできぬ。	58
第六話・勝ちたければ、前進せよ。	69
第七話・狼の瞳が見つめるモノ。	79
第八話・決戦第3東京市	90
第九話・決戦第3東京市・終。	104
第10話・アスカ、来日。	135
第11話・生き血よ育て。天に召されよ。	162
第12話・語る男。現れる者。	172
第13話・襲来の異端使	186
第14章・天使と悪魔に紅い実を人類に愛と希望。	200
第15話・命に定めを持つ者が栄華を歌う時	216
第16話・祖は天を揺るがし地を砕き・摂理の怒りを知らしむる	232

序章・生まれ変わって、また明日。

俺たちには、辿り着く場所なんていらねえ。ただ進み続けるだけで良い。

止まんねえ限り道は、続く。止まんねえからよ…お前らが止まらねえ限り。その先に、俺はいるぞおっ!!

だからよお…止まるんじやねえぞ。

進み続ける。一步前へ。

暗い。これ、死んだのかな?。でも、俺はこの場所を知ってる。そうだ。これは。

あの時の――。

どこかの裏道で、二人の孤児が出会った。

俺の命はオルガに貰った。なら。そうだ。決まってる。

進み続ける。進み続ける。

何故だっ!?!何故、まだ抗うっ!?!無駄な足掻きだっ!?!こんな無意味な戦いにどんな大義があるのかっ!?!

大義?何それ?無意味?そうだなあ…。俺には意味なんてない。けど…。

けど、今は…。俺には、オルガがくれた『意味』がある。何にも持っていないかった俺のこの手の中に。

こんなにも、多くのモノが溢れてる。そうだ。俺たちはもう、辿り着いてた。

何なのですかっ!?!貴方たちは、果たすべく大義もなく。何故っ――。

進み続ける。進んで辿り着いていた。

俺たちの…。本当の居場所――。だろ、オルガ?

ああ、そうだな。ミカ。

あー。また汚れた。アトラに怒られる…クーデリア。一緒に謝ってくれるかな？

これは、理不尽に抗って、抗いぬいた彼らの、人間の、物語である。

―パチッ―

ある住居の一室。

「夢…。あの夢。懐かしい、あの夢だ」ムクツ

ノートには、文字がびっしり、書かれていた。少年。碇シンジ。

彼は、母を亡くし。父親に捨てられた様に親戚の家に預けられた。運が良く。親戚の人の中に彼を積極的に受け入れてくれた叔父が現れ。幼い彼を引き取った。多少の苦労はあったが…特に不自由なく、シンジは親戚の家で叔父とその妻の家庭で普通に暮らしていた。その普通は周りから見れば幸せなモノであると、恵まれていたと誰もが思うだろう。

カキカキツ。

「これで、全部だ。叔父さんに見せよう」

シンジの朝は健康基準で早い部類に起床をし、日課のトレーニングをこなしていた。叔父の言いつけ通りに、朝、昼、夜の食事は欠かさず食べ続けた。そして、彼が7歳になる日まで、シンジはある男の『夢』を見続け、彼の生きた世界の感想をノートに書き写していた。

「おはよう、シンジ。今日はどんな夢を見たんだ？」

今日の朝、何時もの様に朝食の準備をしてる叔母を他所に叔父はシンジの夢について聞いてきた。

「はい」スッ

「どれどれ…」

シンジからノートを受け取り、彼の書き綴った夢の感想を読む。これは彼が夢を見始めた時から、約束した行事である。何故、朝飯前に読むかって？それはね。叔父さんは、『読む』のが『早かった』。

「シンジ、今年でお前も7歳になった。よく成長したな」パタンツ

「叔父さん？」

「飯にしよう。シンジ。話はそれからだ」

叔父は微笑み、シンジの頭を撫でる。

「うん」

「はい。ご飯だよ、二人とも。シンジ？残さず食べるんだよ」

叔母が両手で丸いトレーに朝食を乗せて運んできた所。叔父とシンジは手を合わせ食前の挨拶をした。

『いただきます』

朝食を食べ終えて、叔父から真つ直ぐ帰って来いと言われて学校へ行き。シンジは学校の授業を終えて、帰って来た。

「ただいまー」ガララー

「お帰り、シンジ。今日は私が鞆を片付けてあげるから、あの人の所に行つといで。待ってるから」

「叔父さんは、『何時もの所』？今日は何？」

シンジの問いに、鞆を受け取った叔母は『笑顔』で答えた。

「時が来たのよ。シンジ。貴方に『私たち』が、守り続けたモノを差し出す時が…大丈夫」

そう言つて、叔母は鞆を置き、近づいた7歳のシンジを優しく抱きしめた。

「いきなさい…あなたと、ユイさんの為に。私、待ってるから」

「ありがとう。叔母さん」

家の裏側には道があり、その一本道。シンジは叔父が時々通つていく蔵に行った。

そこに、叔父はいた。どうやら、シンジが来るのを蔵の扉の前で今か今かと待ち望んでいたらしい。

「シンジ、よく来たな。待っていたよ」

「叔父さん…」

叔父はシンジに近寄り、肥坐を付き彼の頭を撫でた。神妙な顔つきでシンジを見る。

「シンジ、お前はゲンドウに捨てられた様に預けられた。悲しかったか？」

「…少しかな」

「今でも、悲しいか？お前は——」

「叔父さん。僕は平気だ」

「シンジ……。そうか、お前の目は本当に、美しいな。迷いがなく、ただ『前』を見るお前の目」

「それで、何をするのか？」

シンジがそう聞くと、叔父は立ち上がり蔵に歩みを進める。立ち止まり振り返り、シンジに口を動かす。

「私は、ユイくんの『約束』を守るだけさ。ついて来なさい、『神の子』よ」

「神の子？」

「ユイくんは、君の事を『愛している』。『愛しているからこそ』。お前はアレを受け入れるのだ」

「母さん？どうして母さんの話が出てくるの」

首を傾げ、シンジは臙げな母の記憶を辿りながら聞いてみた。

「お前の母さん、ユイくんはね……。未来の為に『贈り物』を用意した。そしてお前は『祝福』を受けられる」

「……」

「お前は『幸福』になれる。シンジ、問おう、お前は何故生きる？」

「決まってるじゃん」

「夢で出て来たオルガって人の事か？」

「うん。僕は生きる。前へ進み続ける。あの日、僕は生まれ変わる前から進み続けると決めた。『生きる』って、そういう事だよ？僕はこの生き方に苦痛は感じない。曲げるつもりもない。叔父さんと叔母さんには色々教えてもらえて、ここまで食べさせてくれたり、学校行かせてくれたり、お風呂も、遊びも……。ありがとう。また、辿り着くまで進み続ける。この世界で。それで、叔父さん。『僕は何をすれば良い？』」

「ああ……。私のした事は間違っていないなかった」ジワッ

そう言った叔父は、涙を流し、空を仰いだ。目元をぬぐいシンジへと手を差し出す。

「行くシンジ。ぐちゃぐちゃ言うのはもうなしだ」

「うん」

シンジは叔父の差し出した手を取り、一緒に歩きだした。蔵の中は不気味な程暗くまるで、恐ろしい何かの口を開けてる様だった。その中へ、二人は消えた。

その夜明け、蔵から最初に出て来たのは上半身が裸で背中に異様な傷痕を残したシンジだった。

第一話・使徒襲来。

ある日。気が付いた時。僕は周りの普通と違っていた。

僕にとっては普通なのに、周りのある人は『おかしい』と言っていた。

僕は読み書きが少し苦手だった。よく先生に丁寧にしなやかに書いてみなさいと。

知ってる『友達』が上級生にいじめられていた。僕は彼らを裏庭に呼んで彼らにいじめるのは何故と聞いた。『弱いヤツを攻撃するのが楽しいから』と答えた。だから、僕はそんな彼らに『攻撃』の『痛み』を教えた。そいつらはみんな弱腰になって地面に頭をこすり付けて命乞いをした。僕は『痛み』を教えただけに……。まあ、どうでもいいか。こいつらは潰した方が良くないか。オルガ。翌日。そいつらは二度と学校には来なかった。

更に次の日は僕が『集まった』みんなに僕の『考え』と『行動』を全部話してみた。そしたら……。。

みんな逃げた。蜘蛛の子散らす様に。不思議だね。オルガ。叔父さん。

14歳の夏。僕の元に手紙がきた。ああ。父さんか。手紙には一言『来い』と書かれていた。叔父さんと叔母さん。そして『友達』が僕を送りに来てくれた。僕は行く。

オルガ。俺は前に進み続ける。その先にいるよね？。だから進むよ。邪魔するヤツは……。誰だろうと潰す。それで良いんだ。これが僕なんだ。みんな。

—第三東京市—。

「生きてる？」

「ええ、だい……。丈夫よ。シンジ君は？」

「生きてるよ。車。大変だね」

シンジの手伝いでミサトは横転した車から脱出できた。戦略自衛

隊が使用したN2地雷による爆発の衝撃で葛城ミサトの運転していたルノーはひどい有様だった。

「あーずいぶん酷い有様ね。ゴメン手伝ってシンジ君」

「いいよ。このままだと親父の所に行くのは難しいから」

そう言つて、シンジはルノーの屋根に手を付き二三度揺らし車体を無事に戻すことが出来た。

「力あるのね。シンジ君」

「大した事ないよ」

（よく見ると。ガツシリした腕をしてる・・・鍛えてるのね♪）

「改めて、私は葛城ミサト。ミサトで良いわ。よろしくね碓シンジ君」
スツ

「・・・うん。よろしく。ミサト」

差し出された手を見て、シンジも彼女の手を握り。握手を交わした。

「ええ。心配無用。彼は最優先で保護してるわよ。だから、カートレインを用意しといて、本部まで直通のやつ。そう。迎えに行くのは私が言い出したことですもの、ちやくんと責任持つわよ。じゃっ！」

（しっかしもうサイテーー！。せっかくレストアしたばかりだったのに早くもベツコベコ。ローンがあと33回+修理費かぁ、おまけに一張羅の服まで台無し。せっかく気合入れてきたのに・・・トホホ）

ミサトは色々考えてる間。シンジは拝借したバッテリーの様子を眺めていた。

（車の電池つて、こんな風に充電するんだ。おもしろいな）

しばらくして、バッテリーは無事に回復し。ルノーに乗りその場を走り去った。

「さっきの怪獣みたいなの何？。みんな攻撃していた様だけど」

「私たちはアレを『使徒』と呼んでるわ」

「使徒？。誰かが作った兵器とかじゃないの？」

「いいえ。正体不明。何時、何処で、誰が造ったかも不明。判っているのはアレが人類を滅ぼそうとしている、という事だけ」

「ふーん。『敵』、なんだ」

「そうよ。ところでシンジ君、お父さんから何か聞いてない？」

「いや。手紙にはただ、来い。と書かれてたけど」

「そ．．．そう。あ、もうすぐよシンジ君」

「特務機関ネルフ？」

カートレインに乗りこみ、二人の会話は再開した。

「そ、国連直属の非公開組織。あなたのお父さんがいる所よ」

「そうなんだ。凄いのそれ？」

「もちろん。使徒と戦ってるんだから凄いに決まってるわ。何たって、人類を守るお仕事なんだから」

「人類か．．．ミサトもそうなの？」

「ええ、そうよ。あつ。そうだ。シンジ君ID貰ってない？」

そう言うときシンジはカバンから、黒いカードのモノを取り出した。

「コレの事？」

「そうそう。あつ。そうだこれ読んでいて」

ミサトから極秘と書かれてる冊子を渡された。そこには「ようこそNERVへ」と言う字が書かれていた。

「ふくん。これ必要なの？」

「ええ。必要な事と守らなきゃいけない事が書かれてあるから目を通して置いて」

「わかった」

「．．．ねえ。シンジ君。お父さんの事、興味ないの？」

「親父？．．．は、僕を捨てたみたいな事を叔父さんが教えてくれたけど？。それが何？」

「．．．そう、ごめんなさい。変な事を聞いたわね」

「へいき。叔父さんと叔母さんが良く育ててくれたから。特に問題はなかった」

「シンジ君．．．」

(ここまで無関心なんて。大丈夫かしら？。それにこの子の目。迷いが無い。ホントに14歳なの?)

冊子を読み始めたシンジを横目で見ながら、ミサトは些か不安にな

る。それでもシンジをゲンドウの所に連れて行かない訳にはいかないと解っていたが。やがて二人の目に、電灯の物とは別の光が入って来た。

「これが、ジオフロント。．．．綺麗だ」

変った光景を見てシンジが声を零す。地下にこの様な綺麗な空間があるとは思わない。

「そ、世界再建の要、人類の砦となる所よ」

「地下に砦なんて．．．珍しい事するんだね。ここまで作った人間って凄いや」

外のジオフロントの光景を眺めてるシンジを横目に見ながらミサトは少し、ホツとした。少し笑った彼の顔に。

シンジとミサトはNERV本部に入っていた。未だ目的地に着いてはいなかったが。

「ミサト。もしかして、迷った？」

「そっ!!。そんな事ないわよっ!!。ちよ、ちよつと待ってね」

シンジに知ったか振りを通し、何とかしようとかアタフタしているとシンジがミサトの手を取った。

「し．．．シンジ君？」

「こっちだよ。ミサト。ついて来て」

「えっ!?!。解るのっ!?!」

あたかも自然にシンジはミサトと手を繋ぎ。歩調も合わせ。歩き出した。

「うん。匂いでわかる」

「に．．．匂い？」

そして、エレベーターまで、辿り着いた。ミサトは驚きを感じた。匂いだけで彼はここまで来たのか?と。シンジはここでミサトの手を離した。

「凄いわねっ!!。シンジ君っ!!。ホントに匂いだけでここまでたどり着くなんて」

「鉄の匂いはよく覚えてるから。『普通』だよ」

「そ、そう?」

「これに乗れば良いの?。ミサト」

「ええ。そうよ。あと、私が迷ったって事は出来れば誰にも言わないで。お願い」

手を合わせてシンジに頼むミサト。どうやら本人の沽券に係わる様だ。

「んー。わかった」

二人はエレベーターに乗り。しばし待つ。そして辿り着くと扉が開いた。中から金髪の女性が現れた。

「あー」

「この非常時に何やってたの?。葛城一尉?」

「ごめーん。リツコ。ちよつち迷っちゃって……」

現れるなり刺の生えた言葉を投げ付けるリツコに、ミサトはバツが悪そうに答える。リツコは溜息を一つ吐いてミサトから視線を外し、シンジに目をやる。

「例の男の子ね?」

「そ、マルドゥック機関の報告書によるサードチルドレン、碓シンジ君よ」

シンジは聞きなれない言葉に眉を少し顰める。が、リツコはそれに気が付かなかったのか、構わずシンジに話し掛ける。

「そう。私はここで技術部長を務めている赤木リツコよ。よろしく、碓シンジ君」

「うん。よろしく。赤木さん」

シンジは此処で叔母に教えてくれた事を思い出す。返事と挨拶はしつかりね?。と。ここは返事をしとくとシンジは判断した。

「リツコで結構よ」

「うん。わかった。リツコ。聞きたいんだけどサードチルドレンって何?」

「悪いけど、説明は後でするわ。ついて来て」

「……」

シンジの様子を見て、ミサトは思ったのか。優しく声をかけた。

「大丈夫よ。シンジ君。ちゃんと説明してくれるから」

「わかった」

首を少し傾げながら答えたシンジの挙動に少し愛着が湧いたミサトであった。

「それで、初号機はどうなの？」

「B型装備のまま現在冷却中」

「それ、ほんとに動くの？ まだ一度も動いた事無いんでしよう？」

「起動確率は0.000000001%。……09システムとはよく言ったものだわ」

「それって動かないって事？」

「あら失礼ね。0ではなくってよ」

「数字の上ではね。でも、どの道動きませんでしたじゃ、もう済まされないわ」

シンジは難しい話をしている二人を見ながら、ある気配を感じた。とても大きいモノがここにあると言う事を。

（背中が、ざわざわする。なんだろう？。「あの時」でもない。でも、知ってる感じだ）

前世の記憶にある、人を『殺す』機械が最初に起動した。感覚とも違う。嘗ては感覚で人の判別が出来た事があるのを思い出しながら気になっていた。

ガコンツ。

「着いたわよ。シンジ君。ついて来て……って。どうしたの？」

「うん。平気。ここなの？ミサト？」

「ええ。暗いから気をつけて」

やがて三人は一つの扉をくぐる。扉が閉まるとそこは真つ暗になるが、音の反響などからそこがかなり広い空間である事は見当が付く。もっともシンジは明かりが無くとも、そこにある「存在」を認識していたが。照明が点灯すると、そこにある存在が目にも明らかになる。シンジは黙ってそれを見詰めた。

「これは人の造り出した究極の汎用人型決戦兵器。人造人間エヴァン

ゲリオン。その初号機。建造は極秘裏に行なわれた。我々人類の最後の切り札よ」

沈黙したまま何の反応も見せないシンジに焦れたのか、リツコが声を掛ける。

「これが、親父の仕事ってヤツ？」

「そうだ」

男性の声がして、顔をあげて見てみると、初号機の頭上に設けられたブースに髭面にサングラスの男が居た。シンジは三十秒程その男を見詰め、漸くそれが自分の父親であると認識したが、

「アンタが俺の親父？。久しぶり」

「ちょ!?、シンジ君？」

シンジはあたかも、『普通に聞く』様にゲンドウに右手を上げて挨拶して初号機に顔を向けた。その様子を見たミサトが驚き、ゲンドウは片頬をひくつかせるが、抑え込んで命令を下した。

「……出撃」

シンジの目線が再びゲンドウを見ると同時にミサトが叫んだ。

「出撃!? 零号機は凍結中でしょ? ……まさか、初号機を使うつもりなの?」

「他に方法は無いわ」

そんなミサトにリツコは冷たく言う。

「だってレイはまだ動かさせないでしょ? パイロットがいないわ」

「さつき届いたわ」

「……マジなの?」

「碓シンジ君。あなたが乗るのよ」

シンジを見て言うリツコに視線を移し。また初号機に視線を移した。

「待って。レイでさえEVAとシンクロするのに7ヶ月も掛かったんでしょ? 今来たばかりのこの子にはとてもムリよー」

「座ってればいいわ。それ以上は望みません」

「しかし!」

「今は使徒撃退が最優先事項です。その為には誰であれ、EVAと僅かでもシンクロ可能と思われる人間を乗せるしか方法はないわ。解っている筈よ。葛城一尉」

ミサトは少し考え、シンジを見た。

(シンジ君……)

ミサトの視線に気づいたのか。シンジも初号機からミサトに視線を移した。

「……シンジ君。私はー」

「ミサト」

ミサトは何かを言う前に、シンジは声を発した。

「僕は何をすれば良い？」

透き通る眼が。矛盾のない目が彼女を写す。

「シンジ君……」

ミサトから更にゲンドウへ視線が移る。その迷いのない視線がゲンドウを見る。

「親父。これに乗れば良いんだよね？。さっきの使徒って怪物と戦うの？」

「そうだ」

「訓練も受けず操縦の仕方がわからなかったら、どうするつもりだったの？」

首を少し傾きながらシンジは問うた。その様子にリツコとミサトは顔を顰める。

「お前は、乗れば良い。後は説明を受けろ」

「事情の説明なの？」

「操縦のだ」

「……はあ」

この時、シンジは叔父の言葉を思い出した。『その言葉どおりゲンドウはダメだと認識した』そして初号機を見て更にため息をしてゲンドウを見るシンジ。ミサトはどうしたものか考えたが。悪寒がした。

突然。シンジから凍てつく空気が吹き荒れる。一言で言うなら『恐怖』。リツコも感じたのか一歩も動かない。

ガラス越しから見ているゲンドウにも届く。ゲンドウは顔を顰めた。シンジから来る視線が全身を駆け巡る。それも、恐ろしく。自分を見る目がとても、とても、とても。

哀れで醜いモノを見る顔をしていた。

「なん．．．だ。その顔は」

「．．．．．」

ジツと見る。その目が自分を見ている。醜く。哀れな。生き物に向ける。自分が一番見られたくない『子供』に。気圧され、自分が小さく感じた。ゲンドウは見られていた。醜く不快なモノを見て必ずなる顔で。ゲンドウはついにたまらなくなり、怒鳴り散らす。

「いい加減にしろっ!!。子供のくせにその目をやめろっ!!。さっさと乗れっ!!。乗る気がないのなら帰れっ!!」

あのゲンドウがヒステリックに怒鳴る様を初めて見た二人は茫然する。普段はあんまり表情をださない男が初めて醜いモノを。親の醜い一面を見せた。

(あの司令が、あんなに．．．)

(何なの?。この子。いったい．．．)

しかし、シンジは見る。そして。首を傾げた顔に片手を頬に当て。表情を変えた。ゲンドウには見覚えがあった。

そのしぐさ。愛した妻のユイがしていた仕草。ミサトとリツコは横からその表情の一部分を見てしまった。

憐憫の相。ユイが時々する仕草を真似ながら見せたそれが更にゲンドウの精神を逆なでした。それが決め手だった。

「冬月っ!!レイを呼べっ!!。今すぐにだっ!!」

「っ．．．使えるのか?」

「死んでいる訳ではないっ!!。とっと呼べっ!!」

「わっ．．．わかったから。冷静になれ碓」

そして、衝撃。ケイジが揺れた。その揺れと共にゲンドウは少し冷静になった。

「っ．．．奴め。ここに気付いたか」

リツコも揺れの衝撃で、冷静になり。シンジに恐れを抑えながら言

い放つ。

「シンジ君。時間がないわ」

「……」スー。

シンジは手を戻し。表情も何もなかったかの様に元に戻っていた。いつもの可愛げのある顔でミサトを見た。

ミサトは多少たじろぐも、状況を思い出し。無理を承知で。言わせないでとお願いしながらと言う。

「シンジ君。乗って。貴方がやらないと人類が……」

「うん。分かった。乗るよ」

「えっ?。いいの!?!」

「うん。ミサトはやって欲しいんだよね。助けてくれた礼はするよ」

「シンジ君……」

ケイジの向こうから、新たな人が来たのを確認したシンジがそつちを見る。ストレッチャヤーに乗せて運ばれた来た少女を見て。少し驚いた表情をした。

「あれ?。この子。幽霊の子?」

シンジはその少女に見覚えがあった。昼間の街で見かけた幻影の少女だった。水色の髪とアルビノの少女にシンジは違和感を感じた。

『前に見たことある』既知感を感じた。

「レイ。もう一度だ」

「待ってくださいっ!!。シンジ君が乗ると決めたのに怪我してる彼女を乗せる気ですかっ!?!」

「愚かな子供に用はない。葛城一尉」

「何故っ!?!。そんなー」

ミサトが何か反論しようとする前に警報がなった。

『第二撃、来ます』

先程より激しい振動がケイジを襲う。シンジは見た。頭上のライトが落下しようとしているのを。シンジは行動した。少女を助けるという行動を。ミサトの脇を抜け、レイの所に行き、その身体を掬い上げる。ミサトは見た見たシンジとレイの頭上からライトの破片が落ちてくるのを。そして。

「危ないっ!!」

ザバアッー!!。

シンジとレイの頭上に初号機の手が現れた。落ちて来た落下物は跳ね飛びゲンドウがいるガラスに直撃した。強化ガラスの様で無事だった。

「まさか!? 有り得ないわ! エントリープラグも挿入してないのよ! 動く筈ないわ!」

その騒ぎから離れた所に居たりツコは困惑の声を上げる。

「インターフェイスも無しに反応してるの?。というより、守ったの?。彼を!。いけるっ!!」

ミサトは何か立ち上がり。シンジとレイが無事なのを確認した。

「……大丈夫?」

「……あなたは……」

「後は僕がやる。休んでね。大丈夫だから」

シンジはレイが無事なのを見て。優しく『微笑んだ』。その表情を見たレイは心が満たされる気持ちを覚えた。彼の笑顔は彼女に安らぎを与え。レイは安心の気持ちのなか安らかに目を閉じた。

「……バルバトス……お前なのか?」

誰にも聞こえない感じでシンジは初号機に声を出した。

エントリープラグ内。LCL注入。

「これ、なに?」

「大丈夫。肺がLCLで満たされれば、直接血液に酸素を送り込んでくれます。すぐに慣れるわ」

やがてLCLはプラグ内を満たし、シンジは目を閉じると言われた通りゆっくりと肺の空気を吐き出しLCLを取り込んでいく。呼吸が落ち着くとシンジは体の力を完全に抜く。

「ホントだ。息出来る」

「さすが、男の子ね。ところで、シンジ君。何故上半身脱ぐの?」

ミサトの言う通り。シンジは制服の上半身を脱ぎ。その逞しい上半身を晒していた。

「んー。なんとなく」

「すごい筋肉ですね」

「あれで本当に中学生なのか？」

オペレーターの青葉と日向が感想を延べる。マヤと言うショートヘアー女性に至っては。

「はわわ」

顔を赤くしていた。発令所では初号機の発進プロセスが進み。人々が機敏に動いている。

「主電源接続」

「全回路動力伝達」

「第二次コンタクトに入ります。A10神経接続異常無し」

「思考形態は日本語を基礎原則としてフィックス」

「初期コンタクト全て問題無し。双方向回線開きます。シンクロ率……ええっ?」

マヤの驚きにリツコが反応し近づく。

「どうしたの、マヤ？」

「シンクロ率が……120.0%です!!」

その場に居た全員が驚き。マヤのいるコンソールの画面を覗き見た。

「ひゃ、ひゃく!?!」

「うそっ!?!。いきなりっ!?!」

「まじかよ……」

「何者だ?。あの子」

それぞれの反応を他所に冬月とゲンドウはひそひそと話した。

「碇……これはどういう事だ?」

「……わからん……くそ」

組んだ両手の奥に隠した口の中で歯を噛み鳴らしながら、ゲンドウは驚きをかくしながら台詞を吐いていた。

オペレーターやメカニックスの人たちはすぐに持ち場に戻り作業を開始した。驚いてる場合じゃなかったと直ぐに冷静になる一同であった。

「ハーモニクス、すべて正常値。暴走の危険ありません」

「いけるわ！」

無事に起動しリツコは喜びの声を上げる。ミサトは深呼吸して指令を下す。

「……発進準備っ!!」

号令を受けてスタッフやメカニックの人たちが慌ただしく動く。

「発進準備!。第一ロックボルト外せ!」

「形状確認!。アンビリカルブリッジ、移動開始!」

「第二ロックボルト外せ!」

「第一拘束具除去。一番から十五番までの安全装置解除」

「解除確認。現在、初号機の状況はフリー」

「外部電源。充電完了。外部電源接続。問題なし」

「了解。EVA初号機。射出口へ!。進路クリアー、オールグリーン」

全ての発進寸前までの工程が終了したのをリツコは確認し。ミサトに言う。

「発進準備完了!」

ミサトが確認するとゲンドウの方を見る。

「了解……構いませんね?」

「もちろんだ。使徒を倒さぬ限り我々に未来は無い」

「碇。本当に良いんだな?」

冬月の小声の問いにゲンドウは何も答えず。表情を動かす事はなかった。

「発進!!」

ミサトの命令により、リフトにのった初号機が上昇して行く。やがて夜の帳に包まれた第3新東京を映し出したモニターに初号機が現れ、使徒と対峙する。それを見ながらミサトは呟く。

「……シンジ君、死なないでよ……」

その言葉は偽りではなかったが、—— “子供” を死地に送り出して おいて今更な台詞ではあった。しかし、罪悪感は今でも感じている。あの時、助けてくれたシンジを思い出しては無事を祈る気持ちは確かにあった。

第二話・戦慄のシンジ

「ミサト。いきなり、敵の目の前に出るなんてマズイと思うよ」
「あつ」

よく考えてみれば、わざわざ新兵器を真ん前にだすのは愚の骨頂。指令室の空気が氷点下な程、冷たい空気が通っていた。子供を怪物の真正面に放り出すと言う愚かな失態。一般的な論理感をもった大人はまず焦る。しかし時は遅し。言い訳を考えていた自分にミサトは後悔した。しかし、誰も咎める人間もない。

「それで、動かし方は？」

「か、考えた動きがそのまま反映されるわ。歩く事だけを考えてみて」
「次は、しっかりしてね」

それだけ言ってシンジは動きをイメージした。この感覚。シンジには見覚えがある。嘗て己の魂が体感した。戦いの記憶。リフトのロックが外れ。初号機が動き出す。一步。その足を進めた。

「歩いた！」

リツコはモニターに映った初号機を見て身を乗り出す。

「ホントに動いた。ずいいな」

シンジは二歩目を踏み出し。少し立ち止まる。両腕の動きをイメージした。両腕を広げ、右掌に左拳を打ち鳴らす。

ガキンツ!!。

「だいたい、わかった・・・後は」

シンジは次の動きに意識を集中した。その行動は、駆けるー

「まさか、真正面から行くつもり!?。シンジ君っ!!」

「初めてなのにここまで動かすなんて彼、何者？」

使徒に向かって走り出す初号機。そして右手を振りかぶり、右ストレート突き出す。しかし、その拳は使徒の目の前に出現した。八角形のバリアな阻まれた。

「ATフィールドっ！」

リツコはモニターに映し出された。使徒が展開したバリアを見て声をあげる。

「駄目だわATフィールドがある限り……」

使徒の展開したATフィールドに初号機の攻撃が跳ね返された。

「……使徒に接触できない!」

リツコが半ば、諦めかけた時。シンジからの通信が入った。

「ねえ?。これ何?。何か硬いけど」

「ATフィールド。使徒のバリアみたいなものよ。シンジ君!。一度距離を取って!」

「わかー」

シンジが次の台詞を言う前に、使徒の身体を中心にある赤い球体。『コア』が赤く光る。その光が使徒の右腕の筋をなぞる様に走り、腕が少し膨らむ。そして。使徒はその腕を振り上げる。

ガンツツツツツ!!。

その衝撃で初号機が高く飛ばされた。

「……え?」

思わず、間拔けな声を上げたリツコの他にゲンドウも驚きを露わにした。予想外の使徒の反撃の行動にみな言葉を失った。初号機はそのまま落下に身を任せ、ビルが崩れる音を立てながら転がって行った。しかし、すぐに初号機は態勢を上手く立て直した。衝撃が強かったのか。地面を削る感じで止まろうと踏ん張り。何とか止まった。

「痛いなコレ。なんで?」

鼻血を垂らしたシンジの声に皆、我に返る。

「し、シンジ君、落ち着いて!。あなた自身が殴られてる訳じゃないわ!」

「エヴァの防御システムは?」

リツコがマヤに確認を取る。

「シグナル作動しません!」

マヤはモニターを見つめながら報告する。

「フィールド、無展開!」

オペレーターの日向が声を上げる。

「だめか!」

リツコは主モニターに映る初号機に目を向ける。初号機は何とか

立ち上がり、状態を確認する仕草をした。

「シンジ君！。動ける!?!」

「大丈夫。『慣れた』。武器ないの?」

「えっと……ごめんなさい。あるのは肩のウエポンラックにある。プログレッシブ・ナイフしかないの」

そう聞いたシンジは確認した。初号機の肩のラックが開き。ナイフの柄が出る。それを抜いて。ナイフを確認した。こちらに歩みを進める使徒を見て。シンジはナイフを構えた。しかし。シンジの視界があるモノを見つけてしまった。

「っ!?!……ミサト!」

「何!?!。シンジ君!」

何か異常が起きたのかと思いい声を上げるミサト。シンジの次に言う台詞は予想外のものだった。

「子供が北東の道路の脇に倒れてる!」

「何ですってっ!?!」

シンジが初号機の指を動かして方角を合図する。モニターがシンジの示した所を拡大する。

「女の子!?!」

「まさか、逃げ遅れ!?!」

モニターには少女がうずくまって怯えてる少女がいた。足を怪我して動けないでいる様だ。

「ミサト……このままじゃ本気を出せない。避難させる事出来る?」

「わかったわ。直ぐに保安部を出動させる!」

「使徒は僕を抑える。動きを止めてる間に頼むよ。ミサト」

「どうする気!?!。シンジ君」

リツコは声を上げたが、シンジはそれだけ言うのと初号機は走り出す。使徒も自分に向かってくるのを確認したのか動きを止めた。

シンジはイメージした。止める行動を。使徒を抑える方法を。そしてシンジが出した結果は。使徒に向かってATフィールドを展開した。

「ATフィールドの発生を確認っ！。発生原は初号機です！。でも、これって……ありえない」

初号機が発生させたフィールドが使徒を囲む様に展開した。ナイフの持っていない片手を突き出し。使徒を『捕まえた』。使徒はもがくが初号機が出した『檻の壁』に身動き取れなかった。

「こんなこと……まさか、一瞬で使徒のATフィールドを中和したの？。いえ、違うわ。なんて強力な浸蝕なの。シンジ君。貴方は一体？……」

「ミスアト……まだ？」

使徒が更に暴れだし、壁を叩いたり、もがき続ける。初号機の突き出した手に限界が来てるのか、震えだした。

「シンジ君、要救助者は確保したわ！命に別状は無いわ。付近に別の要救助者が居ないかカメラで確認したけど市内はもぬけの殻ね。貴方のお陰よ、ありがとう」

ミスアトからの報告を聞いたシンジはフィールドを解いて、バックステップで下がる。フィールドを出していた手を振り。具合を確かめる。

「ん……。よかった。じゃあ」

使徒が初号機に向かって来る。その長い腕を振りぬき頭部に掴みかかる。刹那――

ガコンツツ!!

使徒が横薙ぎされて吹き飛ぶ。

「思いつきり、潰せるね！」

そう言つて、シンジは右手で鼻を擦り。操作レバーを握り直す。初号機はナイフを持っていた手からATフィールドを展開。その展開の形状が予想外のモノだった。マヤが報告する。

「しよ、初号機。ナイフからATフィールド展開。鈍器の様な形状になりました!!」

「ATフィールドを武器の形に!?!。こんな事が出来るなんて!?!」

「凄いわっ!!。シンジ君っ!!」

リツコは更に驚愕し、ミスアトは驚くしかできない。誰もが目の前の

光景に驚いた。それはゲンドウも例外ではない。

「碇……これは」

「……シンジお前……」

初号機が立ち上がった使徒に駆ける。ATフィールドで形成したメイスを振りかぶり、使徒に叩き込む。強く。激しく。初号機は使徒にメイス、膝蹴り、ブロー。を叩き込む。使徒も反撃するが、それより速く初号機は小さく躲しカウンターを決める。使徒は転倒し、更に初号機は攻め込む。使徒の仮面に向けてメイスを叩きこむ。更に振り上げて、叩く。振り上げて、叩く。メイスで使徒を解体作業の様に暴力の嵐を吹き上げる。誰もが言葉に詰まる。モニターに映る初号機による一方的な攻撃に使徒は活動停止寸前だった。まだ、起き上がり態勢を立ち直そうとするが初号機が踏みつける。そして。

「終わりだ……ッ」

初号機は止めにメイスを弱点らしい部位の赤い球体に突き刺した。使徒はボロボロの腕を上げるが、空しく力尽きその活動を停止した。

「終わったよ。ミサト。次はどうすれば良い？」

シンジの声が発令所に響く。ミサトは頭を一つ振って気を取り直した。そして命令を下す。

「現状、報告して！」

「……パターン青、消滅。使徒、殲滅を確認！」

「……初号機、損傷軽微！」

彼等の報告に頷いたミサトはシンジに告げる。

「シンジ君。お疲れ様。今、回収用のリフトを指示するからそっちに向かってちょうだい」

「わかった」

ミサトに肩を叩かれた日向がキーボードを叩き始めると、続いてモニターの初号機が動き出した。それを見てミサトはリツコに小声で尋ねる。

「リツコ。あれは何なの？。初号機の動きもそうだけど。シンジ君は何者なの？」

「わからないわ。……調べてみないと……」

初号機で移動してるシンジはふと夜空を見た。

「あっ……三日月だ」

その欠けた月が初号機を照らし輝いていた。その月を見てシンジは初号機の事を考えた。

(この感じ……懐かしい。バルバトス。やっぱりお前なんだな)

第三話・アラヤシキモドキ。

使徒を何とか倒し帰還したシンジはミサトにシャワールームまで案内され。

ＬＣＬを洗い流した。シンジ的には出た後の濡れる感じが少し苦手だった。シャワーの音と

水が全てを洗い流してくれる優越感を初めて体感した。

「シャワーを浴びるのが、こんなに気持ちいいなんて何時ぐらいだろう？アトラはお風呂は大事だとか言ってたっけ。懐かしい・・・」

そしてシャワーを浴び終えて部屋から出るとミサトとリツコが待っていた。

「終わったかしら？シンジ君」

「んっ」

笑顔で話し掛けたミサトにシンジは軽く返事をして首を傾げた。

「赤木・・・さん。だっけ？何か用？」

「精密検査よ。EVAに乗った事で異常がないか調べるの」

「ほら、シンジ君。鼻血出たでしょ？怪我也含めて検査したいの」

リツコとミサトの話聞いて、シンジは少し考える仕草をした。少しして声を出す。

「何か爆発物とか、付けるの？」

「そ、そんな事しないわよ！私達はシンジ君を心配して来てるのよ」

ミサトが慌てて反論するとシンジはミサトを見た。シンジの目が見つめる。時々ミサトは思う、この子の目は中学生男子がする様な目ではないとその目に見られると緊張する。

「んっ。わかった。怪我の方は大丈夫だよ。もう治ったし」

鼻の辺りを感じるシンジを見てミサトは優しくシンジの肩に触れる。

「それでもよ。何か異常があったら大変だから」

「ミサトがそう言うなら。わかった」

「良かった。それじゃあ、行きましょ？」

「ん」

安心したミサトはリツコと一緒にシンジを連れてNERVの医療

室へ行くのだった。

―医療室。

まずは、身体診断として。上着を脱ぐシンジ。その上半身は鍛えてる所は鍛え。見事な男性の肉体美を体現している。そこでミサトがまず目にしたのがシンジの背中。主に脊椎の辺りにある『傷跡』だった。

「シンジ君・・・その背中・・・」

「ん？ああ、これ？大丈夫。何ともない。昔に出来たモノだから」

「・・・これは」

リッコも見て、驚く。まるで『何か』を脊髄に埋め込んだ様な手術跡の様だが。それにしても異様である。

「少し、触っても良いかしら？」

「いいよ」

「ちよ、リッコー！」

科学者ならではの好奇心だろうか。シンジの背中にある『突起を思わせる筋肉の筋』を確かめる。EVAの操縦に何か関係が有るのかと考える。幾ら手術から改善する期間まで治っていたり、鍛えてこうなったとは、あり得ない線を引いていた。

「その背中、後で見るけど。まずは貴方の状態を調べるわ。座って」
「ん」

そして始まる診断。医療に関係する診断を一通り受け。シンジの背中をレントゲン写真やら感度やらX線とかを済まし、それで終わった。ミサトは先に出て行って、服を着て去ろうとするシンジをリッコが引き留める。

「シンジ君・・・貴方の背中。何か事故で特殊な手術をしたのかしら？」

「んー。叔父さんは『神の祝福』とか言ってたけど・・・」

「神の？・・・シンジ君その話。後日聞かせてちょうだい」

「うん。またね。赤木さん」

「リッコで良いわ。またね・・・」

話し終え、リッコはシンジが去った後、一枚の写真を手に取った。

「シンジ君・・・貴方は。何者なの？」

その写真は特殊なレントゲンで撮ったモノ。脊椎の部位に影があった。『異様なモノが張り付いている』かの様に写っているモノがあった。

シンジが病室から出るとミサトが待っていた。

「終わったかしら？シンジ君」

「あー。終わったよ。何かうつ伏せになったり、背中を向けて立たされたりしたけど」

「そう。何か酷い事されなかった？」

「いや、何もなかったよ」

シンジの嘘を言っていない返答にミサトは安心した。しかしながら一末の不安はある。あの背中への傷が幼いシンジの身に何かあったのかと心配な気持ちが生まれていた。すると廊下からカラカラと移送ベッドが運ばれる音がした。シンジがその音がする方に目をやると、ベッドの上で仰向けに寝ている少女が通り過ぎる所だった。

「あ、幽霊の人」

「ち、違うわ。シンジ君。彼女は綾波レイ。貴方と同じのEVAパイロットよ」

「そうなんだ。酷い怪我だね」

「ええ。でも、彼女は貴方のお陰で酷い怪我を負ったまま出撃せずに済んだのよ」

移送ベッドのレイと目が合うがそれ以上は話さなかった。見送った後、ミサトは歩き出しシンジに振り向く。

「私達も行きますよ。シンジ君」

「何処に？」

「貴方の滞在場所を聞きに行くの。良い所に住めるといいわね」
「あるかな？」

そんな、他愛もない話を交わしながらシンジとミサトはエレベーターまで歩いて行った。

「これに乗るの？」

「そうよ。それじゃあ。さっそく」

そう言つてミサトは上の階へ行くスイッチを押す。やがて自らの階にエレベーターが到着してドアが開く。

すると、そこにはゲンドウがいた。

「ッ!?!」

ミサトは驚くも、何とか声を出さずにすんだ。初号機を出す前のやり取りを思い出し周りの空気が凍り付く。

シンジはその空気に気にする事なく少し笑みを向けた。

「久しぶりだね。・・・親父」

「・・・・・・」

シンジの声にゲンドウは何も言わず、エレベーターから早々に降りて立ち去った。どうやらシンジとは今は関わりたくない様だ。

「し、シンジ君。大丈夫?」

「ん?別に。挨拶しただけ」

ミサトは恐る恐る聞くも、シンジは普通の表情で答えた。何をどうしてか、そこまで『普通』でいられるのか不思議である。親子の関係がこんなモノで良いのかとミサトは思うのであった。

「乗るんですよ。エレベーター。行こうよ?」

「・・・・そうね。行きましょ」

シンジは何もなかったかの様にミサトに話し。一緒にエレベーターに乗った。

「二人で、ですか!?!」

シンジの滞在先を聞いてミサトが驚く。シンジの方は気にする事なく聞いていた。

「そうだ。彼の個室はこの先の第6ブロックになる。問題はなからう」

係員は規定事項を冷たく告げる。

「わかった」

「それでいいの?!シンジ君」

ミサトは心配して表情を伺う。しかし、シンジは特に気にしてない

顔でミサトに返答する。

「住めば都って、叔父さんが言ってた。何とかなるよ。此処の様子だとそれほど酷くないし」

割り切った表情をミサトに見せて答えた。しかし、ミサトはシンジの孤独に自分と同じものを感じたのか、決心をする。シンジの手を握り、ミサトは言う。

「シンジ君。家に来なさい！」

「ん？」

そんな事を言うミサトにシンジは首を傾げた。

「なんですって!?!」

研究室でペンを握っていたリツコが受話器から聞こえた内容に耳を疑う。

「だからあ、シンジ君は、あたしところで引き取ることにしたから。上の許可も取ったし。・・・心配しなくても、子供に手え出したりしないわよ」

ミサトは公衆電話で事の成り行きを説明する。しかし受話器のりツコは。

「当たり前でしょうっ！全く何考えてるの！あなたって人はいつつも!!」

ミサトの冗談に反応してリツコは大声を上げる。そしてミサトは耳から受話器を外して苦笑いする。

「相変わらず、ジョークの通じない奴・・・」

シンジを助手席に乗せたミサトの車は、すっかり日の暮れた地上を走っていた。ミサトは、シンジを自宅に

案内する途中で提案をする。

「さあ〜って、今夜はパーッとやらなきゃね！」

「何かやるの？」

封筒を見て、外の風景を眺めてたシンジがミサトの方を見る。

「もちろん新たな同居人の歓迎会よ」

ミサトはハンドルを握りながら得意げな顔を見せる。コンビニに

車を止めたミサトは、大量の食べ物や飲料を買い込む。シンジは見た。ミサトがチョイスする食糧が弁当である事を。

「ミサト。もしかして、料理出来ない？」

「ギクツ!!」

シンジの台詞にミサトが固まる。どうやら凶星の様だ。ぼつの悪い顔をシンジに向ける。

「い、良いじゃないっ！今日は豪勢に良い物を選ぶしっ！……そ、それなりに出来るわよ？」

「いいよ無理しなくて。出来ないんでしょ？」

「……はい」

自分の提案で歓迎会とかしようと思案した当事者が料理できないとは、恥ずかしい。コンビニ弁当と飲料水を見て誰もが楽しく出来るだろうか。言い訳を考えたが、シンジの目を見て嘘は通じないと悟ったミサトであった。

「うん。わかった。僕に任せて」

「えっ？」

「叔母さんから、料理の事色々教えてもらったから。一通り出来る」

「安い物籠の食糧を半分戻し、残り半分は食材をいれる。今夜のテーマは『肉野菜炒め』。誰もがその気になれば手軽に作れる家庭的料理。シンジは主婦ならではのスキルを活かし、一目で良い食材を見極める。」

「シンジ君。本当に料理……作れるの？」

「うん。二人が言うには料理は覚えておいて損はないって。覚えてみて悪くなかった。叔父さんとか絶賛してくれて、楽しかったかな……」

過去を懐かしむシンジを見て。ミサトはシンジの背中の傷を思い出した。聞こえがいい様に話しているが、あの傷跡がもし、もしも……。

「シンジ君。ごめんね。私が提案したのに。この有様で……」

我ながら情けないと痛感するばかりで、謝罪の声しか出てこなかった。シンジは籠に材料が揃うのを確認するとミサトを見る。

「ミサトが僕を拾ってくれた。せめてもの、礼かな。ありがとう」
そう言つて。シンジは微笑んだ。その微笑みにミサトの肩の荷が無くなった気がした。次はちゃんとした歓迎会をやりようと思った。

「済まないけど、ちよつと寄り道するわよ」

買い物済ませたミサトは、ある場所をシンジに見せたくて、家とは別の方に車を走らせる。

「どこいくの？」

大量荷物で膨れ上がったビニールを抱かえたシンジは、ミサトの方に目を移す。

「ふふん。イ・イ・ト・コ・ロ」

そう言つて、ミサトは車を走らせ。カラツとした態度をシンジに見せる。丁度、街の向こうに夕陽が沈んでいく時間だった。山のふもとから、太陽が最後の光で街を照らし、鮮やかなオレンジ色に染めていた。ミサトは、その景色を見渡せる丘の上にシンジを案内した。

「何も無いね」

「これからよ．．．ほら、時間だわ」

腕時計を見ていたミサトが街に目を向ける。すると、街じゅうにサイレンが鳴り響き、地面のいたるところから高層ビルが伸びていく。

「ビルが．．．すごいな」

「これが、使徒専用迎撃要塞都市、第3新東京市。私たちの街よ」

ミサトは、シンジにこの街に慣れて欲しかった。少しでも身近に感じてもらおうと、この場所に案内した。ミサトは選ばれた子供の功績を称えたかった。

「そして、あなたが守った街」

「そうか．．．僕は、守れたんだな」

シンジの表情が少しだけ、笑みを浮かべていた。ミサトもシンジのそんな表情を見て。連れて来て良かったと思うのだった。そして脳裏にシンジの背中の傷跡を思い出した。碓司令との対面でもあの時ゲンドウを激怒させた程の顔をしたシンジ。今の様に安らかに微笑むシンジ。無表情のシンジ。まるでシンジは様々の顔を使い分けて

るかの様だ。果たして、本当のシンジの『顔』とはいったい？。そんな事を片隅に思い。共に家へ向かうのだった。

「シンジ君の荷物はもう届いてると思うわ。実はあたしも先日この街に引っ越して来たばかりでね。さ、入って」

コンビニの袋を手を持ったミサトは、廊下の先にある自分の部屋へとシンジを案内する。

「へー。お邪魔します」

「シンジ君？ここはあなたの家なのよ」

きよとんとするシンジを見かねたミサトはミサトは玄関に入るように促す。

「そして、こういう時はただいまと言うのよシンジ君」

ミサトを見て、シンジは心が少し満たされた気がした。

「ただいまっ」

ちゃんと答えたシンジに、ミサトは明るい笑顔で答えてみせる。

「お帰りなさい」

「まあ、ちよ／＼ち散らかってるけど、気にしないでね」

ミサトが部屋の明かりを点けると、辺り一面に缶コーヒートの空き缶と一升瓶の山が出来上がっていた。

出しっぱなしのダンボール。食べ残しのゴミ、散らかった服。

「……………」

シンジは目の前に広がる光景を見て『絶句』した。その時、綺麗好きだった叔母さんの『言葉』が蘇った。

「あつ、ごめん。食べ物は冷蔵庫に、って…シンジ君っ！どうしたの!？」

シンジはこめかみを抓っていた。そして、ゆっくりと。

「……………ミサト」

低い声で。顔を上げる。

悪寒がした。ミサトの本能が警告音を鳴らす。『ヤバイ』。この時ミサトは気づいた。この子に自分の醜態を見せた場合どうなるか。今気づいても後の祭り。気だるい疲れも吹き飛び。まずい事をした

と後悔の考えで一杯だった。次のシンジの行動に恐怖を覚える。

「しっ、シンジ・・・くん?」

潔癖の顔。シンジはミサトを見て次の台詞を言う。

「掃除しよう」

「・・・はい」

ミサトの返事にシンジは行動を開始した。

「ミサト。燃えるゴミと燃えないゴミは分けてって言ったよね?」

「ごめんなさいっ!!仰る通りですっ!!」

「この冷蔵庫は?食材が入ってないどころかビールでいっぱい?」

「すみませんっ!!ホントっ!スミマセンっ!!」

「・・・これもゴミか?」

「アッー!違うのっ!シンジ君!この子はペットのペンペンっ!!」

「ペットを飼ってるなら、部屋は清潔にしないとダメだって叔母さん

が言ってた・・・」

「ホントっ!!スミマセンっ!!ゴメンナサイっ!!」

一匹のペンギンの脇を両手で持ち上げて首を傾げるシンジを全力で止めに行くミサト。夜が長く感じるのをミサトは思った。そして、しばらくして。

「ぐ、ゴミ捨ててまいりました・・・」

死にそうな顔でミサトが帰って来た。すると部屋から良い匂いが漂って来た。

「お帰り。ミサト。簡単なモノが出来てるから食べて良いよ」

ミサトがキッチンに入るとそこには三角おにぎりが10個と味噌汁が出来ていた。

「お、おおく!ホントに料理出来るのねっ。シンジ君」

「肉野菜炒め。もうすぐ出来るから。おにぎり、少し食べても良いよ」

そう言っつてシンジは調理に集中する。ミサトは席に付き。おにぎりに手を伸ばす。そして口に入れる。

「むぐっ!」

ミサトの口の中で歓喜の音が鳴り響く。ほうばる毎に美味なる味が広がる。

「なっ、なにこれ!？」

素早く二個目を掴み、再び食べる。そして、味噌汁を含むと歓喜のオーケストラが鳴り響く。

「肉野菜炒め。出来たよミサト。此処からは手を合わせてね？」

シンジがそう言っただけで運んできたのは皿に盛った料理。焼き肉のタレが上手く絡み。香ばしい香りが漂い。ミサトの食欲を加速させる。シンジは箸と乗せ皿を準備して、席に付いた。

『いただきます』

食前の挨拶をして、二人は食べ始める。またしてもミサトの口の中で歓喜の歌が響く。肉野菜炒めがこんなに美味しいとは思わなかったと今日、この時思っただけだった。

「ごちそうさま」

「おそまつさま」

ミサトが食べ終え。シンジは皿の片づけをする。

「すごく、美味しかったわ・・・どうやって作ってるの?」

「ん? 焼き肉のタレと片栗粉。コレが大事って叔母さんが教えてくれた」

「へえー。良い叔母さんね。シンジ君」

「うん。味噌汁はたしか?・・・愛情と加減とか? 大事だと教えてくれた。美味しかったでしょ?」

「確かに・・・美味しかった」

ミサトはそう言っただけで幸せに浸る。シンジの背中を見て。ある事を想った。シンジの背中に出来ていたアレ。

シンジを引き取った叔父と叔母によるシンジを育てた環境について。ここまで出来た子が酷い目にあっていたとは思えないが・・・しかし、ゲンドウとのやり取りや。初号機のシンクロー率。あの容赦のない戦い。この子は何者なのか?。碇シンジとは何者なのか?。と考えが浮上する。ちなみに、ペンペンは無事で、片隅でシンジの作ったご飯をほうばっていた。その様子に微笑んでミサトも改めてラフな格好に着替え終え。皿洗いを終えたシンジのいる部屋に行く。

「・・・シンジ君?」

「ん？。なにミサト」

部屋の整理をしていたシンジに声を掻ける。少し迷いをしたがミサトは勇気を出して聞くことにした。

「アナタの叔父と叔母ってどんな人・・・だったの？」

「んー。叔父さんは。なんと言うか・・・おもしろい人だった」

「おもしろい？」

ダンボールを床に置き、軽く背伸びをしながら答えるシンジ。

「色々教えてくれた。熊の狩りとか、銃の扱いとか。主に一人でも『何とか生き抜く』術を教えてくれた」

「そう・・・。あつ、せつかください。あっちの席で話しましょう。立ち話も何だし」

「うん。いいよ」

リビングに二人して対面する様に机の椅子に座り。ミサトはビールを用意し、意を決してシンジに口を開く。

「シンジ君。まず、預けられた叔父さんと叔母さんとの生活はどんな環境だったの？」

「・・・ん」

シンジの視線が斜め上に動き。少し考える仕草を見せる。

「あつ、いやなら話さなくても良いのよ。ただ。アナタが何故あんなに強かったのか知りたいだけ」

「いや、大丈夫だよ。ミサトなら話しても大丈夫だと考えただけ」

「そ、そう？」

その思考もすぐに終わり、シンジはミサトに向き合う。一度ビールを一飲みし、会話を続ける。

「叔父さんは、『おもしろい父親』みたいな人だったかな。ある日、最初に預けられた親戚の家に行った僕の前に来て引き取るって言ってくれたんだ」

「他の親戚に最初は預けられてたの？それでどうなったの？」

「親父が僕を置いて来た所は、僕の事、少し疎ましく思ってたから。叔父さんのお陰で余計な面倒を見ずに済んだとか言ってた」

「・・・そう。大丈夫？シンジ君、これ以上話さなくても良いのよ？」

「平気。叔父さんも叔母さんも、僕の事受け入れてくれて。食べさせてくれて。色々教えてくれて楽しかった」

「そう・・・よかった」

シンジは楽しかった思い出を懐かしむ様に話す様子を見て、心が楽になった。人の過去を聞くのだ緊張を紛らわす為にビールを一飲み。そしてここからが本題だった。

「シンジ君。アナタの背中中の傷、何があったの？」

「これ？」

シンジは自身の背中に視線を動かす。

「リツコと一緒に見たの。アナタの背中、主に頸髓の辺りが異様な発達をしてるって聞いたの。もしかして、大きな事故の怪我？」

「んー。事故じゃない。これは僕が7歳になった時に付けるって叔父さんに言われたかな」

「っ!?!つける?もしかして・・・なんかされたの?」

ミサトの頭の片隅に虐待の文字が浮かび上がる。シンジの表情からしてその様な事を受けた子供がする表情ではないと解る。しかし、シンジの口から信じられない事が語られる。

「アラヤシキモドキ。叔父さんはそう言ってた」

「アラヤシキ?・・・なんなの?」

「確か・・・古代のある遺跡から発見された『蟲』とか叔父さん言ってた。虫の漢字が三つの方」

「蟲っ!?!ムシって何なのシンジ君っ!」

「僕の背中には神経の域まで『寄生』?だったかな?アラヤシキモドキが埋め込まれているんだ。でも、害はない。一度寄生すれば後は体の一部の様に変異するって言ってた。それで手術を受けたんだけど・・・あれ、最初は痛かったかな。叔父さんが言うには寄生しやすい液を注入するから頑張れとか言われたっけ?」

蟲。手術。寄生。神経の域。ミサトの頭に信じられない言葉が記憶される。シンジは特に不快もなく、『普通』に話す。

「埋め込まれてからの7日は安静になって叔母さん。よく看病してくれたな。学校もそれくらい休んだし。一応、何の為にやったのって聞い

てみたけど。たしか……『母さん』がどうか言ってた」

「シンジ君の、お母さん？」

「顔はあんまり覚えてないけど。『良い母親』だった記憶はあるよ。後は多くは語らなかつた」

「……そう。わかつたわシンジ君。もう良い」

ミサトは一度頭を抱えてシンジの次の台詞にストップを掛けた。一度頭を整理したくて深呼吸する。

シンジはそんなミサトを見て首を傾げる。

(蟲？アラヤシキ？何なの？この子はどうして普通にそんな事話せるの？シンジ君のお母さんは確か、死んだって聞いた。古代って……シンジ君の叔父さんは何かの考古学者だった？怪しい研究？だめ。理解が追いつかない。一度調べ直した方がいいわね)

「ミサト？」

シンジの声に俯いていた顔を上げる。シンジは表情に変化はないが心配そうな感じでミサトを見る。

「もしかして、気分悪い？」

「いえ、ごめんねシンジ君。そんなんじゃないの。その背中、今は平気なの？」

「うん。もう身体の一部になったから、何ともない。あと、顔の『作り方』も叔父さんに習った」

シンジのその台詞にミサトは初号機のケイジでゲンドウに見せた表情を思い出した。

「表情も、その叔父さんに？」

「うん。叔父さんが『ゲンドウに会ったら、まずは憐憫な顔を見せてやれ。向ける意味はわかるな？』って色々な表情の作り方を教えてくれた」

「そ、そう。いろんな意味ですごい人だったのね……。シンジ君はお父さん嫌い？」

ミサトの台詞にシンジは少し考え。思った事を口にする。

「好きか嫌いかって言われると……。あ、僕を見ていたあの姿勢。残念だったかな？親父の顔、僕を何かに利用する様な顔付きだった」

「利用……」

「だから、そう。……残念だな。僕の父親と言う人間は他の父親とは違う。少し会話した時わかった。親父は、僕の味方じゃない」

そう言ってシンジは立ち上がり。背伸びをする。

「シンジ君……」

「ミサト。僕は戦うよ。立ち止まらない。進み続ける。使徒って言う敵が来るなら。これからも戦うよ。誰かの命令とかじゃなく。自分の意思で。ミサトもそうしたんでしょ？」

「私は……そうね。ありがとう。シンジ君」

少し目線を逸らし、ミサトは自分の過去を思い出す。父の最後を。しかし。それも直ぐに改め。シンジを見て礼の言葉を口にする。

「もう寝るよ。話せて良かった。ミサトも何か話したくなったら言うてよ。聞いてあげる」

「あら、そう？じゃあその時は覚悟しなさいよ。長いんだから」

「うん。おやすみ。ミサト」

そう言って自分の部屋へ歩き出すシンジ。

「あ、待ってシンジ君」

その背中をミサトは呼び止める。シンジが振り向きまだ何かと首を傾げる。

「あく。そうじゃないわ。ただ……EVAに乗ってくれてありがとう。改めて、よろしくねシンジ君」

少し頬を赤らめ、ミサトは左手を出す。

「ん？」

「握手よ。シンジ君」

「……そうだね。よろしく」

そう言って二人は互いに手を握るのだった。

ある自宅に黒服の人達が入って来た。家内には人の気配はなかった。その代わり。リビングのテーブルに字が書かれてた紙があった。男の一人がそれを見ると紙にはこう書かれてあった。

『わたし達は好きにした。あとは君たちの番だ。神のしゆくふくがあらんことを』

その後、ある一軒家で爆破騒ぎが起きたと言う。

第四話・歩む力と生きる血潮。

「ミサト、これ見て」

NERVの研究室でリツコは一枚の写真を取り出しライトボードに張り付ける。その写真は特殊X線で撮ったシンジの背中であった。主に脊髄に蟲の形をした影が映っていた。更にもう一枚、蟲から神経の様な線が脊髄の奥まで届いている様子が映し出された。

「これは・・・シンジ君の」

「ええ。確かにこれは摘出不可能なくらいの域まで寄生しているわ。脊髄の神経の奥まで根を張っている。まさか、寄生虫の様なモノを子供に植え付けるなんて・・・。シンジ君の言ったとおり旧時代の産物なんてあり得ないわ。EVAのシンクロ率と、動きもこれが関係している可能性は高いわね。その叔父さんって何者なのかしら?」

「ねえ、リツコ。調べではシンジ君の叔父。『式瓶竜彦』は獵師と言う情報の他に何かあった?」

「いいえ実は保安部に彼の家へ事情を聴きこみに向かわせたのだけど。着いた時はもぬけの殻だったそうよ」

「そんな事が。それで、どうなったの?」

「ミサトは用意された椅子に座り、リツコの話を聞く。」

「遺書らしき紙を見つけたと報告にはあったわ」

自分の椅子に座っていたリツコは足を組み、ミサトに起き直る。

「遺書にはなんて?」

「わたしたちは好きにした。あとは君たちの番だ。神の祝福があらん事を。そんな事が書かれていたわ。意味が解らない。何らかの宗教に入っていたのかしら?」

そう言つて、リツコは遺書の写真をミサトに見せた。

「・・・でも、シンジ君は信者の様な口調とか素振りは見せなかつたわ。それでもシンジ君は洗脳されてる可能性があるというの?」

「どうかしらね。一応、彼の脳検査したけど、それらしきグラフはなかったわ。一応、その親戚の足取りを目下調査中よ。そう言えばこの蟲。アラヤシキモドキの『アラヤシキ』って言う語源。聞いたことが

あるわ」

リツコは一度タバコを吸い、思い出した事を話す。

「大乘仏教の言葉なの、具体的に言うとな人の意識の中でもっとも深い部分のことを指すの。阿頼耶が蔵、仮にこれを『人の肉体』と仮定しましょう。そして識、これは心を示しているわ。人の器に心という中身を入れる事で初めて『人』は完成する。意識の中でもっとも大切なモノが詰まっている『場所』と言ってもいいわ」

「リツコ。もしかして、シンジ君がああ『暗い中』民間人を発見出来たのって……」

「可能性はあるわね。この蟲は寄生したシンジ君の体の五感を向上させているかもしれないわね。現に彼の視力検査も、聴覚検査も良い正常値を記録していたわ。本来ならば見えにくい所も『見える』くらいにね」

そう言ってリツコは、シンジの検査資料を取り出しミサトに見せた。

「……これは、理想な健康値ね」

ミサトはシンジの叩き出した数値を見ながら呟く。リツコは一服し、シンジのX線写真を見る。

「これだけの情報じゃ足りないわ。ただ、この蟲がシンジ君の脊髄に寄生している事しかわからないの。いつそ手術してみようかしら……」

「リツコッ。それはないでしょっ!」

「冗談よ」

第3 新東京市立第壱中学校

ミサトが言うには学生の本分も大事よと言う理由でシンジはこの学校へと転校した。授業を受けてる最中に机のパソコンからメールが届いた。自身がEVAパイロットか否かと言う質問である。シンジはyesと入力した途端周りは驚き、彼に注目する。委員長である洞木ヒカリの一声で場は落ち着き、授業再開した。そしてしばらくすると一人の生徒が話しかけて来た。

「ちよつと、ええか？」

シンジの元に黒のウインドブレーカーを着て、角刈りの頭をした生徒が話しかけて来た。

「なに？」

「とりあえず、屋上へ来いや。話ある」

「・・・わかった」

何やら神妙な顔付きで話しかけて来たので何かあると思いシンジはついて行く。まずは様子見を決めた。

屋上。

「ワイは鈴原トウジ。よろしゅう。んでっ、こっちが相田ケンスケ」

「よろしく。転校生」

二人が自己紹介をして相田ケンスケと言う眼鏡を掛けた男子生徒が挨拶をする。

「うん。それで何か用？」

「転校生。オマエのお陰で助かったっ!!」

突然、ジャージの子が頭を下げる。シンジは喧嘩を想像してたが違った様だ。

「ホンマツ、あんがとなっ!!」

「僕何かした？」

シンジが首を傾げケンスケに問う。

「こいつの妹が避難で逃げ遅れた時な。紫のEVAのお陰で助かったって言ってたんだよ」

「あー。あの時の」

シンジは見つけた女の子を思い出した。鈴原トウジの妹だったよ
うだ。

「妹の怪我は大したもんやない。転校生が暴れて出来た怪我やない
ゆうとつてな。ホンマ、あんがとっ!!」

「うん、無事で良かった。家族に何かあったら嫌だったし」

「そうか。ほな、少し話そうか。丁度昼休みやし」

「わかった」

トウジは頭を上げ、屋上の丁度良いスペースに陣取り談笑する。

「ケンスケが言うにはな、すげえ戦いやつたと聞いたわ」

「そうそうっ、すごいよな転校生。なんかオレンジ色の武器を出したり、敵の動きを封じたりとか聞いたけど、どうやったんだ!？」

興奮気味でケンスケがシンジに聞きこむ。

「あれ?。想像してたら出来た」

「そうなのか、ずげーっ!!」

「しかし、転校生ホンマすごい戦いをしおって怖くないんか?」

「んー平気。戦わなかったら、こつちがやられてた。それに慣れてる」

「ホ、ホンマか。流石、パイロットやな」

少し考える仕草をして普通に答えるシンジを見て、只者じゃないと二人は感じた。

「そう言えば、碓つてよく見ると鍛えてんだな。やっぱ幼い内に訓練してたとか?」

「毎日筋トレしてた。強くないと何もできない。知ってるんだ。どれだけの楽しい日々があっても、どれだけ願っても、自分達の生きる世界は残酷だつて。叔父さんと叔母さんはよく言葉にした。この世界は力がなければ生きてけないって。強い人間になって生きるんだとか教えてくれた。『力』がなければ何も守れないのは当たり前。……うん。今でも強い人間になる為に僕は止まらない。そして『居場所』を見つけるまで進み続けると決めたんだ」

「……碓」

「……転校生」

「ん?」

シンジが何かに気付く、制服のポケットからケータイを取り出し確認する。

「呼び出した。僕行くね、二人と話せて良かった。またね」

「ああ。ワイもや、あんがと……シンジ。ワイの事は名前で呼んでええっ!」

「また、EVAの話聞かせてくれよ。俺はケンスケって呼んで良いからっ!」

「……ん。ありがとう」

歩き出したシンジの背中に声を掛ける二人にシンジは振り返り、笑みを浮かべて去って行った。

NERV本部。実験場。

「いい？シンジ君」

リツコは、再び初号機のコクピットに乗り込んだシンジに声を掛ける。

「いいよ。今日は何？」

背筋を伸ばす動作をしながらシンジは返事を返す。

「使徒には必ず、コアと呼ばれる部位があります。その破壊が、使徒を物理的に殲滅できる唯一の手段なの。ですからそこを狙い、目標をセンターに入れてスイッチ」

「コア？ああ。丸くて赤いやつだよね？」

マヤの説明にシンジは最初に戦った使徒の弱点らしい所を思い出す。

「ええ、そうよシンジ君。それじゃあ始めるわ」

リツコの声を合図にプラグ内の光景が変わる。実験場内から街並みを写したモノに変わる。

「へえー、凄いなコレ。ゲームみたい」

「二応、訓練だからね。シンジ君」

シンジの感想にリツコは微笑ましく答える。シミュレーションの画面に仮想の使徒が現れ、初号機がそれをハンドガンで破壊していく。

「これを的確に処理して。感覚で覚え込んで」

「わかった」

そう返事したシンジはハンドガンを構える。操縦桿を操作し感覚を覚える。

「あら、手慣れてるわね」

「銃の使い方、叔父さんに習ったから。○の所を合わせれば良いの？」

「ええ、それがセンターよ。覚えておいてね？」

言われてシンジは何となく、動かす。

「うん、わかった。始めよう」

シンジはシュミレーションの初号機を動かす、ハンドガンを構える。目標の使徒を撃ち抜く。命中。

「結構。そのままインダクションモードの練習を続けて」

「うん」

リツコはコーヒーを飲みながら、コントロールルームの窓から見える様子を伺っていた。ケージの中には、無数のワイヤーに固定され宙吊りになったエヴァ初号機の脳核によって、仮想の戦闘試験が行われていた。

「しかし、よく乗る気になってくれましたね。シンジ君」

マヤがリツコの方を伺う。

「そうね。私も彼の姿勢には時々驚かされるわ、ミサト貴方は？」

「私？そうねー。強いて言えば・・・ご飯が美味しかったわ」

そうやってミサトはシンジの作った肉野菜炒めの味を思い出す。

そして掃除の時のシンジの反応。

「そして、シンジ君はキレイ好き・・・」

「なんかあったのね・・・って言うか貴方チルドレンに料理させたの？」

虚ろな目をして明後日の方向を見て黄昏るミサトを見て、何かを悟るリツコ。

「シンジ君。色々鋭くて、ホント面目ない。今度は私からシンジ君に何かをしなきゃね」

気持ちを切り替えたミサトは改めて、シンジの様子を見る。適格に目標をハンドガンで撃ち抜く動作を繰り返す。

「ミサト。動く的で練習したいけど、出来る？」

「あら、大丈夫なの？」

「動かないのは慣れた。動いてるので慣らしたいかな」

「リツコ。出来る？」

シンジの要望にミサトはシュミレーションを変えられるか問う。コーヒーを飲みながらリツコはマヤに話し掛ける。

「マヤ。お願い」

「はい先輩。いくよシンジ君？」

マヤがコンソールを操作してシュミレーシヨンの的を動く様にモードを切り替えた。使徒的が左右に動く動作をする。シンジはセンターを合わせ、発砲。そして命中。

「うん。こっちの方がいいや」

シンジはそう言つて訓練を続ける。思つてたよりもやる気を見せるシンジに3人は感心した。

「次は別の銃で試してみましようか？シンジ君」

「いいよ」

ハンドガンから、ライフルに変えて訓練を再開する。少し外したりしたが、直ぐに感覚で誤差を修正したシンジ。

そうして、シュミレーシヨンは無事に終えた。

「そう言えばシンジ君、転校初日からクラスメイトから友達が出来たそうね？」

「ええ、無事に打ち解けられてホツとしたわ」

ミスアトは手すりに片膝をついて足をぶらぶらと遊ばせながら話した。

「あの時、逃げ遅れた子を助けたのが功を成したわね。ホントにあの子はすごいわ。ホントに逞しい」

「その逞しさに、家事やら色々お世話になつてゐみたいわね。パイロットのメンテナンスは貴方の役目でしょ？」

リツコはタバコを啜えながらミスアトを責める。

「ええ、だけどリツコは知つてるでしょ。私の……家事が、出来ないのを」

「ミスアト……」

何かを思い出したのか、口元を抑えて凹むミスアト。リツコはその様子を見て察した。彼女もミスアトの友人あるからよく知つている。家事ができないのを。

「ホント彼ホントに逞しくて私、色々言われたわ。部屋の掃除までされて、色々……イロイロ、ウウツ！」

「ミスアト、しっかりしなさい。こんど飲みに行きましよう奢るわ」
「リツコ〜！」

ノロノロと進むリフトの中、リツコはミサトの愚痴をよく聞いた。何でも清掃は部屋のモラルだとか、色々『沸く』とか姑の様に言われたと本人は話す。その時の顔が本人曰く、怖かったそうだ。

「それにしても、シンジ君は本当に良く出来た人間ね。いや、『出来過ぎて』いる」

「リツコ？」

「いくら、14歳までどれ程の経験があればあんな目が出るのかしら？」

「そう、よね。私も一応気になっているの初めてEVAに乗った時の彼、あの動じない姿勢はすごいわね。いくら私でもあそこまではならないわ」

かつて、ミサトは『地獄』を見た。父を失ったショックとセガンドインパクト、それは彼女に声も満足に出せない程の精神障害を患った。そして経過する時間の中彼女は無事に回復した。ミサトはシンジの目に多少の覚えがあった。あの目はこの世の地獄を克服した様な目だ。いや、それ以上の何かを見て来た顔付きと言っても良い。

「あの目、まるでエゾオオカミね」

リツコが呟いた言葉を聞いてミサトも思い出す。小さい頃、母から聞いた狼の話を。

「絶滅したと聞いた。あのオオカミのこと？」

「ええ。かつて神とも崇められていたケモノ。そして人に滅ぼされた。見ていて彼が何処か遠くへ行きそうな・・・いえ、もう私達の知らない所までたどり着いて人とは違うモノになっているかも」

「シンジ君は人間じゃないと言うの？」

「少なくとも、彼のあの目は人がしている目ではないわ。ケモノの目よ」

そう、初めて見た時からリツコは彼の異質に気が付いた。レイとも違うあの無表情。並の人間では出来ない透き通った目つき。無道とも言えるモノを宿してるシンジの存在を。

「ミサト。一応、彼の動向に注意しといた方がいいわ」

「・・・わかったわ」

第3新東京市立第壺中学校・屋上。

シンジは学校の屋上で筋トレをしていた。彼は暇があれば人のいない所で筋トレをやっている日課をつづけていた。しかも、上半身裸で懸垂をしている最中であつた。

「……ッ。……ッ。……ッ」

その様子を一人の少女が見ていた。怪我をして目に眼帯と右腕に包帯をしている綾波レイがシンジの元へ来た。

「何か用？」

手を放し屋上の地面に着く。タオルを拾い汗を拭いてレイを見る。

「非常招集」

「わかつた。すぐ行くよ」

制服の上着を着て、タオルと水の入ったペットボトルを素早くしまい歩き出す。そんな彼の背中にレイは声を掛ける。

「貴方が碇シンジ？」

「うん。君はたしか……綾波レイだね？」

シンジは振り向き、レイを見る。ミサトから聞いた彼女の名を思い出す。紅い瞳がシンジを見る。

「貴方は何者なの？」

「え？」

レイの質問にシンジの頭に？が浮かぶ。シンジは歩き彼女の元に着く。会話をする位置へ。

「碇司令の息子。でも違う。貴方が私に触れた時、温かつた。あの時私を見てくれた目が碇司令とは違った。優しかった。貴方は誰？」

レイの問いにシンジ斜めに首を傾げ、解答を考えると同時にゲンドウの笑顔を考えた。しかし、即座に『考えるのをやめた』。考える必要がなかった。そしてレイの解答を答える。

「僕は『人間』だよ。親父……父さんと母さんの間で生まれ、赤い血をその身に宿して生きている碇シンジというただの人間だよ」

「・・・そう」

レイの視線がシンジの空いている手を見る。シンジはその視線に気づき、手を少し動かす。

「どうしたの？」

何かをしたようなレイを見て、シンジが声を掛ける。レイはシンジに視線を移して答える。

「触れても、良い？」

「・・・いいよ」

動く手の方でシンジの差し出した手に触れた。同じ背丈なのにレイにはシンジの手が大きく、そして温かい何かを感じた。シンジの手を包み込み、華奢な指が感触を確かめる様に、温もりをもう一度味わおうとする様に、レイの指先はゆっくりとシンジの手の輪郭をなぞる。

「温かい・・・」

「そうか・・・綾波の手は綺麗だね」

シンジのその台詞に頬を少し赤くした。レイの中に確かな変化がシンジとの出会いで起こっていた。

「碓君の手、大きくて・・・本当に温かい」

第一発令所では、新たな移動物体が海より接近しているのを捕らえていた。

「移動物体を光学で捕捉」

シゲルが目標をモニターで捕らえる。

『E747も、対象を確認』

「分析パターン、青。間違いなく第5の使徒よ」

モニター情報を確認したリツコが、ミサトの方に振り替える。

「総員、第一種戦闘配置っ！」

ミサトの号令で主モニターが表示が切り替わる。

「了解、地対空迎撃戦、用意！」

指示を受けたマコトが号令を掛ける。

『第3新東京市、戦闘形態に移行します』

『中央ブロック、収容開始』

街じゅうの高層ビルが、足元のロックを解除して地下に収納されていく。それと入れ替わるようにして、迎撃用兵器を搭載したポッドが次々と地上に準備されていく。

『中央ブロック、及び第1から第7管区までの収容完了』

ジオフロントの天井に収納されたビルが伸びていく。

『政府、及び関係各省への通達終了』

オペレーターの通知に続いてシゲルが報告を入れる。

『目標は、依然侵攻中。現在、対空迎撃システム稼働率48%』

『非戦闘員及び民間人は?』

ミサトが最終的な確認を済ませる。

『既に、退避完了との報告が入っています』

シゲルが状況を伝える。

『小中学生は各クラス、住民の方々は各ブロックごとにお集まりください。第7管区迷子センターは、第373市営団に設置してあります』

避難所に集まった住民の中にトウジとケンスケがいた。ケンスケは、持っていたビテオカメラでテレビから情報を得ようとするが、『非常事態宣言発令中』の画面に切り替わったままでうんざりしていた。

——本日午後12時30分、日本政府より特別非常事態宣言が発令されました。新しい情報が入り次第、お伝えいたします。

「ううっ、まただ!」

ケンスケはビデオカメラに付いた小さなモニターをトウジに向けて見せる。

「また文字だけなんか?」

「報道管制って奴だよ。僕ら民間人には見せてくれないんだ、こんなビッグイベントなのに!」

その時、地上では国連軍の兵器が使徒に向かって一斉射撃を行っていた。

「税金の無駄遣いね」

リツコは全く効果がない行為に嫌味を言う。

「この世には弾を消費しとかなないと困る人たちもいるのよ」

ミサトは、ひとまず関係者が気が済むまでだまってやらせることにしていた。

「日本政府から、エヴァンゲリオンの出動要請が来ています」

早速シゲルから報告が入る。

「うるさい奴らね、言われなくても出撃させるわよ」

腕を組んで立っていたミサトは、低い声で愚痴をこぼす。

エントリープラグケージ。

「碓君。プラグスーツはちゃんと来た方が良いわ。身体をちゃんと守ってくれる」

「んっ？ そうなの。上は脱いだ方がスッキリするんだけど、わかったよ」

そう言っつてレイの助言に従い。上半身の方を羽織る。しかし、ぶかぶかして上手く着れなかった。少し首を傾げ、どうするのかと考えていると、レイが手伝う。

「碓君。手首のスイッチを押すの」

「あ、これ？」

レイの言う様に手首にあるスイッチを押すと空気が抜ける様な音が出て、プラグスーツがフィットする。

「こんな風に着るんだ。ありがとう綾波」

「いいの、一つ聞かせて、貴方は何故EVAに乗るの？」

「ここで見つけたんだ。やらなきゃいけない事も、守らなきゃいけない事も、『戦う』理由がここにはあった」

インターフェイスを頭部に付け、準備を終えたシンジはレイに声を掛ける。

「綾波は何故、EVAに乗るの?」

「絆だから、碇司令や、みんなとの、そして私には他に何も無いの」
そう言っつてレイは俯き、自分の手を握る。そんなレイを見てシンジはレイの頭を撫でる。

「碇君?」

「そんな事ないよ。探せばある。自分で探して、自分で見つけて、初めて絆の意味がわかる。命令とかじゃなく自分の意思で、オルガの時がそうだった……」

かつての記憶を思い出すシンジ。鉄華団で過ごした日々の記憶。もうあの頃には戻れないが楽しかった日々を。

何かを決めたのか、シンジは撫でていた手をレイに差し出す。

「綾波……。綾波が望むのなら、僕が『絆』になるよ」

言われたレイが顔を上げ、驚きの表情でシンジを見た。

「どうする? 綾波が自分で考えて、自分で決めて」

シンジの顔と差し出された手を交互に視線を移す。やがてオズオズと手を伸ばし、シンジの手に触れた。シンジは彼女の手を取り、握りしめながらシンジは優しい表情で言う。

「握手。これで僕と『レイ』は仲間だ。これからよろしくね。レイ」
「……うん」

地上の衝撃が、地下の避難所にも轟音として届いていた。

「ねえ、ちよつと二人で話があるんだけど」

ケンスケは落ち着かない様子でトウジの方を見る。

「なんや?」

「ちよつと、ね」

「しやあないなあ……」

トウジは友人の頼みを聞き入れる。

「委員長お!」

クラスメイトの学級委員、ヒカリの前にやってきた二人は彼女に声を掛ける。

「何?」

女友達と談笑していたヒカリは会話を止めて振り返る。

「ワシら二人、便所や！」

「もう、ちゃんとすませときなさいよ！」

ヒカリは、しょうがないわねといった様子で、トウジのぶっきらぼうな態度に眉をひそめる。

「シンジ君、出撃。準備はいいわね？」

プラグスーツをすっかり来たシンジがミサトからの通信を聞いて返事をする。

「いいよ。そう言えば、アレ出来た？」

「ええ。完成したのはつい先日、間に合ったわ」

リツコの返答にミサトが気になる。

「アレって？」

「シンジ君のオーダーよ。メイス。覚えてるでしょ？ シンジ君、あっちの方が使い易いって言うから作ったの。シンジ君。メイスは地上で出すからそこで受け取って。あと、飛び道具はハンドガンで良いのよね」

「うん。使い慣れたから丁度良い。バルバトス出るよ」

「発進！」

ミサトの号令で、初号機は地下発射台から打ち上げられた。

「エヴァに名前……」

「いいじゃない、親近感が湧いて」

リツコの呟きにミサトがフォローする。

地上に出たケンスケとトウジは、山の階段を上って、山頂にある神社の広場へと駆けて行く。

「すごい、これぞ苦勞の甲斐もあったというもの！おっ！待ってましたあ！」

使徒の姿をビデオカメラのファインダーに納めながらケンスケは興奮した様子を見せる。すると、丁度いいタイミングでエヴァ初号機が地上のゲートに現れた。

「……出た！」

初号機の右側から一本の柄が飛び出る。それを初号機掴むと引き抜きEVAサイズの鈍器。メイスを担ぐ。左手のハンドガンを使徒に向ける。

『ATフィールドを展開』

エントリープラグ内のコクピットにマヤの音声が流れる。

「なんか、エビみたい。アレが使徒？」

「そうよ。作戦説明したけど、確認ね。まずはハンドガンで使徒の注意を引いて。なるべく広い所に誘導するのよ？」

「了解」

シンジは、射出口の物陰から身を翻して使徒の正面に出ると、ハンドガンで5発連射して使徒の注意を引く。使徒は初号機の攻撃に当たり、5発撃ち終わると使徒がこつちを向く。

「来た。このまま広い所に行くよ」

「気をつけて、シンジ君」

メイスを担ぎ、その場を離れる初号機。使徒から一定の距離をとりながら後退する。ハンドガンを発砲。命中。しかし使徒にダメージはない。

「表面が硬い。やっぱり……内側か」

使徒を観察しているとミサトから通信が入る。

『シンジ君。A16地点まで使徒を誘導。そこで叩くわ』

「わかった。広い所に出たら倒せばいいんだね？」

シンジは使徒に自分を見失わない様に後ろを向き走る。横目で使徒が付いて来てるかを確認しながら動く。やがてミサトの指示したポイントまで着くとハンドガンを捨てる。担いでいたメイスを両手で構え、使徒と向き合う。先手は使徒。光の鞭が放たれるが初号機は躲す。鞭の当たった所は抉られ凄まじい威力を物語る。更に弐撃目。使徒の鞭が初号機に放たれる。

「っ!!」

その攻撃をメイスで受け流す。更に使徒の攻撃が繰り返される。

「しぶとい……」

その攻撃を躲したり、メイスで受け流し、ATフィールドを張って

防御する。次の攻撃を掻い潜り、メイスを繰り出す。使徒の腕にメイスの突きを放ち左側の鞭の使用を潰す。次にメイスを振りぬき使徒に叩き込む。

ガゴンツツツ!!!

鋭い音が鳴り響き使徒が倒れる。

「その調子よっ！ シンジ君！」

指令所でも初号機の戦う姿はモニターされ、優勢は初号機にある。シンジの強さにミサトは思わず声を出す。

「アレがEVAと使徒の戦いか！ なんて迫力満点な接近戦なんだ！」

「ほ、ホンマにセンスが戦ってるんやな……」

トウジとケンスケが遠くから状況を見守る。すると使徒に動きがあった。起き上がり十本の足をグネグネしながら起き上がる。

「お？ 起き上がった。なんかやるのか？」

ケンスケが使徒の様子をカメラで確認する。すると使徒の潰された左腕がぶくぶくと膨れ上がり、別の腕に再生した。斧成の腕に変形した。

「再生した！ それも別の武器を!？」

リツコが驚きこちらの優勢だった空気が変わる。使徒は初号機に接近し左の斧を叩きこむ。シンジはメイスでいなし、距離をとる。そのスキに使徒は光の鞭を素早く放つ。

ヒュンツツ!!

「……ッ」

初号機は足を取られ、バランスを崩す、地面に激突する。更に使徒が攻撃してくる。斧の攻撃で外部電源ケーブルが切断されてしまう。

「アンビリカルケーブル、断線！」

シゲルが状況を伝える。

「エヴァ、内蔵電源に切り替わりました！」

マコトが初号機の状態を報告する。

「活動限界まで、あと4分53秒！」

続けてマヤが詳細を伝える。

「……碓君」

発令所にいつの間にか、レイがいた。シンジの戦いの様子が気になって来たのだ。モニターにはケーブルを切断された初号機が映る。その様子を紅い瞳が見つめる。

「チイツ!!」

窮地に追い込まれたシンジが舌打ちする。更に近づけば斧と動く鞭による攻撃。距離を取ろうとすれば素早く鞭が初号機に襲い掛かる。なんとか態勢を立て直そうとするがその前に鞭がまた初号機の足を絡み取り放り投げた。宙を舞った初号機は、ケンスケとトウジの居る山の方へ飛来する。

「こっち来る!!」

「ケうああああ!」

二人が逃げる間もなく、初号機の巨体が音を立てて山肌に張り付く。

「……っ!?!」

コクピットからシンジが二人の気配に気が付いた。

「シンジ君、大丈夫、シンジ君!?!…ダメージは?」

ミサトがシンジに声を掛ける。

「問題なし。行けます!」

マコトがパイロットの現状を報告する。

メイスを右手から離さず何とか起き上がる。初号機の空いた手の左手元に目を向ける。

「トウジとケンスケ?」

「シンジ君のクラスメート!」

モニター映し出された二人のプロフィールを見てミサトは驚きの声を上げる。

「何故こんなところに?」

リツコは不測の事態を危惧する。使徒は空中を飛行して山に倒れた初号機に近づくと、容赦なく左の斧で攻撃する。

「……ッ!!」

初号機がメイスでガードするが更にもう一撃でメイスの柄を叩き

斬る。二撃目を繰り出そうするがその前に初号機は目の前に強力なATフィールドを展開。使徒を吹き飛ばす。地面に激突する使徒。初号機は斬られたメイスを拾い立ち上がる。

「初号機、活動限界まで、あと3分28秒！」

「マヤが残り時間を報告する。」

「……邪魔」

二人を一瞥し、起き上がった使徒に向かってボディブローを決める。仰け反り、コアが露わになったところで拾ったメイスを全力で叩き込む。瞬間、メイスの先端から発射された巨大な杭が使徒のコアに炸裂した。

「……ふう」

仰向けに倒れた使徒を見てまだ生きてると確認するシンジ。持っていたメイスを落とし、使徒に近づく。

「パターン青、まだ消滅していません！」

「マヤが現状を報告する。」

「シンジ君。いま、武器を送るからそれで止めをさして！」

「わかった」

ミサトの指示にシンジは初号機を操作して、近くの地面から出たウエポンラックからハンドガンを取り出す。そして使徒を踏みつけ、ハンドガンを向ける。そして、なんの躊躇もなく引き金を引いた。

パンツ！ パンツ！ パンツ！

発砲音が鳴り終わると同時に初号機は活動を停止した。

第五話・腹が減っては戦はできぬ。

初号機のアンビリカルブリッジにレイが足を運んだ。戦闘を終えた初号機のプラグからシンジが出てくるのを確認したレイはシンジの元に歩みを進めた。

「碓君……」

「ああ、レイ。ただいま」

シンジがレイを見て小さく手を振りながら歩いて来る。レイは考えていた。シンジの戦いを見て、シンジと話した時を思い出して、ゲンドウとシンジの違い。ゲンドウは零号機の起動実験の失敗に自分を助けてくれた。自分は必要とされている。そう思って彼を信じた。でも、彼が自分を見る目は違っていた。その優しい眼差しは『自分』を見ている目ではなかった。別の人を見ているそんな表情。それでも自分は必要とされている事を思い、彼の言う事に従ってきた。そして、シンジに出会った。彼は初号機のケイジで死にそうになった時、自分を助けてくれた。その時の彼の目は『自分』を見てくれた。触れていた手が『温かかった』。あのぬくもりが忘れられなくて彼に接触した。彼の目を見て話して、彼の手に触れて、彼の言葉を聞いた。『絆になる』それを聞いた時、自分の中に温かい何かが灯した。碓司令に与えられたモノとは違う。決定的なモノが。レイは何となくわかった気がした。

「碓君。私、人間になりたいの……」

「……うん」

シンジはレイの元で立ち止まり彼女の声を聞く。何かを言いたげ顔を見て、聞くべきだと判断した。シンジはこの状況を『よく知っている』。『後悔を知っている』。今聞かなければ『絶対に後悔する』。だからシンジはレイの声に意識を向けた。

「私、碓司令に必要とされてたから。司令の言う通りにEVA乗ったの。それが私の生きた証だと思ったの。それしかないと思ったの。私……それだけが私の与えられた全てだと思ったの」

「……」

「私、碓君が戦ってる時、不安だった。碓君が使徒に押されていた時、もう碓君の声が聞けないと、碓君のぬくもりが感じられないと思ったの……」

「……うん」

「この気持ち。初めてで、分からなくて。碓君に会えば分かると思っただの……」

「うん」

「碓君に会ったら……私、不安だったモノが無くなった。碓君に会いたかったの。この気持ち知りたかったの」

「そうか……」

「碓君、私。何処がおかしい？」

包帯ギプスをしてない方の左手で自分の胸に手を触れた。自分の心臓の位置に。シンジはそんなレイの頭に手を触れて撫でた。

「おかしくないよ。不安にさせてごめん。僕は生きている。安心してちゃんと帰って来たよ。だから、大丈夫」

「……碓君」

シンジに撫でられて。シンジの存在とぬくもりを感じレイは心に安らぎを安心を覚えた。

「大丈夫だよレイ。それは人間、誰でも持っているモノ。どこもおかしくない」

「……私も、人間？」

「当たり前だよ。そろそろ行くこうか？ ここにいと他の人達の邪魔になる」

「……うん」

しばらくして、シンジとレイの二人はその場を去り。初号機のケイジでは整備員達が動いていた。一人の整備員が端末で初号機の状態を確認する。

「ん？ なんだコレ？」

「どうした？ 斎藤。異常が見つかったか？」

「いやー。初号機の脹脛の辺り、何か、変なんだよ。何か……形状が少

し変わってる様な」

「ん？……いや、まさか」

もう一人の整備員も初号機の脹脛の部分を見た。少しだが、確かに凹みを思わせる部分と突起が見受けられた。その様子に整備員は傾げる。

「確かに……何かアレ、スラスターの様に見えるか？」

「装備、変わっていたのかな？ B型装備だったよな？」

「一応、確認しておくか」

「ああ」

↳ 医療室↳

「うーん」

リツコの検査をシンジは受けていた。機械に胸板を押し付けて調べる検査をしたり、心拍の検査を受けたりと出撃した後のシンジを調べていた。その様子をレイは眺めていた。付き添いにミサトも一緒である。現在、シンジはベットにうつ伏せになり、背中を調べられている。

「もういいわ、シンジ君。お疲れ様」

「終わった？」

「ええ。異常なしよ」

シンジはうつ伏せから起き上がり、上体の背伸びをする。リツコは手に持っていたカルテを見ながら少し考える仕草をした後シンジに声を掛ける。

「シンジ君。幾つか聞きたい事があるのだけど良いかしら」

「いいよ」

「シンジ君はEVAに乗っている時、背中に違和感はある？」

「んー。繋がってる感じ」

「繋がっている？」

シンジの返答にリツコの眉が少し動く。レイとミサトもシンジの台詞に不思議に思う。

「それは何時から感じたのかしら？」

「初めて乗った時から。バルバトスと一つになった感じ」

「シンクロ率が高い影響ね。それじゃあ重要な質問をするわね」

「いいよ、なに？」

シンジはベットから座っている姿勢で前に立つリツコを見る。

「ATフィールドをあんな風に武器に使う事が出来るなんて、幾ら貴方が『普通じゃなくても』あり得ない」

「ちよ、リツコ……」

少し棘のある質問を感じたミサトは思わず声を掛ける。リツコは気にせずシンジに問いを投げる。

「どんな手段を使ったの？」

シンジは目を瞑り首を傾げて考えた後、姿勢を戻し、目を開き話す。

「バルバトスが教えてくれた」

「……は？」

シンジの台詞にリツコは思わず間抜けな声を出す。

「初めて乗った時かな。中が水みたいなので満たされたら、感覚的に起動したのがわかった」

「あの時……」

ミサトは初号機が起動に成功した時を思い出す。あの時の彼の叩き出したシンクロ率の数値。シンジは驚いているリツコの様子を見ながら話す。

「続けて良い？」

「……ええ。いいわ。詳しく聞かせて」

カルテを握りしめ、シンジの声に集中するリツコ。

「バルバトスの動かし方とか、AT、フィールド？ の使い方とか頭の中に流れて来る感じ」

「そんな事が……あり得ない。貴方の背中にあるモノが影響してるのかしら？」

「んー。そんな感じだと思っよコレ」

そう言ってシンジは自分の背中を触る。突起の様な塊が3本出来ている彼の背中、仰向けで寝るには問題はない程度の突起ではあるが、些か不憫に思う所はあるだろう。背中の背骨が三か所浮き出てる

風に発達しているのである。リツコはとりあえず、そう。とりあえず一息入れるため、机の所に行きコーヒーを飲む。一気飲みの要領である。

「フツ……それでシンジ君。頭が痛いとか、何か……感じなかった？」

「んー。別に普通かな」

「そう……」

リツコは眉間を抑えて考えを整理する。そして、ゆらりとシンジの所に振り返り。彼に近づく。肩を掴む。両手で

「お願い。もっと深く、調べさせてっ!!」

鬼気迫る顔でシンジに詰め寄った。

「リツコッ、冷静にっ!!」

「私は知りたいっ!!。貴方の『構造』をっ!!」

「いや、危ないからっ!!。今のアンタ危ないからっ!!」

ミサトはヤバイと思いいリツコを後ろから引き留める。何かが消えた目でシンジに迫るリツコをミサトは必死に抑える。

「離して、ミサトッ!!。シンジ君には絶対に何かあるわっ!!。EVAの影響とは思えない何かがつ!!」

「リっちゃんやだ、怖いっ!!。いつものリツコに戻ってっ!!。冷静にっ!!。冷静にっ!!」

暴れるリツコを抑えながら、説得するミサトをシンジとレイは眺めていた。その様子を見かけた職員も駆けつけて事なきを得た。とりあえずシンジはその様子を見ながら考えたこと呟く。

「晩飯、作らないと……」

そして、リツコを何とか収めシンジとミサトは帰宅した。ついでに……

「それじゃあ、二人とも今ご飯作るから」

「はい」

「……」

レイも一緒にとシンジが晩食の時間へと招待した。最初は途惑うミサトだったがレイがシンジと一緒にいたそうな顔をしてたので了

承した。そして台所から良い香りが漂って来た。その匂いにミサトは見覚えがある。

「シンちゃん。今日も味噌汁作ってくれるの?」

「うん。今日は少し食材を変える」

「そう、楽しみ♪」

「味噌汁?」

レイには初めて聞く料理の名前に興味を持つ。彼女も内側から湧き出る温かい高揚感がシンジの作る料理に香りに刺激され。知りたくなつた。

「ええ。美味しいのよ、シンちゃんの作る味噌汁。何度食べても飽きないわあ〜」

「美味しい・・・」

「ふふっ。貴方も食べれば解るわよ」

楽しみにしながら、ミサトは箸を揃えシンジの料理を待ちわび、缶ビールを飲む。

(前に作ったのは定番を具に入れた。なら次は・・・)

シンジは考えながら、今日の前菜に出す味噌汁の材料を並べる。

長ネギ少々。

油揚げ適量。

豆腐1／4丁。

乾燥わかめ2g。

だし入り味噌『料亭の味』。

だし汁が入った鍋。

シンジは長ネギを小切りにし。豆腐を手際よく。さいの目切りにする。続いて、乾燥わかめを水に戻し、水気をきって。一つの皿に纏めておく。『仕込んで』おいた鍋に具を入れ、煮たせる。次に味噌を溶き入れ、煮たせない様に注意しながら火を入れる。そして、沸騰する直前に長ネギを加え。少しかき混ぜ、火を止めて完成。

「出来たよ」

そう言つて、シンジは御椀に入れた味噌汁をレイとミサトに前菜として出した。

「ありがとう、シンジ君。今晚は何？」

「今日はミサトには牛薄切り肉の甘辛煮。レイには別な出す」

「あら、どうして？」

「レイは肉が苦手みたいだから」

「そうなの？」

ミサトは意外と、思いながらレイに聞く。その問いにレイは頷く。

「肉は血の味がして・・・好きじゃない」

「そ・・・そう。でもお肉は食べといて損はないわ。特にシンジ君の料理したのはそんなの忘れそうな程美味しいわ」

「碓君の料理・・・」

「でも、無理ならいいわ。好き嫌いは誰にだってあるもの」

「はい」

「さ、シンジ君の作った味噌汁を食べましょう。冷めるのはもったいないから」

「わかりました」

そう言つてミサトが手を合わせるのを見てレイも手を合わせ、いただきますと言うミサトに続いて自分もいただきますと言う。まず、ミサトが一口。

「あー。この爽やかな味。温まるわー♪」

ミサトの様子を見てレイもお椀に口を付け味噌汁を飲む。するとレイにとっては今まで感じたことのない味を感じた。それはとても温かく。心が落ち着く味だった。

「ぽかぽかする」

レイの感想を聞いたミサトは微笑んで「そうね」と機嫌の良い返事をする。調理しながらその声を聞いていたシンジもまた笑みを浮かべ、ミサトのご飯を作っていた。

（あたたかい。碓君の料理。あたたかい）

この味と温かさを綾波レイは忘れる事はないだろう。そう思いミサトとレイは前菜の味噌汁を食べていく。

そして、シンジは調理を行う。ミサトに振る舞うご飯は、牛薄切り肉の甘辛煮。

牛肩ロース薄切り肉、150g。

長ネギ、1/2本。

オイスターソース、大きじ1。

塩コショウ、適量。

小麦粉、大きじ(目安)。

シンジは調理台に牛肉を並べ、食べやすい形に切る。次に塩コショウをして、小麦粉を全体にまぶす。次に長ネギを斜めに切り分ける。フライパンを強火でかけ、油を入れて、まぶした肉と切り分けた長ネギを入れて炒める。肉と長ネギ。そして塩コショウの香ばしい香りが二人の鼻を擽る。

「んー。良い匂い、楽しみだわ♪」

「これが、お肉・・・」

味噌汁を食べ終え。シンジの調理する姿を眺める二人。

「そろそろかな?」

肉に火が通ったのを感じると中火にしオイスターソース回しかけ絡めを終えれば完成である。

シンジは皿を用意し、フライパンから大皿へと料理を分ける。そして炊いていた米飯を茶碗によそい。

ミサトの元に食事を並べた。鮮やかに。慣れた手付きである。

「はー。今日もおいしそうだわ。いただきます♪」

「うん。レイの料理もすぐ出来るから、待ってて」

「・・・うん」

そして、シンジは調理に入る。彼は事前に用意していた食材を取り出す。それは『豆腐』である。取り出した豆腐をザルに入れ、キッチンペーパーを引いて1時間程水を切り。玉ねぎ、ニンジン、レンコンをみじん切りにしてキッチンペーパーでこれも水切りをとり、大きめのボールに入れてこね回し、まんべんなく混ざるまでこね回した『食材』を中火で熱したフライパンに油をひいた。

「あら、もしかして今朝準備していたモノ?」

「うん。レイに食べてもらおうと思って作っておいた」

「良かったわね♪。レイ」

「……うん」

レイは初めて抱くこの気持ちに頬を赤らめ俯く。この時の気恥ずかしい気持ちと『嬉しい』気持ちを理解した。

シンジは更に丁度良い熱さになったフライパンにレイが食べやすい大きさを形作り、焦げ目が付くまで焼く。そこから立ち上る香りをシンジの作った料理を食べながらビールを飲むミサトと味噌汁を食べ終えたレイの鼻を擽る。シンジは形が崩れない様にひっくり返し、蓋をして、一分ほど待つと弱火にして2〜4分ほど焼くがシンジは2分の方まで焼いた。蓋をとり、両面に焦げ目が付いたのを確認するとお皿に乗せた。

(次は……と)

「ごちそう様〜♪」

「お粗末様。レイもすぐ出来るから」

その後、シンジはタレを作る。

醤油。 大きじ4。

みりん。 大きじ4。

砂糖。 大きじ4。

全ての材料をフライパンに入れタレを作る。中火で混ぜ合わせ、完成したのをハンバーグに搔ける。野菜を盛りつけ。完成。茶碗にご飯をよそい、レイの元に運ぶ。

「召し上がれ、肉無し豆腐ハンバーグ。味噌汁お替りする?」

「……うん」

「ん、わかった」

「あら、これも美味しそうね」

レイの御椀を取り。まだ残っている味噌汁を入れる。そして、レイの元に置く。初めて見る色鮮やかな料理にレイは食欲が沸くのを感じた。ミサトがやっていた動作。手を合わせ。

「いただきます」

箸をとり、食事を味わう。今までこの様な食事は彼女にとって初めてなのだった。

豆腐ハンバーグに箸を伸ばし、割ると簡単に割き。想像してたのと

は違うほど柔らかく切り分ける事が出来た。

口に運び、シンジの作った豆腐ハンバーグの味を噛み締める。それは、とても美味なる味わいであった。

一噛みするごとに豆腐ならではの柔らかい食感。こねて混ぜ合わせた野菜の噛みごたえ。

ソースの甘さも絡まり、彼女の食欲を加速する。自然と箸が進み食べる事に夢中になる。

温かく、ご飯が進み、盛りつけていた野菜も食べる。

「これが・・・美味しい。温かい」

野菜の切り分けも良く。形も食べやすい。一口で丁度良い。ハンバーグにかかっているソースも上手い。

肉を使っていないのにここまで美味しく作ったシンジの豆腐ハンバーグと言うモノは彼女の空腹を満たしていった。モグモグと口を可愛く動かしながら食べるレイを見て、ミサトは微笑む。

「どう？。シンちゃんの作った豆腐ハンバーグ。あ、飲み込んだ後でいいわよ？」

そして食べ終えて、箸を置く。

「・・・美味しい。こんなの初めて」

「そう・・・、良かった」

手を合わせレイもまた。食後の挨拶の言葉を言う。これを言わなければいけないと、この時レイは思った。

「ごちそうさま」

リツコの研究室。

赤城リツコ。彼女は科学者であり、彼女の知性はEVAの開発に大きく貢献してきた。高性能なスーパーコンピュータですら作ることも容易ではない。今まで、EVAについては『知らない事はなかった』。だが、予想外の出来事が今、起きていた。碇シンジ。彼が来てから、初号機の起動。シンクロ率。ATフィールドの武器。斜め上の出来事が起きた。そしてこれからも起きる事を彼女は知った。

「初号機の足に出来たこの形状。まさか・・・ATフィールドで動く

スラストター?。装甲が変化してる?。あり得ない。何なの、コレ?!」
整備班の報告で初号機の両脚部の脰脰の辺りに妙なモノが出来て
いると報告があった。調べるにつれ、それは確かな確信へと変わって
行った。

「初号機が自己進化している?。でも、装甲まで?。あり得ない。ど
うやって?。いえ。あり得ない。でも、もし、そうだとしたら…。」

リツコの脳裏にシンジの背中にあるモノが浮かぶ。リツコはシン
ジの検査をする時、背中のアラヤシキモドキと言う彼の肉体の一部に
なった蟲の写真であるモノを写し出した。神経の構造である。彼の
背中、主に脊髄の辺りの神経が『独自』の神経構造を写していた。そ
れがどんなモノなのか、なんの為にあるのかと考えた。解る事はEV
Aのシンクロに作用すると言う事。EVAの動かし方とATフィー
ルドの使い方と同時に、負荷もなく彼に記憶した事である。それしか
知らない。解らない。碓ゲンドウの息子でありながら、あんな風にな
れる男をリツコは知らない。果たして彼を引き取ってくれた叔父や
叔母は彼に何をしたのか?。リツコは強い疑問を覚えた。そして予
感した。初号機の自己進化。碓シンジが引き起こす『何か』。全てが
変わって行く予感を。

「シンジ君。貴方は一体…何なの?」

第六話・勝ちたければ、前進せよ。

「いいか、小僧。人間の醜悪とは頭が良いぞ。残酷だし。群れを作るし。厭らしい。お前は、そんな人間の醜態性をどう思う？」

暗い、ひたすら暗い世界。そこに一人、上半身裸で剥き身の己を晒す少年がいた。

彼は四つ這いになって、姿勢を低くし、右手には刃物を持っていた。

「……怒りが湧く」

少年の返答に、声の主はすぐに答えた。

「そうだった!!。実に不快だった!!。その人間がお前の仲間に手を伸ばす。奪って、玩具にしようと考えて、行動をするっ!!。その間、力のないお前は何をする？」

「考える。守り抜く……『思考』と『準備』をする。『行動』をする」
「そうだった!!。考えて動けっ!!。何もしなかったら終わりだった!!。『思考』してるだけのヤツも、『準備』してるだけのヤツも、『行動』っ!!。何もしなければ意味がないっ!!。奪われるだけだった!!。そして、奪われた奴らは口々にそろえてこう言う」

「僕には力がありませんっ!!。力がないので、何もできませんっ!!。けど神様が力をくれれば何でもできまっすっ!!。奇跡でも起こればできまっすっ!!。ヒーローになれませんか何もできませーんっ!!。ごめんなさいっ!!。超能力が目覚めれば何でも出来まっすっ!!」

少年背後から、礫つぶてが飛んでくる。少年は刃物で一発目を弾き、二発目を躲す。三発目、頭部に命中。少年は頭から血を流しながらも、耐えた。常に意識を手放さない。絶対に。耳を澄まし、目を動かし、肌で感じて、手足で地面の感触を忘れない。辺りを警戒し、声に耳を傾ける。絶対に聞き逃さない。

「才能がない。能力がない。一山幾らの凡人。もはや、ゴミだなっ!!。だが、決めるのはためえ自身だっ!!。力があれば出来ると思ってる奴は鍍金だ。剥がれたら終わりよ。何かやると決めてぶん回した時点ですぐに勝ちだっ!!。運。知恵。そして根性だっ!!」

「それがいい?。くだらねえ事言ってるじゃねえぞ餓鬼どもっ!!。妄

執に浸る種なし野郎どもがっ!!。腰抜けっ!。ヘタレっ!。劣等人種になりてえか?。なるんじゃねえっ!!。進めっ!!。抗えっ!!。動けっ!!。行動をしろっ!!。根性出せっ!!。腹の底から気合を出して、回転率を上げろっ!!」

「立ち止まるなあ!。前を見て進めっ!。この世の地獄を駆け抜けろっ!!。『動いたヤツ』は正解だっ!!。転んでも、立ち止まっても、また進めっ!!。覚悟を決めて、ぶん回せっ!!。答えはその先だっ!!」

少年は気配を探り、腹に力を入れ、耳を澄ませ、鼻を動かし、姿勢を低くし、目を開く。

駆け抜けるっ!!。刃物の手を強く握り、駆け抜けて『対象』に刃を突き立てたっ!!。

少年の目にはまだ、対象が生きているのを確認すると次は確実に殺すため急所へ刃を突き立てた。

息絶えたのを確認。少年はゆらりと立ち上がる。

「良くやった。上出来だ。さあ、次だ。『想像』しろ。この『理不尽』の世界で、お前のすぐ隣には何がある?」

朝。人間の活動は日の出に始まる。碇シンジも例外ではない。彼は早く起床し、早朝のランニングと筋トレをしてシャワーを浴びて、朝食を作る。同居しているラフ姿のミサトと一緒に食事をし、身支度と歯を磨き。そして……。

「それじゃあ、ミサト行って来る!」

「ええ。いつてらっしやーい」

「弁当あるから、それを食べてね」

「はーいっ!」

制服へと着替え、鞆を背負い、用意した手作り弁当を机に置いとぎ学校へと行く。

「あつ、シンジくーんっ!!」

「なに?」

ミサトがシンジを呼び止め、忘れていた事を話す。

「シンジ君のクラスメイトだけど、ちゃんとしていたから大丈夫

よ。だから、あんま二人を責めないでね？」

「うん。わかった」

そう言って、立ち止まったシンジは再び学校へと歩き出す。歩きながらシンジは外の様子を見る。布団を干し、埃を叩く主婦。轟めく電柱と電線。通行人達が闊歩するコンクリートの世界。太陽の光を受けて発電している集光システムビル。線路を走るカートレイン。そしてモノレール。高いビル。建築物。etc.

「すごいな……」

我ながら、ここまで高いモノが聳え立つ街をシンジは見たことがない。かつての故郷にはそんなのは『なかった』。覚えている、畑の匂いと。何処までも広い大地を思い出しては自分は本当に違う世界へと足を踏み入れたものだと思ふのだった。そこで、シンジは学校への通行をはずれ。ある場所へと行く。

「レイ。待った？」

「ううん……」

工場の音が鳴り響く音が聞こえる所にあるマンション。その入り口で蒼い髪の毛のショートヘアでシンジの通う学校の女子制服を着てるアルビノ少女がいた。彼女はシンジの方に歩いてくと彼の問いに返事をし首を小さく振る。

「お弁当、作ったから食べてね？」

「……うん」

「じゃ、行こうか。遅刻しちゃう」

そう言って、シンジはレイに手を差し伸べる。彼の手を見つめて後、レイは彼の手を取る。

「ねえ……碓君」

「ん、なに？」

一緒に歩きながらレイは少し迷いながらも、シンジの手を握り。少し頬を染めて次の台詞を口にする。

「味噌汁……食べれる？」

「もちろんだよ。ポットに入れて来たから、一緒に食べると美味しいよ」

「・・・うん」

あの温かい味を味わえる喜びを知った。シンジと会って、一緒にいて、空虚だった器に明るいい灯が点いた様だった。シンジに自分は人間だと答えてくれた事が彼女の中で『喜び』と言うモノを理解した。そして今でも、シンジと手を繋いでいると彼女の精神が落ち着く。シンジの手が『本当』に温かいと。

第3新東京市立第壱中学校。

「よ、よお。シンジっ!!」

「トウジ。ケンスケ・・・おはよう」

「おはよーさん。センチ」

二人がシンジの所にやって来た。二人とも何処かきこちない。そんな二人を見てレイは目尻が少し鋭くなった。

その視線に二人は怯むが、トウジが前に出て頭を下げた。

「スマンツ!!。センチツ!!。ワイが悪かったっ!!」

教室内で、トウジがいきなり頭を下げる様子に数少ないクラスメイト達の注目が集まる。

シンジは特に気にする事なくトウジを見て首を傾げる。

「ん。どうしたのトウジ?」

どうどうと落ち着かせて頭を上げさせる。トウジは後悔の感情が滲み出ている表情をシンジは見つめる。トウジの手は強く握られ震えていた。

「センチ・・・ワイは」

そんなトウジの肩にシンジは触れ、落ち着かせる。

「大丈夫だよ。トウジ。もう、怒られたんでしょ?」

「センチ・・・ワシは」

「もう良いよ。でも、二人とも二度とあんな事しないでね。二人がいなくなったら、嫌だからさ」

「碓・・・」

二人を宥め、シンジは自分の席に鞆を置き色々机に置く。そして一つの弁当箱を取り出す。レイも二人を一瞥した後、自分の席に付き鞆を置く。

「レイ。はいコレ、弁当」

綺麗な包みを彼女に手渡す。レイは弁当を受け取り、その包みの中身とシンジの机にあるポットを交互に見て期待した目をシンジに向けてる。

「食べて……良いの?」

「お昼にね」

少しシヨンボリしたレイを見て、シンジは彼女の頭を撫でた。

ネルフ本部。指令室。

「まさか、初号機が自己進化とはな……。ATフィールドを展開して跳躍する構造とは、実に驚きだ」

「……ああ」

がらんとした空間で冬月とゲンドウが中央に設置された机に向かってかっていた。

「計画に支障が出ると老人達が騒ぐと思ったが……特に音沙汰なしか。シンジ君の性格があそこまで変わるとは、彼を引き取った二人はよくやってくれたな」

冬月は詰め将棋の本を片手に、ゲンドウに話しかけながら桂馬を指した。

「お前が思っていた予定とは違う行動をとったな?」

「……わかつている。支障があれば修正するまでだ」

ゲンドウは、肘をつけて顔の前で手を組みながら、落ち着いた表情で答える。

「あんまり、強引な手段はやめた方が良いぞ? あれ程の強さを失うのは痛手だと私は思うがね。初号機の戦いを見ただろう? 幸い、心臓部までは影響は出ていない。様子見と行こうじゃないか?」

「ああ。そうだな……」

「レイを接近させるまでもなかったな。あの性格だ。自らの意思で残って戦ってくれるなら都合が良いだろう。碇、あんま私情は出さない方がいいぞ？ 私の『勘』が彼に手を出すのは『危険』だと言っている。あの顔を見てわかったよ……余程の修羅場を経験した顔だ。我々では手懐けれない可能性もある」

冬月が一通り話し終わるとゲンドウは机から立ち上がり、離れていく。

「……ならば始末してしまえば良い」

そう言つて彼は出て行つた。その後ろ姿を見ながら冬月は飛車を掴み、裏返す。

「……ユイ君の忘れ形見によくそんな事、言えるな」

初号機は、冷却液に浸かり静かに佇んでいた。扉が開き、ゲンドウが一人ケイジに入ってくる。彼はアンビリカルブリッジを渡り初号機の顔の前に立つと、無言でそれを見詰める。

「……ユイ。私は、お前に会うために此処まで来た……それでもお前はシンジを選ぶのか？ もはや、人の目をしていない『アレ』を選ぶのか？ 何故だ……『あの時』もそうだ。お前は何故、シンジを愛せる」

ゲンドウは己の心境の残滓を口にする。少し話した後、次を話そうとした時。初号機のケイジを照らす明かりが消えた。何事かと思いつつ上を見上げたとき……怖気がした。

「ッ!？」

自分の周りに何かがある。恐ろしいモノが恐ろしい空気が、寒気が、ゲンドウを覆う。暗闇の中、ゲンドウの目があり得ないモノを見た。女性がいる。見覚えのある女性の影がそこにいる。すると明かりが少し回復する。薄暗い明かりが初号機のケイジを写す。

「……ユイ?」

白い白衣を纏って、レイに似た髪型をもった大人の女性がそこに立っていた。顔に影が繋っており表情が見えない。髪の色も、体格も、ゲンドウは知っている。彼女が何処にいるのかも。しかし、シンジの母は、ゲンドウの愛した女性は、忽然と

られなきや気がスマン!!」

トウジの真剣な発言にシンジは興味を示したのか、振り向き彼を見る。

「落とし前か・・・うん。わかった」

「よしっ!! ぼっちこいつ!!」

シンジはトウジと距離を詰め、右手の拳を振りかぶる。

「それじゃあ、トウジ・・・」

その時、トウジは震えた。シンジの存在が大きく見えた。

「歯を食いしばれ・・・もう、戦場に出て来ないでね?」

そしてシンジは『気持ちを含めて』トウジを殴った――。

メキッ!!

どごおおおおおおおおおおおおおおんっ!!。

この時、トウジの世界は回転した。世界の色彩が煌めき。本人曰く『峠』を見たと・・・。

その現場を隠れて見ていたレイとトウジの様子が気になって見に来た洞木ヒカリがその現場を目撃した。

「鈴原ああああああああああああつ!!」

第七話・狼の瞳が見つめるモノ。

シンジはその場で正座をして、クラス委員長の洞木ヒカりに説教を受けていた。トウジを蘇生しようと他のクラスの生徒が頑張っている様だ。そしてケンスケはヒカリを落ち着かせ、事の詳細を話した。「とっ、言う訳であいつ為に責任とか、ケジメとか、自らの償いをしたかったんだよ」

「それでも、これはやり過ぎよっ!! 碓君っ!! わかるっ!! 暴力にも加減と限度があるのっ!!」

「(・ー・)」

「何か言う事あるっ!? 次はこんな事ない様に!!」

シンジはヒカリを見て、反省の意を顔で表現した。

「(・・ω・・)(ごめん・・・)」

その様子をレイは少し離れた所から見ている。少し可笑しな気持ちになるのを彼女は覚えた。

「おやおや、何事かね?」

そこへ武骨な体格をした男がやって来る。彼の身長は平均の大人より大きく、スポーツ刈りの頭がよく似合う。

口髭が似合う。そして柔道耳。巨漢な教師。授業は男子体育を担当している。得意なのは柔道。時々生徒達が見る事がある。

大きい木に頑丈な帯を巻き付けて、背負い投げの練習をしているのを。一見バリバリの体育会系の男性に見えるが、こう見えて紳士的な態度だったので、みんなからは慕われていた。彼の名は・・・。

「鬼道先生っ!」

鬼道孝文。彼の瞳がその現場を見渡す。そして、トウジの所に行き屈んで目を覚ました彼に話かける。

「っ!? 鬼道センセっ!」

「何があったのか、話せるかい?」

「違うんや、センセ、コレは、ワイが・・・」

鬼道先生が手を上げて、彼の次の台詞を制する。

「うん。大丈夫だよ。鈴原くん。たてるかな?」

そう言つて、トウジへとその手を差し伸べる。

「すんまへん……」

彼はその手を取り、何とか立ち上がる。トウジの肩をぽんぽんと優しく叩き、シンジ達の方を見る。

「さあさあみんな、そろそろ教室に戻りなさい。後は先生に任せなさい」

その武骨で大きな手をぽんぽんと叩いて、周りの生徒達をそれぞれのクラスへ帰る様にと促す。

ほとぼりが冷め、みんなクラスに帰って行く生徒達。そして鬼道先生は正座しているシンジの元へと歩む。

「君もたてるかな？ 洞木委員長。どうやら彼もちゃんと反省してる様だし、この場は先生に免じて終わりにしよう。良いかな？」

「は、はあ……」

教師の来訪で、洞木は落ち着き鬼道先生へと道を開ける。シンジはズボンの埃を落とし、立ち上がる。

そして、鬼道孝文を見る。そして鬼道孝文は碓シンジを見る。

「君が碓シンジ君だね？ 噂のロボットのパイロットの」

「うん。鬼道……先生？」

「うむ。鬼道孝文だ。よろしくね、シンジ君」

そう言つて、鬼道先生はシンジへと左手を差し出す。シンジは右手を差し出し、互いに握手をする。そして。

メキッ!!。

「……」

「なるほど。素晴らしい子だ。ところで君。柔道は嗜んでいるかな？」

「すこし、後は我流……っ!!」

次の瞬間、シンジが先生へと掴み繋る。鬼道先生もシンジを掴む。周りの空気が変わるっ!!。

二人の間合いに気圧し、冷や汗がヒカリやトウジとケンスケ、そし

てレイにも流れる。互いの気が高ぶり、そのまま互いに動かない。しかし高い圧力が二人を包んでいる。シンジも鬼道も視線をそらさない。

(すごいや・・・この人。重心が地の底まである様だ)

(投げれば何か来る。まるで狼が喉笛に噛みつく様な感覚だっ！)

やがて二人の気が収まり、圧力も無産する。互いに手を放し、鬼道先生がシンジの肩に両手でぽんぽんと優しく叩く。

「このままだと、先生までも引き込まれそうだ。よし。飲みに行こうっ!!」

『え?』

鬼道の言う事にケンスケとヒカリが驚く。

「君達も来なさい。ああ、その君も。綾波さんだったかな? 今日
は先生の奢りだ」

「レイ? いたんだ」

第3 東京市・ラーメン店。

「この辺の名物ラーメン。『あつさり東京らーめん』だ。綾波くんは肉が苦手みたいだから、コイツがオススメだぞ。『にんにくラーメン。チャーシュー抜き』。ラーメン定番のチャーシューは無しにも、ありにも出来る君ならイケる味だ」

シンジ。ヒカリ。ケンスケ。トウジは残念ながら保健室で療養中である。3人のカウンターの机に丼が3つ置かれる。

丼の中には定番の醤油味のスープは透き通る程の色を魅せ。麺の太さもあり食い応えがありそうな艶を出している。具にはチャーシュー。麺の真ん中に刻みネギが浮き。メンマ。ナルト。鮮やかに並べられていた。レイの丼にはスタミナに効く仄かなニンニクの香りと濃い醤油味のスープ。そして、ナルト。メンマ。刻みネギがこれもまた、鮮やかに添えられていて彼女の食欲をそそる。

「あの・・・先生。良いのでしょうか? こんな・・・」

「大丈夫っ! 教育的指導と言う方針の元。上には話を通していいから、遠慮せず食べなさい。ちょうど昼だし」

「は、はあ・・・」

「委員長、ここは遠慮せず食べよう。昼にこんな美味しいラーメン食えるなんて滅多にないよ」

若干遠慮するヒカリにケンスケがフオローする。シンジとレイは箸を取り、いただきますと言い食べ始めた。

「んー、美味しい。これが東京のラーメンか」

「・・・(ずずー)」

そんな二人の様子を見て、ヒカリは食べ物を粗末にするのはいけないよねと思い。

「いただきます」

箸をとり、レンゲでスープを啜り飲む。まずは、スープから味見をするのはラーメンを食べる上では常識だろう。

そしてその味は今までのラーメンの中であっさりとした味わいとコショウが効いて美味な味わいを彼女に与えた。

「美味しいー！」

「気に入ってくれて何よりだ。ラーメンはあつたかい内に食べるから美味なのだ。ここには食後のデザートも絶賛でな。食べ終わったら注文しよう」

「先生っ！ ゴチになりますっ!!」

ケンスケもそう言って食べ続け、鬼道先生に感謝した。

「喜んでくれて、何よりだ。碓君。綾波さん。美味しいかね？」

隣にいるシンジとその隣にいるレイに箸で麺を摘まみレンゲのスープに尽かしながら二人に話しかける。

「(むぐむぐ) 美味しい」

「(むぐむぐ) 美味しい」

「うん。二人とも良く食べるね。先生は嬉しいよ」

そして、みな食べ終わったのを見はらかってデザートが来た。

「丁度いい炭酸の『クリームソーダ』だ」

「みんな、色が違うね？」

「そうだよ。このソーダ水はランダムで色が決まるらしい。味と健康面は保証しよう！」

シンジは『紫』。レイは『青』。ヒカリは『オレンジ』。ケンスケは『イエロー』。そして鬼道先生は『緑』。

そして、氷の入ったソーダに浮かぶアイスクリームと据えられてる果物はサクランボであった。キンキンに冷えたクリームソーダは暑い日は贅沢である。アイスを食べ、ストローでソーダを飲む。次にソーダと小さい氷をスプーンで掬って食するのが良い食べ方だと鬼道先生は言った。シンジはクリームを口に含んでその甘味を味わった後、懐からあるモノを取り出す。木の実だ。それを入れてクリームと一緒に食べる。

「おや、それは何だい？ 碓君」

「シンジで良いよ。『ナツメヤシの実』イけるや」

「ほう、私も良いかね？」

「いいよ」

懐からもう一つナツメヤシの実を取り出し鬼道先生に渡す。

「当たり、ハズレがあるから気をつけて」

「ほお・・・おもしろい」

そう言つて鬼道先生はソーダに付けて食べる。その様子を3人は眺める。そして鬼道先生は・・・

「ひんっ!!」

ハズレた。渋い顔をした後、悶絶した。アフターサービスの使い捨てナプキンを取り出し口に押し当てた。

「せ・・・先生、大丈夫ですか？」

ケンスケが気になって声を掛ける。

「いや、大丈夫。すごいね、シンジ君。これを何時も食べるのかい？」
涙を取り出したハンカチで拭いながら、返事をした後シンジに聞く。そんなシンジ君は溶けたアイスをソーダにぐるぐるとかき混ぜた後、鬼道先生を見る。

「うん。時々口が寂しい時にね」

「やはり・・・ロボットに乗ると頭が疲れるのかな？」

「んー。まあね。でもアレ、中で食べるの出来ないんだよね。LC
Lって言う液体の中だから」

シンジの口にした台詞にレイと鬼道先生が反応する。ケンスケとヒカリも注目する。

「ほう、それは面倒だ。息は大丈夫かい？」

「んー。なんか息できるらしいよ。でもなんかアレ……前にも味わった気がするんだよね」

シンジが少し俯きながらソーダをかき混ぜ、話していると隣のレイがシンジの制服の袖を少し引く。レイを見るとそれ以上はダメと言っている表情で首を小さく振る。シンジはそれを見て、彼女の頭を撫でた後、話す。

「まーこれ以上は秘密事項？ 仕組みもよくわかんないけど。話しちゃいけないけど……やっぱ乗っていると棺桶の中に『また』入った気がするね」

「また？ 以前に乗った事があるのかね？」

「んー。『前』よりは乗り心地は違うけど慣れたよ。何より視野も違うからね。だから……あの時、トウジとケンスケがいた時は、本当にヤバかったよ。……使徒に投げ飛ばされた時、二人が潰れたら嫌だった。そんなの……絶対嫌だった」

少し話し終えた後、かき混ぜたソーダを一飲み。その様子を3人は見て、シンジと鬼道先生の話を聞く。

「そうだね……。私も柔道をしてる時は、足元を気にしてる暇はない」

「だよねー。だから、二人を必死で守ったよ。絶対に死なせないって、絶対に死んで欲しくなかった」

「君は怪物と戦う戦場にいた。子供を戦わせるとは……心が痛む。今の時代は随分と残酷になったモノだ。シンジ君。君は『戦い』の本質を知っている。だからこそ君は鈴原くんが殴って欲しいと言った時、どんな気持ちで殴った？」

鬼道先生がソーダを飲み終えた後、シンジの発言を待つ。シンジはレイとケンスケ。そしてヒカリに視線を移した後、少しぬるくなったソーダを見ながら話す。

「トウジは、落とし前をつけたくて殴って欲しいと言った。僕は……」

そうだな。やっぱりあんな所にまた来て欲しくないから、遊びで感覚で来ることは二度とやめて欲しいとか、そんな思いで殴った。叔父さんが言った。『覚悟を決めた人間にはその魂に相応しい行動と心で答えろ』そう教えてくれた。僕が昔いた場所は人間の価値なんて雀の涙程にもならない残酷な世界だ。運が悪ければ本当に死んで終わり。残された家族が傷つくかと思うと、絶対に嫌だ。トウジが責任を感じて、後悔して、『覚悟』を決めて僕に殴って欲しいって言ったのから、それに答えようと思って殴った。僕はこれからも、使徒が来たなら、またバルバトスに乗って使徒を倒す。みんなのいるこの場所を守りたいから……」

シンジが話終わると、ソーダを一飲み。4人は彼の空気に飲み込まれ、聞き入った。地獄を見て来た目でかき混ぜたソーダを見て一息つく。

「シンジ君。君は本当に中学生かね？　すごい事言っているぞ」

「そうですか？」

「トウジ君から聞いたよ。君の事は責めないで欲しいと。悪いのは自分だとケジメを付けたかった。とね、シンジ君。君はネルフの人達に言われて仕方なく、ロボットに乗っているのかね？」

「……」

レイが何か不安に思い、シンジの袖を掴む。華奢な手がシャツの袖を強く握る。『何か』が、彼女の『精神』の何かがシンジの次に言う台詞に不安を覚えた。

「いや、僕が自分で決めて、自分から残った。戦わなかったら……みんなとこんな風に顔を会わせられなかった。初めてこの街を見た時、僕は『覚悟』を決めた。逃げ場なんてない。逃げちゃだめだ。其処に居場所はない。あいつらが勝ったら、みんな死んでしまおうとわかった。戦わなきゃ生き残れない、それが今なんだ。僕しか戦えないならやるしかない。でも、僕は死なない。絶対に生きて、最後まで前に進んで行くんだ。その果てに、此処じゃない何処かに辿り着く」

シンジの話す内容に4人は気圧され、掛ける言葉を失う。ソーダの水は溶け、それほど冷たくなっていた。

そして、鬼道先生が残りのソーダを飲み。口を開く。

「君はまるで・・・戦場の世界を生きて来た様だ。そうか・・・何処にその場所があると思うのかね？」

「使徒を全部倒した後・・・かな。まずは、そこまで行ってみたい。その為に死なない様に生きて。ミサトも、トウジも、ケンスケ、委員長。それから・・・レイもいるこの場所を守り抜く。僕とバルバトスで。生きて戦う。僕は・・・止まらないよ」

「その道がたとえ、鉄の茨の様な道でもか？」

鬼道先生の問いにシンジは視線を先生に移し、その瞳が彼を射抜く。

「歩き続ける。『昔』から、そうやって・・・生きて来た。それが僕だ」

互いに見つめ合い、少しの沈黙が流れる。そして、先に口を開くのは鬼道先生だった。

「わかった。この時代に凄いい子供が生まれたのだな。私もこの世の『地獄』を見て来たが君はそれ以上だ。ならば逢えて言おう。君は絶対に『安寧』の場所へと辿り着く。君の未来はそれ以上の苦痛はないだろう。君には『覚悟』がある。逃げない意思を確固たる信念をもつた目をシンジ君。君にはある」

そしてシンジの頭にその手を乗せ、優しく撫でた。大人が子供をあやす様に。子を想う大人の様に。

『覚悟』とは犠牲を払う事ではない。『覚悟』とは暗闇のなかに進むべき道を切り開くことだ。私が君に言う事はそれだけだ。『死ぬ為に』生きるのではない。『生きる為に』死を駆け抜けるのだ。生きなさい。シンジ君。生きて未来を掴むんだっ！」

「先生・・・」

撫でていた手を放し、優しく微笑む鬼道先生は話終え、立ち上がる。「よし。そろそろ帰ろう。今日の話は此処までっ！ 私の奢りだから心配は無用だ」

「せ、先生。ごちそうさまでした！」

ヒカリが立ち上がり、しっかりと頭を下げた。シンジとレイもそれ

に続き。ケンスケも頭を下げた。

保健室・ベッド。

「……ハッ！　なんか、ワイ……『悟り』を見たでえ」

トウジベッドで仰向けになりながら閃いた。その後、シンジ達は無事に学校へと帰って行き。最後の授業を受けた後、シンジとレイは一緒に帰って行った。その光景を窓際から鬼道先生は眺めている。

「そう……『覚悟』をした者は『幸福』である。たとえば明日死んだとしても、『わかっていれば』、『覚悟』があれば『幸福』だ。そして、君の死に場所は『此処』ではない。そこまで君は『死なない』。『絶対に死なない』。そうだろう？　〇〇くん。君は彼がそこまで『辿り着く事』を『知っている』。碓シンジ。君の行く道に幸福があらん事を……」

ネルフ本部・リツコの研究室。

「親父がレイを助けた？」

「ええ。零号機の起動実験で事故が起きてね。その時。彼がいち早く射出された零号機のエントリープラグに駆け寄ったの。だからレイは一応、彼には気を許していたの」

「そうなんだ（もぐもぐ）」

過去にゲンドウが零号機の起動実験で綾波レイを助けた過去を聞いたシンジはナツメヤシの実を食べながら聞いていた。

「一応、彼女のプロフィールを説明しておくわね。綾波レイ、14歳。マルドルツクの報告書によって選ばれた最初の適格者、第1の少女、すなわちエヴァンゲリオン試作零号機、専属操縦者。過去の経歴は白紙、全て抹消済み」

「レイは親父を信じてるんだね？」

「どうかしらね。最近は貴方に気がある様に見えるわ」

「そうかなあ？」

シンジはそう言って、リツコから渡された資料を見る。

「にわかには信じられないわねえ」

リツコが語る過去の出来事を聞いたミサトが感想を漏らす。

「正規の報告書では削除されているけれど、紛れも無い事実よ」

「そんな暴走事故を起こした零号機の凍結解除、ちと性急過ぎない？」
ミサトがこれまでの流れに疑問を呈する。

「使徒は再び現れた。戦力の増強は、我々の急務よ」
リツコは当然のように理屈で答える。

「それは、そうだけど……」

ミサトは何か釈然としない物を残しながら、一応うなづく。

「レイの再起動実験はすでに検証済み、零号機本体に問題は無いわ。
神経接続の調整が済めば……」

「……即、再配備。というわけね」

シンジは二人の話を他所に渡された資料の内容を見てる。ミサトも気になって覗いて見ると、プラグスーツの様な絵が描かれていた。

「何なの？ これ。もしかしてシンジ君の新しいプラグスーツ？」

「そう、彼の生命維持と彼の『背中』あるモノを計測したり。更なる生命維持機能を取り付けたモノよ」

「これ着るの？」

そう言つて、資料を返しリツコに聞く。シンジは先ほど渡された新型プラグスーツを広げる。青と白のカラーリングを基準にした前と変わらない色のプラグスーツだが、背中に銀色の出っ張りがある。青と白の色のラインも少し変わっている。背中のバックパックがシンジの背中にある蟲を計測したり、データを取り。更なる生命維持を追加した設計となっている。

エヴァ初号機のエントリープラグ内。

新しいプラグスーツに着替え、シンクロテストに集中するシンジ。座り心地が少し変わっている事に気付く。

前よりも、座りやすい気分だと思つた。その時、コクピットから見える視点でレイがこちらを見ていた。初号機を碇シンジを見ていた。そこへゲンドウがやって来るのを見る。レイもゲンドウの方を見た後、少し話すとレイは少し頭を下げその場を去る。ゲンドウはそのレイの後ろ姿を見た後、彼もまた何処かへ消えた。そんな光景をシンジは眺めていた。

『エヴァ初号機は、第3次冷却に入ります。第6ケージ内は、フェーズ

3までの各システムを落としてください』

『先のハーモニクス、及びシンクロテストは異常なし。数値目標を全てクリア』

『了解、結果報告はバルタザールへ』

『エントリープラグのパワーソナルデータは、コールレンジにてメルキオールへコピー。データ送りします』

『回路接続。第3次冷却、スタートします』

『カスパーの状況データを、メルキオールへコピー』

『現在、初号機の最新値は1.0』

『各タンパク壁の状態は良好。各部、問題なし』

『零号機の連動試験再開まで、マイナス150分です』

『了解。定時シンクロテスト、第508プログラム終了。シンジ君、お疲れ様』

マヤがテストが終了したことをコックピット内のシンジに音声で告げる。

「うん。(レイ。何かあったのかな?)」

第八話・決戦第3東京市

ミサトとリツコは、仕事が終わってからバーで飲んでいた。ジオフロントに格納されたビル郡が一望できる大きな窓のついた店内には、二人以外の客の姿は見当たらない。リツコは3本目のタバコに火をつけてから、ミサトにシンジのことを尋ねる。

「どう？ 彼との生活は？」

「お陰様で、ご飯が美味しいわ。彼、本当に家事も出来て頭が上がりない……」

少し複雑ながらも、頬杖を付いて食事の環境が大幅に変わった事を話すミサト。

「あら、意外ね。男と暮らすの、初めてじゃないでしょ？」

「8年前とはちがうわよ、今度のは恋愛じゃないし」

ミサトは手をだらんと振って昔の記憶を払いのける。

「それはどうかしら。シンジ君、あなたがいるから残ったんじゃない？」

「んー。どうかしらね、彼はもしかしたら別の『意味』で残ってるかも、私の事は次いで」

リツコはタバコを持った手を止める。その弾みで長くなっていたタバコの灰が落ちる。

「シンジ君にね。私なりにご飯作ってみたの……」

「まさか……あんたっ！」

リツコの脳裏に一度ミサトが作ったと言う『カレーライス』が頭をよぎる。そして、ミサトは残っていた酒をぐいーつと飲む。そして……頭をテーブルに打ち付ける。

「ちきしよおおおおっ!! シンジ君、私がせっかく作ったのに一目見ただけでゴミにしたのよーっ!! そして使った皿を念入りに洗っちゃって、それだけじゃなくハイターまで使って徹底的によーっ!! 私、汚い事した!」

よよよと泣きじやくり、愚痴を喋りまくるミサトを見てリツコはあーと呆れた。

「あろう事か、私にレトルトカレーを出して。自分は綺麗な『オムライス』なんて作っちゃって!! ペンペンにだってなんか手作りゴハンを味わってるしっ! もう、殆どシンジ君に服従ですよっ!! 飼い主は私なのにーっ!!」

「ペットにまで見放されたのね」

リツコは新しいタバコを取り出し火を点ける。一息吸い、煙をふくと吐く。

「今思えば、一緒に暮らしてから2日経ったある日だった。シンジ君がご飯をあげる時、何時も腹を出して服従のポーズなんかしてんよー!! もう、あつちに鞍替えしたわー!! ペンペンの視線まで私を何か残念そうな目で見てるしっ!! シンジ君の言う事は聞いて、私には構ってすらもらえないっ!! 完全に住居の主導を取られたわーっ!!」

「自業自得ね。今まで怠けてたツケが回って来たのよ」

頭を打ち付けたままミサトが喋る様を見てその肩を撫で、慰める。そしてタバコを灰皿に置き、酒を飲む。

「ホント、すっかりしてるわシンジ君。14歳なのにあそこまで……どんな生活したらあんな風になるのかしら?」

「そうね……一応報告では彼、幼少時に熊討ちに行った事があるみたい。叔父の竜彦がよく連れていたらしわ」

「熊討ち……それであそこまで変わるもんなの?」

ミサトが少し落ち着いた様子を見て、リツコは肩から手を放す。

「セガンドインパクトで環境は劇的に変化したから、シンジ君が幼少時に居た町には『ヒグマ』がよくいたらしいわ」

「ヒグマ?」

ミサトが興味を持ち。上体を上げリツコの話聞く。

「色々な種類のヒグマもいたみたいよ。竜彦はそのヒグマをシンジ君の目の前で仕留めた報告もあったみたい。それからしばらくした後、シンジ君もヒグマを狩る様になったわ……それも『単発銃』で」

その内容にミサトは驚く。最近の猟銃でも5発は装填出来るライフルだってあるのに『単発』式のライフルを使って現代のヒグマを狩

る事は時代遅れも程がある。にも拘わらず。ヒグマをシンジは一発しか入らない銃で狩って来たのだと言う。俄かに信じられん話であった。

「勝負は一発って言う、その叔父の決め事みたいよ。それで二瓶竜彦とシンジ君は一山のヒグマを狩り尽くしたとか」

「すごいわーシンジ君。そりゃ、あんなに強いわよ」

ミサトはその後、テーブルに目を落とし。ため息をつく。リツコは少し外の景色を見てタバコの煙を吹く。

「さて、と。時間だし、戻らなくちゃ」

リツコはタバコを灰皿に擦り付けると、バッグを持って席を立つ。「相変らず仕事の虫ねえ」

ミサトは少し呆れてみせる。

「ミサト。帰るからこれ。シンジ君の正式なセキュリティカードと、綾波レイの更新カード。さつき渡しそびれて。明日シンジ君に頼めるかしら」

リツコは、バッグからシンジのIDカードとレイのカードを取り出すと、重ねてミサトの前に置く。

「ああ、いいけど」

ミサトは少し意外だというような表情をして要件を受け取る。

「それからね・・・たぶん。シンジ君があそこまで強いのはそれだけじゃない気がするわ」

「他に何かあるのよ?」

「気にならないの? シンジ君が使徒と戦った時も、EVAに乗った時も全然動じてない。彼の精神が動物の狩りであそこまで形成できるかしら? 彼の背中 of 蟲と良い。初号機のシンクロ率とATフィールドも。前にも言ったわよね? シンジ君の目付きが人じゃないって・・・戦いにも、命を奪う事にも、彼は『慣れ過ぎ』ている。彼はもしかしたら・・・」

ミサトはリツコの言うその先を予想してイヤイヤと手を振り否定する。

「ちよつとリツコ、彼はまだ子供よ? そりゃあ、熊討ちをしたからっ

て……そんな事、ないわよ」

「……そうだと良いのだけど」

翌日、シンジはレイのマンションへと訪れる。相変わらず無機質な鉄の音が響く所だとシンジは思った。

シンジはとりあえず、呼び出しボタンを押して彼女に呼びかける。返事はなし。もう一度押すが、返事はない。

その後、ドアを確かめる。鍵が掛かってない。少しドアを開けた。

「レイー？ いるー？」

返事がないのを確認すると、シンジは鞆をドアの横に置き。腰の後ろへと右手を回し『あるモノ』に手を付ける。左手でドアノブを回してドアをのぞき込み中を確認する。キッチンへと続く廊下を確認した後、中に入って行く。

「……レイー？ 入るよ？」

中で声を掛けるとシンジの耳にシャワーの『音』が聞こえた。音が止まり、人の『気配』をシンジは感じた。

「碓君……？」

ガラガラと音を立て、風呂場の戸を開けて此方をひよっこりと此方を見るレイがいたのを確認する。人の『匂い』も『音』もレイだけだと確認した後、ホツとし腰に回していた手を戻す。少し低くしていた姿勢を直す。

「お風呂入っていたんだね。無事で良かった」

「どうして？」

「玄関の鍵が掛かってなくて、泥棒とかいるかと思った」

シンジはそう言って、玄関の方を振り向きレイに視線を戻す。

「泥棒？」

そう言ってレイが風呂場の戸から出ようとして、シンジが手を上げて制止する。

「まずは着替えてからにしよう。外で待ってるから大丈夫。風邪ひかない様にね？」

「……うん」

レイが無事なのを確認して、警戒を解いたシンジはこのまま中で待つのは悪いから外に出る。玄関を出て行ったシンジを最後まで見た後、レイは少し早く着替えようと思った。彼に心配されたのが少し嬉しいと思った。

「はい、IDカード。新しくなったから渡してくれってミサトに頼まれた」

シンジはそう言ってレイにIDカードを渡す。レイは受け取りポケットにしまい、シンジと一緒に歩いて行く。

「碓君。泥棒って何？」

「勝手に人の家に入って悪い事をする奴。レイも家に帰ったら鍵を締めて用心した方が良いよ。何かあったら大変だからさ」

「・・・うん」

鞆を握り締め、少し俯くレイにシンジは反応する。何処か暗い表情をしているのをシンジは見逃さない。シンジを見たレイはすぐに視線を戻し足を止める。シンジも立ち止まりレイを見る。

「碓君はどうしてEVAに乗るの？」

レイの質問にシンジは少し考える。何と言えば良いかと。

「そうだなー。今あるモノを残して、その先に進んでいく為かな」

「居場所？」

シンジの台詞にレイは興味を持ちシンジの声に耳を傾ける。

「ミサトの部屋を掃除したり、栄養を取れたらご飯を食べさせたり。トウジやケンスケと委員長と一緒に学校に行って授業受けたり。ママと話したり。みんなという普通の日常を過ごさせるこの場所を残す事。後は使徒を全部倒したら考えるよ」

「・・・そう」

レイは少し興味を無くした様な声を出して歩き出す。シンジもレイの歩調に合わせて歩いた。

「それから・・・僕の言う居場所にはレイもいて当たり前なんだ」

シンジの次の台詞にレイは少し目を見開き、シンジを見る。シンジはレイに視線を合わせながら次の台詞を話す。

「レイは親父の事とEVAが自分の生きる意味とか言うけど、他にも

見つけられる。だって人は絆も、生きる意味も自分で見つける事が出来る。その権利は誰にでもある。僕はここに来て、ミサトやみんなだけじゃなくて、レイとも一緒に生きたい。みんなで生きて、その場所に辿り着きたい」

「それって……どんな所？」

その問いにシンジは既知感を感じた。何もなかったあの頃から、生きる意味を見出した瞬間を。

「そうだなあー。きつと、普通の日常が過ごさせてさ。住む所もちゃんとおつて、食べ物もおつて。温かい寝床もおつて。それから……」
いつの間にか二人は互いに自然と歩みを止めレイはシンジの声に聞き入った。

「あとは……。行ってみなけりや、わからない。辿り着いて見なきゃわからない。僕は行きたい。『また』見てみたい。レイも行こうよ?」

そう言つて、シンジは自然と彼女に手を差し出す。レイは彼の手を見て迷う素振りをする。

「碇君。私は『代わりが』いるの……そんな私が一緒にいて良いの？」

「レイの代わりなんていないよ。僕の知っている綾波レイは、僕のご飯を喜んで食べてくれて、綺麗な目をしていて、そして……僕と絆を結んで仲間で、友達になったのは僕の目の前にいるレイだけだよ」

「碇君……」

「僕は死なない。まだ死なないから、大丈夫。レイも死なせない。一緒に生きよう。一緒にご飯食べよう。一緒に笑おう。もしも、苦しい事が起こったのなら、その時は僕を呼んで、僕に頼っても良い。必ず僕はレイの所に行く。僕はレイを忘れない。一緒に……行く?」
差し出されたシンジの手を……レイは初めて彼から差し出された手に触れる様にシンジの手に触れた。

シンジはレイの手を優しく握る。レイはシンジの手を強く繋ぐ。

「碇君……一緒にご飯食べても良いの?」

「うん」

「また、味噌汁を食べても良いの？」

「良いよ、何時でも作る。僕も好きだから」

レイの問いにシンジは順番に答えてく。そして最後に

「私は……生きていて良いの？」

「生きて良い。またミサトとペンペンと一緒によう。自分の為にも、みんなの為に生きて良いんだ」

「……私、は人形じゃ……ない？」

レイの言葉が途切れる。心から込み上げるモノが彼女の中で感じた。

「そんなの当たり前だよ。代わりなんていない。君が、君だけが綾波レイだ」

シンジの台詞がレイの心に深く届いた。いつの間にか彼女の目尻から滴が落ちる。

「私……泣いてるの？ 何故？」

レイの持つていた鞆が落ち、空いた手で触れる。暖かいモノが溢れる気持ちを彼女は止められなかった。

「ほら……レイは人形じゃない。だから、一緒に行こう？」

「アリガトツ、碓くん。ありが、とうツ」

そうやってレイはシンジの胸に飛び込み、彼の腕の中で泣いた。ずっと誰か行ってもらいたかった思いが、押し込めていたモノがレイの中から抜けていく。シンジはレイが落ち着くまで、そのまま彼女を優しく抱きしめ続けた。

使徒。出現。

第3新東京市上空に、巨大な飛行物体が現れた。まるで機械のように正確な正八面体をしたその形状は、ゆつくりとジオフロントがある方へと近づいて行く。早くも第1発令所では「分析パターン：青」を確認し、第6使徒として認定していた。

『監視対象物は、小田原防衛線に侵入』

『未確認飛行物体の分析を完了。パターン青。使徒と確認』

そこへゲンドウと冬月がブリッジに乗って上がってくる。

「やはり、第6の使徒だな」

と冬月が言い。ゲンドウは少し胸を抑えた後、姿勢を何時もの両肘を付き、両手を組むポーズへと変わる。

「ああ、初号機を出撃させる」

ゲンドウはそう言っ指で眼鏡を上げる。

「エヴァ初号機。発進準備」

ミサトの指示がケイジ内に響き渡る。

『第2指令具、換装』

「目標は、芦ノ湖上空へ侵入」

シゲルが状況を伝える。

初号機・エントリープラグ内。

シンジがミサトへと通信を飛ばす。

「ミサト。わかってるよね？ 今度は敵の眼前に出すの無しだよ」

『ええ。解ってるわ、使徒から距離を取った所へ射出した後。武器を受け取って。C17番よ』

『了解』

立体モニター通信からマコトの声が聞こえた。それを聞き終えた後、シンジは通信を切り。シートに体を預ける。

「……いこうか。バルバトス」

初号機の目がシンジの声に答える様に光り機動を確認する。

エヴァ射出口。

発射場所へと初号機を乗せたブリッジが移動して行く。発射口、到達。

「エヴァ初号機、発進準備よろしー」

「発進ー」

ミサトの号令と共に、初号機が地上へ向けて射出される。その時、シゲルのモニターに使徒の変化を知らせるシグナルが表示される。

「目標、動きあり！体積の表面から何かを射出しましたー！」

「何ですって!?!」

使徒は八面体の体から小さい何かを上空に打ち上げた後。ソレは都市の地面に落下する。落下したモノは球体で穴が4つ。その穴から煙を噴射し周りを煙で埋め尽くす。更に使徒は上部から何かを射出し少し距離が離れた所まで飛んで地面に突き刺さる。杭状のモノからも煙が噴射され、都市一帯を煙で覆い尽くす。

「ん．．．？ 煙い」

地上に出た初号機の周りが霧に包まれた様に視界を覆う。近くの障害物やビルは視認出来る。拘束が解き。そのままカタパルトから出て、武器庫からライフルを取り出し、メイスを掴もうとした時だった。

「煙？ まさか．．．毒ガス!?」

「毒素は確認しません。この濃度は．．．煙幕?」

「目標内部に、高エネルギー反応!」

「此方の視界を妨害して．．．まさか!」

リツコが主モニターの方へ身を乗り出す。ミサトは使徒の次の行動を予測し、シンジに向かって叫ぶ。

「よけて!」

使徒は、八面体の体を複雑に変形させると、中心のコアから高エネルギーの荷電粒子砲を発射した。粒子砲を受けたビルは高熱で融解し、そのまま貫通してしまう。そして、使徒の放った粒子砲は勢いの衰えぬまま、初号機に向かって飛んでくる。そしてシンジは

「っ!?!」

瞬時に跳躍し、直撃を避ける。さつきまで初号機がいた所は薙ぎ払われ、煙幕が霧散し、十字の爆発が発生。モニターでは初号機が跳んだのを確認。ATフィールドを介した跳躍を見せる。そして、ライフルを撃ちながら降下して着地。そして駆ける。弾は使徒のATフィールドに弾かれ攻撃を無効化。

「跳んだっ!?!．．．やはりATフィールドを使うスラスターだったのね!」

「シンジ君っ! 直ぐに遮蔽物に隠れてっ!」

初号機はミサトの指示通りに、ライフルを抱えて姿勢を低くし、ビ

ル群に隠れる。シンジは初号機の内部電源の表示を見る。残り4分52秒。先ほどの攻撃でケーブルが焼き斬れてしまった様だ。ミサトからの通信が入る。

「一時撤退。その周辺のブロックを開くわっ！　そこに飛び降りてっ！　今から時間を稼ぐその間に移動して！」

「了解！」

海上を、無人ボートに牽引されたエヴァ初号機そっくりのバルーンダミーが、ライフルを使徒に向ける。次の瞬間、閃光が走りダミーはボートごと消滅した。つづいて、ミサトの指示が飛ぶ。トンネルから列車砲が現れ、砲撃を開始。砲撃は使徒へ一直線に向かうが、その手前で、ATフィールドで無効化。そして、次の瞬間、閃光と共に吹き飛んだ。本物の初号機は電源が切れる前に、素早く移動し、開いた区画へ向かう。

「十二式自走臼砲、消滅！」

「まだよ！　使徒の注意をこちらに向けるの！　頑張っつっ！」

続いて、芦ノ湖に浮かべられた無人艇が八隻。それらを順に展開して時間を稼ぐ。バルーンのライフルによる攻撃が使徒のATフィールドに無効化され弾かれる。次も荷電粒子で消滅かと思ったが使徒は何もしない。ATフィールドで無効化しながら何もしない。

「使徒が攻撃をしなくなった？　まさか、ダミーバルーンが偽者と感づいた!？」

リツコの推測が正しかったかのように使徒に変化を確認した。

「目標再び、内部に高エネルギー確認！」

マコトの報告にミサトはシンジに叫ぶ。

「シンジ君！　ダミーがバレたわ！　急いでっ!!」

初号機がライフルを捨て、そのまま駆け抜ける。目の前に開いたブロックを確認。電源もわずか・・・だが、初号機の背後から、光りが煌めく。シンジは視線を移すと、使徒がこちらに向けて荷電粒子を撃とうとしている。撃たれる前に辿り着く！　シンジはそれだけ考えを駆け抜ける。そして遂に、荷電粒子砲が初号機に向けて放たれた!! 「防壁アーマーを展開!!」

ミスアトが指示を飛ばす。初号機に直撃する現実が来るかと思われたが、初号機の背後に防護壁が展開され直撃を防いだ。そしてそのまま初号機は開いたブロックへと飛び込んだ。真っ直ぐ落ちないように壁に手や足を添えて落下速度を遅めて降下しながらシンジは上の方で爆発音を聞いた。本物の初号機を見失ったのを確認したのか使徒は攻撃を止め元の形へと姿を変える。

「目標は、攻撃を中止」

シゲルが使徒の状態を伝える。少ししてズシンツと初号機がリフトに着地した音が基地内に響いた。

「初号機回収、ケイジに誘導します」

マヤが帰って来た初号機の対応する。

「パイロット。心拍。脳波。共に正常。異常なし」

マコトがシンジの状態を報告。

「シンジ君、応答して。大丈夫?!」

ミスアトがシンジの身を案じ通信を飛ばす。

「んー大丈夫。ホツとしたらハラ減った」

シンジの変わらない返答にミスアトは安どし笑みを浮かべる。

「そう、良かった。一応検査するからその後、食べても良いわ」

「わかった。後・・・ミスアト」

シンジが背伸びをする動作をした後ミスアトに声を掛ける。

「なに？ シンジ君。やっぱり何処か痛い？」

「ありがとうミスアト。お陰で助かった」

シンジの意外な返答にミスアトは虚を突かれる。少し顔を赤くする。

「え、ええ。貴方を失う訳にはいかないから、当たり前よ」

「ん。終わったら、美味いご飯作るよ」

「む、無理はしなくて良いのよ！ まだ使徒は健在。倒してからにしましよー」

「わかった」

そして、通信が終わり。後ろからリツコがミスアトの肩に手を置く。

「ミスアト・・・」

微笑ましい顔で。周りも何処か和んでる顔をしてミスアトを見る。

「な、何よ?! その顔、とつとと作業に戻りなさいよ!」

「はいはい」

ミサトがシンジと話してる間にリツコが指示を進めていたのか皆は直ぐに次の作業へ移る。

「やれやれ。とても14歳の子供とは思えんな・・・逞しい者だ」

「・・・ああ」

シンジとミサトの様子に冬月とゲンドウはそれぞれの感想を想うのであった。

初号機のケイジではシンジがエントリープラグから出て来た所を見てプラグスーツを着たレイが走って行く。シンジは作業員達と少し話した後、自ら救護班の所に行く途中に彼の傍に着いたレイを見て大丈夫という様に微笑む。そして彼女はシンジに抱き着いた。

「・・・レイ?」

「・・・碓君」

シンジは彼女が少し震えているのを見ると、大丈夫と言いながらレイの頭を撫でた。

その頃、使徒はゆつくりと飛行しながらジオフロントの真上まで侵攻していた。地下のNERV本部がある位置で停止すると、正八面体の地面に最も近い部分をドリル状に変化させて地面に突き刺した。使徒は、硬いガラスでありながら同時に液体であるかのように、自らの体の形を柔軟に変えていく。地面に突き刺さったドリルは、そのまま地下を目指して掘り進めて行くこうとしていた。

「現在目標は我々の直上に侵攻、ジオフロントに向けて穿孔中です」

ミサトは戦術作戦部作戦局第一課に職員を招集し、使徒殲滅に向けた作戦会議を行っていた。

「奴の狙いは、ここネルフ本部への直接攻撃か。・・・では各部署の分析結果を報告して」

「先の戦闘データから、目標は一定距離内の外敵を自動排除するものと推察されます」

男性職員がプリントアウトしたデータを見ながら報告する。

「エヴァによる近接戦闘は無理というわけね。A.T.フィールドは

どう?。」

ミサトがマヤの方を見る。

「健在です。おまけに位相パターンが常時変化しているため、外形も安定せず、中和作業は困難を極めます」

リツコの隣に座ってノートパソコンを開いているマヤは、ミサトの方に体を向けて分かっている事を告げる。続いてミサトの後ろに立っていたマコトが発言する。

「MAGIによる計算では、目標のA.T.フィールドをN2航空爆雷による攻撃方法で貫くにはネルフ本部ごと破壊する分量が必要との結果が出ています」

「松代のMAGI2号も同じ結論を出したわ。現在日本政府と国連軍が、ネルフ本部ごとの自爆攻撃を提唱中よ」

リツコは眼鏡を掛けてデータの書かれた紙をめくる。
「対岸の火事と思って無茶言うわね。ここを失えば全てお仕舞いなのに」

ミサトは上を向いて愚痴をこぼす。

「しかし、問題の先端部は、装甲複合体、第2層を通過。すでに、第3層まで侵入しています」

とミサトの正面に座っている男性職員が伝える。

「今日までに完成していた22層の全ての複合特殊装甲体を貫き、本部直上への到達予想時刻は、明朝、0時06分54秒。あと、10時間14分後です」

既にカウントダウンが始まっているモニターの光に照らされながら、シゲルがミサトを見る。

「おまけに零号機は未調整のため実戦は不可能」

マコトは言う。

「初号機は少し、微調整が必要だけどすぐに済むわ。出撃は可能」
「しかし、あの使徒。初号機だけで倒しきる事が可能でしょうか?
明らかに初号機だけを徹底的に狙ってまし。そして、あの強固なフィールド」

マコトが資料を見ながら言う。

「とても、あのシンジ君だけでも倒しきるのは、難しいわね。あの使徒。まだ何か隠し持っている気がするわ。うかつに彼に無理をさせるのは危険ね」

顎に手を当て、考える素振りをするミサト。

「情報は芳しくないわねえ」

ミサトがやれやれといった感じで頭を搔く。

「まさに八方ふさがりですね……」と言ってマヤがミサトを覗き込む。

「白旗でもあげますか……」

そう言ったマコトの方を振り返って、ミサトは強い眼差しを見せる。

「そうね。……その前にちよつち、やってみたいことがあるの。確かに戦自研の極秘資料、諜報部にあったわよね」

とある工場現場。

「どうだねー!! 上手く使えるまで完成出来たかなーっ!!」

その工場で大きく声を上げる男が一人。彼の声に作業員達が一斉に返事をした。

『だいじょうぶーすっ!!』

「うんうん!! 大丈夫だねっ!! よーしっ!! もう直ぐだよシンジ君っ!! いい武器が出来るから、身体を休めるのだから!!」

ひと際大きい36歳くらいの男性が元気よくその声を高らかに発声して。巨大な『兵装』を見上げた。

第9話・決戦第3東京市・終。

「しかしまた、無茶な作戦を立てたものね、葛城作戦部長さん?」

ミサトとリツコは、新たな作戦の準備のために早速現地へと飛んだ。

「無茶とはまた失礼ね、残り9時間以内で実現可能、おまけに最も確実なものよ?」

ミサトは、ヘルメットを被って建設中の作戦現場を進んでいた。そして、列を成す大型ダンプカーの間を通過して目的の場所へと向かう。「ヤシマ作戦。その名のごとく、日本全土から電力を接收し、戦自研が極秘に開発中の、大出力陽電子自走砲まで強制徴発。未完成で自律調整できない部分はエヴァを使って精密狙撃させる。国連軍はいいとして、よく内務省の戦略自衛隊まで説得できたわね」

ミサトとリツコは、次々と資材が運ばれる現場を確認しながら歩く。

「ま、いろいろ貸しがあるから・・・なんだけど、なんかみんな潔く協力してくれたの」

「・・・そのようね」

周りを見渡すリツコ。よく見れば、戦自研の人間もキビキビとネルフスタッフ達に説明と作業の手助けをしている。

「思ってたよりも、早く準備できそうなの。なんか気味悪いわね。前はグチグチ言っていた連中がいた所からも、OKの連絡が来たのよ・・・不思議」

「そうね。特にあの、戦自研のお偉いさんの・・・たしか」

一緒その場で戦自研の施設で会った戦自研のすべてを担う男を思い出す。

「やー葛城君、赤城君。上手くいつてるかねっ!？」

すると声が大きい男性が二人に声をかける。彼こそ、兵器開発の全てを担う人間。篠山遊馬兵装技術審査部長。36歳。鼻下の髭とオールバックヘアーとキツチリとしたスーツ服が特徴の男が大きな声で声を掛けた。

「これはどうも、篠山さんっ！お陰様で早く作戦の準備が出来そうですっ！」

「それは、良かったっ!!後は君達の武運を祈ってるよっ!!」

大声で話す二人の様子を見ているリッコに篠山の付き人が来て彼女に声を潜めて話す。

「すみませんねえ。篠山部長は難聴でこうでも話さないとダメなんですよ。長年兵器開発を務めてましたから」

「そ、そうね……」

リッコは納得しながらも、一つ疑問を浮かべた。何故、兵器開発のトップが此処に来ているのかと言う事に。

「ところで、どうして貴方ほどの人が、わざわざ現場に来ているのですかあ!!」

その疑問をミサトが聞いた。

「いやー。君達の所にいる。3人目のパイロット。シンジ君に会いたくてねえー。あと、私は会議室より、現場派だから、来るのは当たり前っ!!」

その返答にリッコの眉が動く。なぜシンジの名が出て来るのか？兵器開発の人間が、一人のパイロットにわざわざ会いに来るなんて……何故だと。

「どうやら、いない様だねっ!!いやー、彼の戦い見てたけど凄いやーっ!!見事な戦いぶりに、私は思わず魂が震えたよっ!!実に素晴らしいっ!!」

「は、はあ……」

篠山閣下はシンジの戦いを思い浮かべているのか、少し興奮気味に語る。その様子にミサトは返答に詰まる。

「ミサト君っ!!頑張りたまえっ!!彼なら、きっと全ての使徒を倒せるよっ!!私も更なる兵器を作る事に全力を尽くすよっ!!もちろん、君達からのオーダーがあれば手をかそうっ!!」

「良いのですかあ!!なにか、見返りでもっ!!」

思わぬ台詞にミサトは途惑いながらも、篠山に返答する。

「いやっ!!大丈夫だあ!!とりあえず、この企画書に目を通しておいて

くれっ!!素晴らしいモノだよ!!」

そう言つて篠山はミサトに抱えていた資料を渡す。企画書名は

『試作型・ダイン・スレイヴ取り扱い説明書』

第3 東京市・市街。

『今夜、午前0分より未明にかけて、全国で大規模な停電があります。皆様のご協力を、お願いします。繰り返しします。午前0分より未明にかけて、全国で大規模な停電があります。皆様のご協力を、お願いします。』

市街地では、至るところで市民向けのアナウンスが繰り返し返されていた。トウジとケンスケは非難所に向かう前に、公衆電話である場所へ電話を済ませる。

「じゃ、いくで」

「うん」

二人は確認し合つて避難所へと向かう。

初号機・格納ケイジ。

シンジは整備員達の邪魔にならない距離から初号機の様子を床に座りながら見ていた。何時でも出撃できる様にか、プラグスーツのラフ姿で初号機を調べている整備員達を横見に何かを食べながら自分の機体を見ていた。隣にはレイと一緒に座っていた。

「碓君、なに食べてるの?」

シンジの食べてる様子にレイは気になって聞いた。

「これ? 『ナツメヤシの実』。食べる?」

「・・・うん」

シンジがレイの手に一つまみ渡し、初号機へと視線を移す。そしてレイはシンジがくれたナツメヤシの実を見て口に入れる。食べる。そして・・・

「・・・甘い」

彼女の食べた実は、甘いの一言に尽きる味であった。鬼道先生の表情を見た時の味が来るのを予想していたのだがレイはシンジが与えてくれたのを受け取りたかった。ちなみに甘さは濃すぎず、苦すぎずの味である。つまり程々で、ある。

「レイのは当たり前かな。良かったね」

「・・・うん」

シンジは次の実を食べながら初号機を見ていた。その様子を見てレイの中で何かが芽生えるのを感じた。そして、思い出す。彼は訓練が終わった後も、時々ネルフで暇があればEVAの所に来ては筋トレをしたり、EVAの頭の上まで登り寝ていた時があった。それを見たリツコとミサトはちゃんと注意をしたがシンジ曰く。

『いいじゃん。バルバトスは喜んでる』

との事であった。レイもその様子を見かける時がある。珍しい時はEVAを見つめながら座り込んでいる時がある。

(何かしらこの感じ。もやもやする。・・・好きじゃない)

今でも初号機を見ているシンジの横顔を見てレイは意を決して聞いてみた。

「碓君」

「?なにレイ」

彼女の声にシンジは視線をレイに移す。その視線にレイの胸が少し熱くなる。レイはこの高鳴りを抑え、シンジに話しかける。

「碓君は、EVAが・・・好きなの?」

レイの突拍子の台詞にシンジは首を傾げ、あー、と思い付いた。

「好きと言うよりは、相棒の様子を見に来たくらいかな・・・これも戦うにはバルバトスが必要だし」

「バルバトス・・・名前をつけてるの?」

「うん。『昔』一緒に戦ったのと同じ。乗った時・・・懐かしいモノを感じた。いや、同じだ。だから、コイツはバルバトスなんだ」

EVAにつけた名前の事を話し、シンジはまた『ナツメヤシの実』を食べる。

「レイもEVAあるんだよね?」

「……ええ。私のは、零号機」

「そうか……一緒に戦う事になるかもね」

「うん……」

日が西に傾きかけた頃、使徒は未だ第3新東京市の地下へ侵攻を続けていた。一方、ヤシマ作戦の準備は着々と進められていた。膨大な資材と人が投入され、作戦本拠地周辺は異様な熱気に包まれていた。

「使徒の先端部、第7装甲板を突破」

シゲルが使徒の状況を報告する。

「エネルギーシステムの見通しは？」

トラックの荷台に作られた仮設の司令室でミサトが状況を確認する。

『電力系統は、新御殿場変電所と予備2箇所から、直接配電させます』
『現在、引き込み用超伝導ケーブルを、下二子山に向けて敷設中。変圧システム込みで、本日22時50分には、全線通電の予定です』
オペレーターの通信が次々と流れ込んでくる。

「狙撃システムの進捗状況は？」

ミサトが確認を続ける。

「組立作業に問題なし。作戦開始時刻までには、なんとかします」

「エヴァ初号機の状況は？」

ミサトは素早く振り返り、次々と指揮を執っていく。

「問題なし。ATフィールドを応用したスラスタシステム異常なし。専用のB型装備に換装中。あと2時間で形に出来ます」

「零号機は？」

「狙撃専用のG型装備に換装中。こちらも2時間で完成します」

「了解。後はパイロットね」

ミサトは一通りの確認を終えると、モニターをじっと見つめる。

「シンジ君は問題ないと思うけど……零号機とレイの方ね」

リツコは少しミサトが思う不安を具体的な言葉にして出す。

「ええ。彼女はまだシンク口に成功したとは言え、零号機がちやんと

機能するかどうか不安な所があるわ」

NERV本部の司令室。

冬月は、本作戦においてゲンドウがどういう思惑を持っているのかを確認する。

「初号機パイロットの処置はどうするつもりだ？」

「ダミープラグは試験運用前の段階だ。実用化に至るまでは、いまのパイロットに役立つてもらおう」

ゲンドウは、あくまで乗ることを前提に考えを進めているようだった。

「そう言えば……レイがシンジ君の事を気に入っている様だが、あのままで良いんだな？」

冬月のその言葉にゲンドウの眉が少し動く。握っている手に力が入っている様子を冬月は見逃さなかった。

「真実を知ればシンジは拒絶する。今のうちに仲良くしたところ……レイは私の手に戻って来る」

次のゲンドウの言葉に冬月は少しだけ懸念の色を見せる。

「ふむ。そうだと……いいな。それに、戦自研が最近おとなしいと思わないか？」

「構わん。こちらとて都合が良い。老人達が何を企んでいるにせよ如何なる手段を用いても我々はあと8体の使徒を倒さねばならん。全てはそれからだ」

ゲンドウは、先にある目標に到達するためには犠牲を問わない覚悟を見せる。

「そうだな。まあ、『頑張ろう』か」

そう言つて冬月は右手で口元を隠し、内側で『嗤った』。

レイは電車の中に乗っている夢を見ていた。車窓から夕日の光が差し込んでいる。電車の車輪が線路の継ぎ目を乗り越えていく音が

聞こえる。

「私は碓君を見た時、何か温かいのを感じた。碓司令とは違う。包まれて……安らげる。そう、胸の中が温かいの……碓君の料理を食べて、初めて美味しいと言う気持ちを理解した。私にお弁当を作ってくれた。碓君の手は……温かい。とても、安らぐ。碓君の事を考えると、また会いたいって考える。この気持ち。何かしら？わからない。でも碓君ともっと話したい。碓君の料理が食べたい。初めてなの、この気持ち。碓君に会う前はただ碓司令の命令を聞いて、EVAに乗って、それで良いと思ってた。でも……私……」

「本当は苦しかったんだろ？」

オレンジ色に照らされたレイの正面には『黒い人の形をした』何か
が座っていた。隣には『幼いレイ』が座っている。黒い人と『前』の
自分を眺める。

「苦しかったよな？あー苦しかった。『生まれ方』稀有だけど確かな命
はお前にはあった。しかし碓司令はそんなお前自身を見てなかった。
本当は別の視点で見っていた。自分の、自分だけの肉人形……あー
!!悲惨っ!!なんて、なんて、なんて可哀そうなんだっ!!ほかあ、悲し
いよお？なあ？苦しいからシンジに手を伸ばしたんだろ？彼なら自
分を救ってくれるって。そう思ったから手を伸ばしたんだろ？良い
事言ってくれたからなあ？」

何時の間にか黒い人がレイの前に立っていた。黒い人から荒んだ
声が出る。黒い人から三つ目が浮き出る。三つ目がぎよろぎよろと
動きレイを見た。

「……私は自分がどうして生まれたのか、解らなかった。でも、
何時も碓司令がいてくれて、私を助けてくれて、私を必要としてくれ
たから……碓司令の為に生きて無に還ればそれで良かった」

「だが、お前の中には碓シンジが大きな存在へとなった。碓司令と違
い、過ごした時間は違いがあれどお前を『人間の少女』として、人形
ではなく。人間の一人として見てくれて、心配してくれて、手作り料
理を食べさせてくれて、助けてくれた。お弁当もくれた。味噌汁温か
かったな。そして、手を繋いでくれた。優しくかった？嬉しかった？

そうだよなー。碇司令は・・・冷たかったんだろ？美味しくなかっただろ？考えさせてくれなかったんだろ？人間では、なく。自分に従う道具として見ていた。本当は気づいていたんだろ？自分だけを見ていない事も。だってお前は・・・」

黒い人の首がぐにやりと横に曲がり。三つ目は彼女を見ている。座っている小さなレイは歪に笑っていた。レイは恐怖する。幼い自分の顔があんな表情で此方を見ているのが。

狂笑の相。

「・・・ヤメテ」

それ以上聞きたくない様にレイは表情は苦痛に歪み自分の両耳を塞ぎ蹲る。しかし黒い人の声は聞こえ、次の言葉が彼女の心を騒めかせる。

「ゲンドウはあの時、目で言っていたはずだ。『あそこで』彼は言うつもりだった。レイ。お前は人間ではない人ではないお前をシンジが受け入れてくれる訳がないとな。お前の正体は本当に『人形』みたいに生み出せる。幾らでも替えが効く。幾らでも生み出せる。何度でも、何度でも、何度でも、何度でも生産できる。ゲンドウの愛玩具。可愛げが無くなれば何時でも代わりを生み出す。都合が悪ければ、言う事聞かねば、逆らえば、『今』のお前は簡単に殺される。処分される。捨てられる。それがお前。運命も、未来も切り開けない・・・哀れな、生き人形。人形に心など必要ない。考える事も。感じる事も、

創造主の都合のいい様に動けばそれで良い。それだけがお前の存在理由。それが綾波レイだ。人間の振りをした化け物。それが、綾波レイだっ!!」

「やめてえっ!!」

レイが目を瞑って叫ぶと周りから大きい音がした。その音が二度、三度と続くその音はまるで巨大な何かが『歩く』音だった。

ズシンツ!!!

今度は近い。黒い人は距離を取り上に三つ目を動かす。

「あー。もう終わりかあ………頑張れよ嬢ちゃん」

ゴシヤアツ!!!

空間が割れて、巨大な塊が黒い人と小さいレイの上から押し潰すように落ちて来た。レイは恐る恐る顔を上げて目の前の光景を見る。両耳から手を離し、周りを見る。電車は止まり、目の前には巨大で白い装甲に覆われた鉄拳が振り下ろされていた。

「Woo!!!」

獣の様な咆哮が轟き、空間を書き換える。電車の中だったのが赤い大地の世界へと変わった。特徴的な二本角。鋭い緑色の輝く双眼。禍々しい形状ながらも、神聖な白狼の様なフォルムの巨人。不思議と恐怖は感じない。とても気高い圧を感じた。そして、レイの背後に白衣の女性が優しく抱きしめて彼女の耳元に囁く。

『イキナサイ』

その囁きがレイの心に新たな芽吹きが開花したのを感じてレイの紅い瞳から涙が一滴流れ、世界が光りに包まれる。そして、感じる浮遊感。真つ白な世界で巨人がレイを掬う様に包む。その中でレイは安らぎを感じた。

「レイ。大丈夫？」

レイは夢から覚めてシンジの膝枕から目を覚ます。自分の状態を確認してレイはシンジと一緒に居て不安を消したくて彼と話したくて、一緒にいたくて、彼の膝の上に頭を乗せて横になり寝ていた。シンジの方は目が覚めたレイを見て目尻のあたりに触れて何かを拭つ

てくれた。

「泣いてたよ。苦しそうだったし。何か嫌な夢を見た？」

そう言っつてシンジは自分を見つめるレイの頭を撫でていた。

「い、かり・・・くん」

レイはシンジの手に触れ。その手を自分の頬に優しく擦りつける。

彼の温もりを感じる為に、シンジが傍にいたと安心する為に。

「大丈夫。大丈夫だよレイ。僕はここにいます」

「うん」

「僕は死なない」

「ん・・・」

シンジはそう言っつて、レイの手を優しく繋ぎ。空いた手で彼女の頭を撫でる。

「レイも死なない。一緒に生きる」

「うん。碓君」

「一緒に戦える。もうレイは一人じゃない」

「・・・私。碓君、私がもし使徒と同じ人じゃない存在だったら・・・」

碓君はわたしも殺すの？」

「レイ？」

レイの様子にシンジは気づく。彼女を撫でていた手を彼女の頭部に寄せたまま見る。

「碓君。私、私ね。本当に、『代わりが』いるの・・・」

そう言っつたレイの手が震えているのを感じ取るシンジはレイの話聞く。

彼女は語る。自分の存在と生まれた意味をシンジに話す。彼には生きて欲しいと思っつたから。自分を拒絶するかもしれない事を恐れながらも、彼女は話した。これが最後かもしれないと・・・。

「そうか」

シンジはレイからすべて聞いた。聞いてもシンジの表情に変化はなかった。

「わたしも、同じ。碓君にとっての敵と同じ。だから・・・わたし」

「そんな事ないよ」

シンジはそう言つて横になつて、レイの頭を優しく撫でる。

「前にも、言ったよね？ 僕の知っているレイは僕とこうして膝枕して頭を撫でられて。ご飯を美味しく食べてくれた此処にいる綾波レイだけだよ。他に代わりがいたとしても、僕はこうしているレイだけを選ぶ。奴らと同じでもレイはミサトやリツコと同じ『ヒト』だよ」

「でも、わたし……」

「あげても良いの？」

「え？」

レイが少し顔を上げ、シンジと目を合わせる。

「その代わりに、レイの思い出。全部、そいつにあげても良いの？」

レイは想像した。彼女が経験して来た。温かい初めての食事。碓シンジと触れ合った思い出。初めて自分を見てくれて。自分だけを見てくれたシンジの存在を。美味しいと感じた温かくなる気持ちも、シンジとの出会いで得た安心感と思ひ出を造りたいと言う気持ちが全て、『代わり』に持つてかれる喪失感を。

困惑。焦り。不安。喪失。苦痛。絶望。拒絶。レイの頭の中でその結果を考えた時、起き上がりシンジに抱き着く。必死にしがみ付く。シンジは受け止め、子供をあやす様に背中を優しく撫でて。ポンポンと優しく叩く。

「いや……いやっ！」

「うん。それでいいんだよ。それが綾波レイと言う『ヒト』の証だ。大丈夫。レイは死なせない。だから、一緒に行こう？ 絶対に。死なせない。殺させもしない。一緒に進もう」

「うんっ！ 碓君っ！ 一緒に、私も一緒に行きたい。生きたいっ！ いかりくんと……一緒に！」

シンジもレイに手を回し、優しく抱きしめた。親が生んだ愛おしい命を抱きしめる様に。その様子を陰で見ている者達から暖かい視線の存在に二人はまだ、知らない。

完全に日が落ちた第3新東京市では、使徒がサーチライトの光で照らされていた。それは巨大なモニュメントのように街の上空に浮か

び上がっていた。

『敵先端部、第17装甲体を突破』

作戦本拠地周辺の準備は滞りなく進められていた。

『NERV本部到達まで、あと4時間55分』

『西箱根新線及び、南塔ノ沢架空3号線の通電完了』

連結したディーゼル列車に乗せられて大量の変電設備が運び込まれる。陸路で輸送を行っているトラックが次々と到着する。

『現在、第16バンク変電設備は、設置工事を粗鋼中』

『50万ボルト通常変圧器の設置開始は予定通り。タイムシートに変更なし』

『第28トラック群は5分遅延にて到着。担当者は結線作業を急いでください』

街中の電源を集めるための変圧器が郡をなしてしてひしめき合っている。

『全SMBusの設置完了。第2収束系統より動作確認を順次開始』

『全超伝導・常超飽圧対象変圧器集団の開閉チェック完了。問題なし』

エヴァが射撃を行う場所に陽電子砲がクレーンで運び込まれる。

『これが大型試作陽電子砲ですか』

マコトは発射台に設置された鉄の塊を見て感想を口にする。それは大型の船くらいもある常識外れの巨大なものだった。

『急造品だけど、設計理論上は問題なしね』

リツコは組みあがった作戦の要を見上げる。

『零点規制は、こちらで無理やりG型装備とリンクさせます』

マヤはノートパソコンに向かって問題点を解決していく。

『ま、あてにしています』とマコトが言う。

『後はパイロットね・・・ミサトうまくやるといいけど』

ビルの上に掛かった空中の渡り廊下で、シンジは手すりにもたれて夜を眺めていた。

『シンジ君、集合時間が5分前よ。話ってなに?』

シンジからの呼び出しに來たミサトは、ビルの外へ出てシンジに歩み寄る。シンジはミサトが來たのを確認して振り向き。彼女を見る。

矛盾のない目がミサトを見て。彼女の首筋がぞわりと身震いした。

「どうしたのかしら？・シンジ君」

平静差を装い。ミサトは大人の自分を取り繕う。シンジがただの子供ではない事を思考の片隅におき、シンジと対等な立場になる様に余裕を見せる。

「ミサト、聞きたい事がある。どうして使徒は此処に来るの？」

「ッ……」

シンジの声と台詞に心拍が少し上がる。彼のこの雰囲気にも何時も飲まれる自分が歯痒いと何度も思った。

「ミサト。僕は自分の意思で此処に残って、使徒と3回戦った。『此処に』、『3回』現れた。人間をただ殺すなら第3東京市にだけ来る事は無い筈……そして、今回。あの使徒が本部？の上に来た。どうして、ミサト？」

ミサトはシンジの様子が真剣である事を察して彼に『アレ』を見せる決心をした。

「シンジ君……ちよつち。付き合つて」

そう言つてミサトはシンジに手を差し出す。シンジはミサトの手を取り。一緒に歩き出す。

エレベーターに乗り込んだ二人は、手をつないだまま肩を並べて地下へと降りていく。

「15年前、セカンドインパクトで、人類の半分が失われた。今、使徒がサードインパクトを引き起こせば、今度こそ人は滅びる。一人残らずね」

正面を見たままミサトが真面目な口調で話し始める。シンジは授業の知った事とミサトとリツコが前に話してくれた事を思い出す。ミサトの真剣な表情を見る。

「私たちが、ネルフ本部レベルE E Eへの使徒侵入を許すと、ここは自動的に自爆するようになってるの。たとえ使徒と刺し違えてでも、サードインパクトを未然に防ぐ。その覚悟を持って、ここにいる全員が働いているわ」

「そうなんだ」

シンジの様子にミサトは構わず話を続けていると、エレベーターのカウンターが「L—E—E—E」を指す。そして最深部に到達したミサトは、最後のゲートの前に立ってロックを解除する。

「ミサト。これが」

「……ええ」

ゆっくりと開かれた重い鉄の扉の向こうには、十字架に貼り付けにされた巨人の姿があった。真っ白な体をした巨人は、下半身が無く、手に杭を打ち付けられ、胸には巨大な槍が刺さっている状態だった。

「これこそが、この星の生命の始まりでもあり、終息の要ともなる、第2の使徒リリスよ……」

「リリス……」

「そう。サードインパクトのトリガーとも言われているわ。このリリスを守り、エヴァで戦う。それはあなたにしか出来ないことなの。私たちは、あなたとエヴァに、人類の未来を託しているわ」

「レイも……託されているの？コイツを守る為に戦わされてるの？」

「そうね」

「どうして？僕はともかく、レイまでやらなきゃいけないの？」

シンジがミサトの方へ顔を向ける。

「ごめんなさい。理由はないの、その運命があなたとレイだっただけ。ただし、シンジ君とレイの二人が、命を賭けて戦っているわけじゃないの。みんな一緒よ。リツコも、そして私もあなた達が使徒に勝って死なせない為に……ね？」

ミサトは手をつないで横に立っているシンジの方に振り向いて、明るい表情を見せる。

「運命とかどうでも良いけど……みんなが此処で戦う理由はわかった。後は前に進むだけだね」

「シンジ君……」

「ミサト。ミサトはさ、この居場所よりも良い所があるって信じる？」
リリスを見上げるシンジを見てミサトもつられて一緒に見上げる。

「そうね……そんな所、あればこんな処にいないわよ。あつたとしても……私は」

『俺』はあると思う。ミサトにも、レイにも、みんな。必ずある。『俺』はその場所に辿り着いた事がある。だから……ミサトも辿り着ける。まずは使徒を倒さないかね」

ミサトは俯き、目を抑える。シンジは隣にいるミサトの手を優しく握る。

「……ごめんね。シンジ君。……ごめん」

『俺』は死なないよ。ミサト」

すすり泣くミサトはシンジの手をぎゅっと握り締める。

作戦現場にエヴァが運び込まれると、その機体がサーチライトに照らされて浮かび上がる。

「では、本作戰における、各担当を伝達します」

ミサトは手を腰に当ててシンジとレイに指示を出す。

「シンジ君」

「ん。？もぐもぐ？」

「初号機で防御を担当」

「・ゴクツ・任せて」

「レイは零号機で砲撃を担当して」

「はい」

二人の返事の後で、リッコがより詳細な指示を説明する。

「今回は、より精度の高いオペレーションが必要求められます。そのため、未調整ながらも砲撃だけでも可能な限り調整を施した零号機で正確に使徒のコアを一点集中で貫く。レイ。陽電子は地球の自転、磁場、重力の影響を受け、直進しません。その誤差を修正するのを忘れないでね」

「リッコ。コア何処かわかるの？」

リッコの理路整然とした説明を聞いたシンジが何となく質問を飛ばす。

「大丈夫。目標内部に、攻撃形態中だけ実体化する部分があるわ。そこがコアと推測されるわ。狙撃位置の特定と、射撃誘導への諸元は、全てこちらで入力するから。レイ、貴方はテキスト通りにやって。最後に真ん中のマークが揃ったタイミングで、スイッチを押せばいい

の。あとは機械がやってくれるわ」

リツコが説明する背後では、零号機を射撃位置へ輸送する作業が進められていた。

「ただし、狙撃用大電力の、最終放電集束ポイントは、一点のみ。ゆえに零号機は狙撃位置から移動できません」

「だから僕がレイを守るんだね？」

シンジは作戦内容を聞いて、ATフィールドを思い浮かべた。

「そうよ。本来なら、初号機を砲撃に担当したかったけど……シンジ君は前の射撃シミュレーションで77.7%。狙撃には向いてないわ。今までの戦いから見て、シンジ君は使徒の注意を引き付けて欲しいの。貴方の強力ATフィールドと使徒が初号機を狙っていると言う事を最大限に使います。初号機には盾を持たせるからいざと言う時はそれで零号機を守ってね。ところで、シンジ君」

「？」

リツコが少し俯き考えている。レイはその様子が気になった。そして顔を上げて話す。

「初号機の装甲が『変異』を起こしているの。その所為で今はB型装備しか換装できないわ。シンジ君。貴方、本当に心当たりない？」

「うーん。ないな」

シンジはピンと来ない表情で首を傾げる。その反応にリツコの眉がピクリと動いた。

「はいっ！時間よ二人とも着替えて」とミサトが促す。リツコの表情が少し曇ってる気がしたのか早々に切り上げる様に誘導する。少し冷や汗が流れるのを感じた。シンジとレイはそれぞれ返事をして仮説の更衣室へ移動する。

仮説更衣室の中で二人は着替える。シンジはふと、自分プラグスーツがまた少し変わってる事に気付く。主に背中 of 脊椎の辺りが少し痩せて角がないフォルムになった。とりあえずシンジは着替える。そしてプラグスーツのスイッチを押すと前よりも背中、主に脊椎の辺りがよりフィットした感じである。少しストレッチするシンジ。スーツが彼の逞しい筋肉質ながらもどこか中性的なボデイラインを

出している。

「悪くないや」

二人の間は薄いシートで視界を遮られていた。レイが着替える姿が黒いシルエットになってシートに映る。

「レイー。そっちは大丈夫？」

「うん。碓君はもう着替えたの？」

「ん。思ったより背中が軽い。前のは少し重い感じがした」

レイは制服を脱ぐと、裸のままプラグスーツに体を入れていく。ふとシンジの視線が床にレイの下着が落ちたのを見た。

『いいか。シンジ。男は常に紳士だぞ。軽率な行動と反応、そして心の持ち様と目尻。そして視線に気をつけろ』

女子に袋叩きにされた別の中学のクラスメイトの言葉を思い出した。シンジは視線を外しベンチに座り。レイが着替え終わるのを待つ。そう、昔の『友達』がシンジにサムズアップしながら屈強な女子に引きずられて行くのを思い出し笑うのを堪えた。

「碓君、いる？」

「…うん。いるよー。どうしたの？」

レイがプラグスーツのスイッチを押すと、ぴったりと体になじむ。

「一緒にいきたい」

着替え終わったレイが出て来てプラグスーツに包まれた姿がシンジの傍に近づく。シンジは立ち上がりレイと一緒に更衣室を出て行く。ふとレイの手が自然とシンジの手を握る。若干震えているのを感じた。

「レイ大丈夫。僕は死なない」

「碓君…」

「レイも死なない。僕が守る」

「…うん」

そう言っただけでシンジはレイの手を優しく握り返し大丈夫と意思表示を彼女に示す。

「あ、シンジ君っ!!」

「ミサトどうしたの？」

ふと気づくとミサトが手にボイスレコーダーを持って歩み寄って来る。そしてシンジへ手に持っていたボイスレコーダーを渡す。

「本部広報部宛に届いていた伝言よ」

シンジは、その場でレコーダーを再生させて耳に当てる。

『センセ。鈴原や。負けんやないでー絶対に、帰って来てくれや。ワイもつとセンセ、いや。シンジと話したいんや』

『えー、相田です。碇、頑張れよ』

『洞木です。碇君。貴方が今、どれだけ大変かわからないけど……ちゃんと帰って来てね。色々言いたい事がまだあるから……それじゃあ。頑張つて。綾波さんと一緒に帰って来てね』

シンジの耳に聞こえてきたのは、今のクラスメイトからの励ましの伝言だった。シンジは無言のまま、流れる音声に聞き入る。その時、ヤシマ作戦の第一段階である大規模な停電が始まった。街の明りが徐々に消えていく。街灯が消え、信号の明りも消えると、辺りは暗闇に包まれた。そして、作戦にエネルギーを一点に集中させるため、日本全国が消灯して夜と同化する。

シンジは、作戦開始を待つ間、エヴァ搭乗のために立てられた足場に座って夜を眺めていた。

「レイ。怖い？」

シンジの隣でレイが寄り添うように身を預けていた。まるで別れを惜しむかの様に。

「前はこんな事、なかった。私には碇司令やEVA。みんなのとの絆があったから……でも今、本当に怖いのは碇君がいなくなりそうなのが……怖い。私にはみんなのいるその先に碇君がいるの。碇君がいれば……私、怖くない。だから、碇君……」

「言っただでしょ？レイ。僕は死なない。僕もレイも一人じゃない。ミサトやリツコ。マヤさん達がいるから大丈夫。怖くない。大丈夫だよレイ。僕もレイがいるから、みんながいるから怖くない。大丈夫。みんなを、レイを置いて絶対に死なない。僕もみんなと生きて前へ進む」

そう言つて、シンジはレイの手を握った。レイの手にシンジの手の

温もりが全身に流れ。恐れを緩和する。

「うん。私も一緒に進みたい……死なないで碓君」

シンジはレイの頭を少し撫でた後、握っていた手を離し一緒に立ち上がる。

「時間だね。行ける？・レイ」

レイはさつきまでシンジが握ってくれた手を大事そうにもう片方の手で包む様に胸元に当てた。少し俯いた後、顔を上げシンジを見る。

「うん。碓君がいるから大丈夫。私も碓君を死なせない」

「うん。一緒だね。じゃ、行こうか。みんなと使徒を倒しに」

『ただ今より、午前0時、丁度をお知らせします』

「時間です」

マコトが時計を見て予定の時間が来たことを告げる。

初号機は盾を左手に持ち。右手にはロングライフルを装備。背中にマウントが可能になったジョイントが自己進化で精製されリッコ達はそこに新型メイスを取り付ける事にした。

「ミサト。使徒倒したら何食べたい？」

シンジはミサトに通信を入れ、終わった後の事を話す。

「え!?そ、そうね。それじゃあ、前に食べた『コロツケ』が良いわ」

「わかった。あとレイにもご飯作ってあげたいから絶対に勝って来る」

「ええ……シンジ君。EVAに乗ってくれて本当にありがとう。感謝するわ。だから……死なないで」

「大丈夫だよ」

互いに話終えた後、作戦を開始する号令が響く。

「ヤシマ作戦発動！陽電子砲狙撃準備。第1接続開始」

ミサトの号令と共に、今まで待機中にあつたものが一斉に動き始める。

「了解、各方面の1次及び2次変電所の系統切り替え」

マコトが順を追って作業を進める。それに続き、次々とオペレーター通信が始まる。

『全開閉器を投入、接続開始』

『各発電設備は全力運転を維持。出力限界まであと0.7』

『電力供給システムに問題なし』

『周波数変換容量、6500万kWに増大』

『全インバータ装置、異常なし』

『第1遮断システムは順次作動中』

『第1から第803管区まで送電回路開け』

マコトが次の指示を出す。

『電圧安定、系統周波数は50Hzを維持』

『第二次接続』

ミサトが次のフェーズへの移行を宣言する。

『新御殿場変電所、投入開始』

『新裾野変電所、投入を開始』

『続いて、新湯河原予備変電所、投入開始』

『電圧変動幅、問題なし』

『第3次接続』

オペレーターの各報告を受けてミサトが指示を続ける。

「了解、全電力、二子山増設変電所へ」

マコトがミサトの指示をつなぐ。

『電力伝送電圧は、最高電圧を維持』

『全冷却システムは、最高出力で運転中』

『超伝導電力貯蔵システム群、充填率78.6%』

『超伝導変圧器を投入、通電を開始』

『インジゲータを確認、異常なし』

『フライホイール回転開始』

『西日本からの周波数変換電力は最大値をキープ』

大量のケーブルでつながれた機材に電力が供給されていく。発令所ではゲンドウと冬月が事の成り行きを見守る。

『第3次接続、問題なし』

現状、作業は順調であることをマコトが確認する。

「了解、第4、第5要塞へ伝達。予定通り行動を開始。観測機は直ちに

「回避」

ミサトの合図で、地上に設置されていた攻撃ポッドから大量のミサイルが発射される。ミサイルは群れとなって使徒へ一直線に向かっていく。射程範囲内に敵を捕らえた使徒は、小さなパーツに分離して時計のような陣形を取ると、荷電粒子砲を照射しながらぐるりと一回転させて応戦する。

「第3対地攻撃システム、蒸発！」

ミサイル郡が一瞬にして消え去ったことをマコトが伝える。

「悟られるわよ、間髪入れないで。次！」

ミサトは怯まずに次の攻撃を指示する。続いて、丘の上に設置された砲撃要塞から長距離射撃が実行される。砲弾は使徒の至近距離まで到達するも、A. T. フィールドによって弾き飛ばされてしまう。使徒は砲台のような形に変形すると、強力なエネルギーを一点に集中させて荷電粒子砲を放つ。

「第2砲台、被弾！」

主モニターに映し出された攻撃用マップが次々と塗り替えられていく。

「第8VLS、蒸発！」

「第4対地システム、攻撃開始」

「第6ミサイル陣地、壊滅！」

「第5射撃管制装置、システムダウン！」

「続いて、第7砲台、攻撃開始」

予想通り、通常兵器は使徒に対して全く歯が立たなかった。事前に分かっていることとはいえ、NERV本部の焦りは強まっていく。

「陽電子予備加速器、蓄電中、プラスステラ」

「西日本からの周波数変換電力は3万8千をキープ！」

「電圧稼働指数、0.019%へ」

「事故回路遮断！」

「電力低下は、許容数値内」

「系統保護回路作動中。復帰運転を開始」

「第4次接続、問題なし」

通常攻撃で使徒の目を眩ましている間に、零号機の陽電子砲につながれた充電装置に湯気が立ち込めてくる。

「最終安全装置、解除！」

ミサトが号令を掛ける。

「撃鉄を起こせ！」

マコトの指示で、ヒューズが装填され、うつ伏せの体勢で陽電子砲を構えた零号機の顔の前に照準が下りる。

初号機は盾を構え、使徒の動きを見る。どんな挙動も見逃さない様にパイロットのシンジはジッと見る。

(焦るな。焦るな。木化けだ、木化け)

零号機の距離を直ぐに盾になれる動きをシンジは頭の中で何度も復習する。

(先生達の教訓を思い出せ。死なない為の『創造』)

「照準器、調整完了」

マヤが零号機側の準備が整ったことを伝える。

『陽電子加速中、発射点まであと0.2、0.1』

「第5次、最終接続！」

続いて、ミサトが次の段階へ進めるように指示を出す。

「全エネルギー、超高電圧放電システムへ！」

マコトが現場へ指示を回す。

『第1から、最終放電プラグ、主電力よし！』

『陽電子加速管、最終補正パルス安定。問題なし』

外で慌しく準備が進められる中で、レイは使徒への狙いを定める。

あの使徒を倒せばみんなもシンジも助かる事を考える。レイは集中する。小さく呼吸して雑音を消す。全ては生き残る為、シンジが言っていた。居場所へ行く為に。そして、通信からカウントする音声がかえる。狙撃に必要な情報の音だけをレイは拾う。

「13、12、11、10、9、8、7、6、5、4、3、2、1……」

「発射！」

ミサトの合図でレイは引き金を引く。充電された電力が、陽電子砲の先端から一気に放出される。陽電子砲の放ったエネルギーの塊は、

使徒のA・T・フィールドを貫通して使徒を捕らえたかに見えた。使徒は体を黒くして硬直し、悲鳴を上げた後に大量の血を辺り一面に撒き散らす。

「やったか!？」

ミサトは拳を握り締めてモニターを見る。しかし、使徒は下の正八面体の姿に戻ると、ひび割れた体を修復すると赤い光が正八面の中心から一回転して何かを探す様に動きその光が此方を見た様に見えた。

「……外した!」

ミサトがそれを見て身を乗り出す。

「まさか、このタイミングで!？」

マコトが叫ぶ。

「目標に、高エネルギー反応!」

モニターに映し出された変化に気づき、マヤが報告を入れる。

「総員、直撃に備えて!」

ミサトが叫んだ瞬間、使徒はヒトデのような形体に変化し、シンジたちのいる方へ向かって強力な荷電粒子砲を発射する。使徒の放った一撃は、矢のように鋭く山に到達すると、その高温であらゆるものを融解させる。

「ッ!!」

シンジは盾を翳し。爆風の高熱から零号機と自分の身を守る。シンジは一早く行動した。使徒の気をこちらに引き付ける行動を使徒にライフルを構える。シンジは照準を見て使徒に入ったのを確認。そして引き金を引き発砲。弾丸は使徒に当たるが効果なし。赤い光が動き初号機を捉える。

「感覚で撃つ。前と同じ。ミサトとリツコの命令を果たす」

初号機がATフィールドのスラストを噴射しホバー移動する。零号機から使徒の注意を自分の方へと集める。ライフルを使徒に向け、連射。あくまで自分はおとりの様なモノ零号機との距離を確認。使徒に感づかれない様に出る。

「……エネルギーシステムは?」

大きな揺れで吹き飛ばされたミサトは、歯を食いしばりながら起き

上がってマコトに聞く。

「まだいけます。既に、再充填を開始」

マコトは注意深くモニターを見据える。

「陽電子砲は？」

ミサトは膝をついたままマヤに尋ねる。

「健在です、現在砲身を冷却中、でもあと一回撃てるかどうか……」

使徒の攻撃から守られたものの、爆風の衝撃で零号機は後ろへ体勢を崩していた。

「確認不要、やってみるだけよ。レイ、大丈夫？急いで零号機を狙撃ポイントへ戻して」

「了解」

レイは零号機を起こし、陽電子砲を抱かえ上げ。狙撃位置へと戻り態勢を整える。

（碓君っ!!）

「目標に変化ありっ！更なる高エネルギー反応っ！」

マヤの声にモニターに映る使徒の形態が結晶の様な形状に変わり。その中心の赤い光が初号機を見る。使徒の中心で何かが作られていた。

「何なの？まさか……零号機の射撃準備は!?!」

「銃身、固定位置！」

「零号機、G型装備を廃棄、射撃最終システムを、マニュアルに切り替えます」

マヤが第2射の準備に入る。使徒の動きにミサトは使徒の狙いが初号機へと移っている、そこまでは良い。シンジには陽動と防御を担当しているが……嫌な予感がした。

ぞわり。

（あれ？なんか……この感じ。前にも味わった気がする。たしか、アレは）

初号機は使徒が此方を見ているのを確認すると零号機から離れすぎない様に考えたが、シンジの感が今すぐ距離を取った方が良くと行動を開始する。ATフィールドのスラスタを全開にし高く跳躍す

る。

ぞわり。

レイの中で悪寒がした。初めて味わう見えない危険への圧が彼女の心に押し掛かる。そして、使徒の中心から杭状のモノが出て来たのを確認する。湯気を出しながら精製されたそれは何かを捉える様に動く。結晶の形態が回転し『それ』を打ち出そうとしているかの様に。初号機に向ける。

「敵先端部、本部直上、ゼロ地点に到達」

シゲルが使徒の侵攻について報告する。

「第2射、急いで！」

ミサトが焦りを抑えきれずに声を上げる。

「ヒューズ交換、砲身冷却終了！」

「射撃用所元、再入力完了。以降の誤差修正は、パイロットの手動操作に任せます！」

「目標に、高エネルギー反応っ！」

マヤが使徒の攻撃を察知する。

使徒から火花が散り、杭が目にも止まらぬ速さで打ち出された。跳んでいた初号機は反射的に盾を前に出すが……

グシャアアアアアアアアアッ!!

盾を貫通し、左手が割き。初号機へと激しく突き刺さる。その威力は初号機の装甲を貫通し深く突き刺さるその衝撃で初号機は後方へ吹き飛んだ。激しく地面へと撃ち突かれ倒れ伏した。左手から腕の付け根まで吹き飛び無くなっていた。

「シンジ君っ!!」

ミサトが叫び。

「初号機、左腕破損、損傷不明！」

シゲルの声が状況を知らせる。

「シンクロ率低下、パルス逆流、活動維持に問題発生、パイロット意識不明っ！」

マヤが事態を告げる。

「レイ、次はこちらに使徒が攻撃してくるわっ！照準合わせて、……」

レイ?」

リツコが切羽詰まった声で零号機に通信を飛ばす。しかしレイは目を大きく見開き、呼吸が乱れ我を忘れていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、あ、ああああ。い、か……り」

発令所のモニターにレイが苦しむ声が聞こえる。

「レイ、しっかりしなさい、レイっ!!まだシンジ君が死んだ訳じゃない。しっかりしなさい!!」

リツコが必死に通信を飛ばしてもレイの耳には届かなかった。そうしている間に使徒が形状を変え、と此方へと向きを変える。此方を捉え、光りが収束していく。

「目標に再び、高エネルギー反応つ、撃つてきますっ!!」

マヤが使徒の攻撃を察知する。

「やばいっ!」

ミサトがモニターの方に振り返って叫ぶ。使徒は零号機に向けて強力な荷電粒子砲を発射した。

「あ……」

レイが声を上げた時、零号機が狙いを定めた山は高熱のエネルギーに包まれた。

「レイっ!!」司令席にいたゲンドウが思わず立ち上がり叫ぶ。

何処もない空間の中、シンジはゆっくりと落ちていく感覚のなか目を覚ました。

(あれ……ここは、前にも来た事あったけ?あー思い出した。オルガの命令を果たす時だ……明弘、ハッシュ。俺はみんなの所に行けなかった……)

ふとシンジの手を握り引つ張り上げてくれる手が伸びてきた。

(僕たち、一緒に行くって言ったよね?)

聞き覚えのある声に顔を上げる。そこには幼い自分がいた。

(僕にないモノを君が埋めてくれて、君にないモノを僕が埋める。助け合って、一つになったよね?)

(ああ、そうだな)

(ここで終わるの?)

(まさか、此処から更に行くんだよっ!)

ズンツ!!

何か大きな物が落ちた音にレイが目を開けると、目の前に信じがたい光景があった。左腕から、左胸部まで無くなっていた初号機が右手で巨大なATフィールドを張って防いでいた。初号機の目が赤く稲光して輝く、各装甲部から蒸気が度々噴出していた。

「碓君っ!」

「シンジ君っ!」

レイとミサトの声が同時に上がり、皆がその光景に驚く。

「再起動っ!?!いつの間に……」

リツコが驚いているのを他所に後ろから篠山開発部長が彼女の肩に手を優しく叩く。

「どうだね?これが『神の子』の可能性だ、素晴らしいだろう?」

美しい絶景を見る様な顔でモニターに映る損傷した初号機を見る篠山開発部長。

「さあ、今がチャンスだ」

「ツ!レイ、今よっ!」

篠山開発部長の台詞に我に返り、零号機に指示を飛ばす。

「チャージは!」

ミサトが充電完了を待ちわびる。

「あと20秒!」

マコトがすぐさま報告を入れる。

(急いでっ!……)

焦るレイのコクピットに音声が飛んでくる。自分を連れてつてくれる彼の声が。

「大丈夫だよ。レイ」

「っ!!」

『俺』は死なないって言った。後は進むだけだ。頼んだよレイ」

初号機が更に前に出る。使徒の強力な荷電粒子砲にも拘わらず、初号機のATフィールドは衰える事がない。中破したにも関わらずその力強さは衰えなかった。前に出した右手が焼けるのを見るが動じない初号機の姿に誰もが驚く。そして光明を見た。

充電が完了し、第2射が可能な状態になると、レイが覗いていた照準が使徒へと定まる。レイは間髪居れずにトリガーを引く。発射された陽電子砲は、使徒の荷電粒子砲を押し返し、使徒のコアを一直線に貫く。使徒は攻撃を止め、後方から火を噴きながら正八面体へ戻る。そして次の瞬間、突然無数の棘状の形体に変化すると、悲鳴を上げながらコアを破裂させた。

『やったっ!!!』

ミサトは思わずガッツポーズを作る。リツコは思わず手を握り勝利を喜ぶ。篠山開発部長は拍手を上げる。付き人も一緒に拍手を送る。マコトとシゲルが互いに肩を叩き合い、マヤは思わず声を上げた自分を落ち着かせ深呼吸。ジオフロントの天井を突き破って降下していた使徒の先端は、血の雨に変わってNERV本部へ降り注いだ。使徒の攻撃を絶えたレイは初号機の元へシンジの名を呼んだ。

「碓君っー」

膝を着いた初号機を支えると少し熱を感じるがお構え無しに初号機のエントリープラグを取り出そうとするが、初号機のハッチが勝手に開き。プラグが露出する。レイはそのままエントリープラグを取り出し、零号機の手でシンジの乗ったプラグを地上に運ぶ。レイは零号機から降りるとシンジのエントリープラグへ駆け寄ろうとすると、膝を着いていた初号機が動き出した。そのまま立ち上がりその巨体の向きを変えてシンジのエントリープラグの近くに片膝立ちで右手をプラグの上に翳す。ATフィールドの光が初号機の右掌に集まり細長い光線がプラグのハッチを器用に切り取る所業を見せた。レイは勝手に動いた初号機に驚いたが、それよりシンジの元へ駆け寄る。プラグの上に翳した手を離れた初号機は事切れた様に停止した。レイはシンジのコクピットに入り、ぐったりしているシンジの傍へ駆け寄る。

「碇君っ！目を開けて、碇君っ、碇君っ！一人につ……」

レイの必死な呼びかけにシンジは直ぐに反応し、左手を動かしレイの頬に触れる。レイはその手を大事に掴み彼を見る。シンジは眠りから目覚める様に顔を上げる。レイはシンジが無事なのを確認して安堵に涙を流す。乱れていた呼吸を沈める。

「よかった……碇君、無事で、良かった」

「ああ、気を失ってたみたいだね。心配かけてごめん」

そう言っつてシンジは上体を起こし、レイに笑いかける。

「ううんっ、……碇君は生きてくれた」

レイは首を小さく振り、シンジの左手を大事に握る。

「……レイ。笑ってるじゃん」

「私、今、笑ってるの？」

「うん。可愛い笑顔だよ」

シンジのその言葉を聞いて、レイは自分の中に沸き起こる不思議な感覚に驚かされる。

「……」

レイは、シンジに向かって優しい微笑みを向ける事が出来た。これが笑うと言う事だとレイは学んだ。

「そうだ、レイ。ご飯、何食べたい。ミサトと約束したんだ」

「私も、良いの？」

「あたりまえだよ、何が良い？」

「……碇君の豆腐ハンバーグ」

レイの返答にシンジは微笑み「わかった」と答え、一緒にプラグから降りた。向こうからミサト達が来るのを確認すると、ミサトはシンジが無事なのを深く安堵し抱きしめた。すすり泣くミサトを宥めつつ皆に迎えられ勝利を分かち合っつて生きていることに誰もが安堵した。

その頃、とある宇宙空間の位置から地球を見ている使徒がいた。その使徒は背中に大きな羽を生やし、二本の剣を持った人型の使徒で

あった。その人型の形はEVAに近い形状でそこから、地球を眺めていた。

第10話・アスカ、来日。

コックピットに乗り込んだ少女は、オペレーターの通信が飛び交う最中で、肩で息をしながら待機していた。少女の顔にはバイザーが装着され、その殆どが覆われていた。バイザーには「EVANGELION-05」の文字が刻まれていた。

『Start entry sequence. (エントリースタート)』

『Initializing L.C.L. analyzing L.C.L. (LCL電荷を開始)』

『Plug depth stable at default setting. (プラグ深度固定、初期設定を維持)』

『Terminate systems all go. (自律システム問題なし)』

『Input voltage has cleared the threshold. (始動電圧、臨界点をクリア)』

『Launch prerequisites tipped. (全て正常位置)』

『Synchronization rate requirements are go. (シンクロ率、規定値をクリア)』

『Pilot, please specify linguistic actions. (操縦者、思考言語固定を願います)』

「えーっと、初めてなんで、日本語で」

オペレーターに呼ばれたことに気づいた少女は、呼吸を一旦沈めてからそれに答えた。

『Roger. (了解)』

「うっ……うっ」

少女はコックピットの上で、慣れないプラグスーツに体を馴染ませるように体を伸ばす。そこに日本語で通信が入る。

「新型の支給、間に合わなかったな」

声の主は加持だった。加持は砕けた口調で少女に話しかけた。

「胸がキツくて嫌だ」

少女は少し気だるそうにぼやく。

「おまけに急造品の機体で、いきなり実戦とは、真にすまない」

「やつと乗せてくれたから、いい」

少女はコックピットの座席にすっぽりと体をフィットさせる。

「お前は問題児だからな。まあ、頼むよ」

加持の言葉をよそに、少女は機内の計器をいじり始めた。

「動いてる。動いてる。いいなあ。ワックワクするなあ」

少女は一通り感触を確かめると、前を向いてぐっと気合を入れる。

「さて、エヴァンゲリオン仮設5号機起動！」

その掛け声と共に、バイザーの「EVANGELION—05」の文字が発光し、エヴァの目に光が灯る。地下通路内で巨大な移動体を追撃する戦車隊。その物体は、四本の脚の上に硬い殻の胴体に乗っており、そのヤドカリのような胴体から首長竜の骨のようなものが伸びている奇妙な形をしていた。それが、目を光らせ首をぐねぐねと揺らしながら高速で通路を進行しているのだ。オペレーションルームでは、司令官が敵の侵攻を止められずに焦りを見せていた。

「Defend the Limbo Area at all costs! We cannot allow it to escape from Acheron! (辺獄エリアは死守しろ! 奴をアケロンに出すわけにはいかん!)」

「How can a containment system assure Cocito be neutralized... (まさか封印システムが無効化されるとは...)」

「It was within the realm of possibility. (あり得る話ですよ)」

激を飛ばす三人の司令官たちの前に加持が現れる。

「On its own, humanity isn't capable of holding the angles in c

heck. (人類の力だけで使徒を止める事は出来ない)

加持は呆然と見ている司令官に対して流暢な英語をまくし立てる。

「The analysis following the perimeter excavation of the 3rd Angel was so extensive all that was left were some bones and that was the conclusion. (それが永久凍土から発掘された第3の使徒を細かく切り刻んで、改めて得た結論です)」

加持はそう言つてジェット機用のヘルメットを被ると、さつと手を上げてその場を去る。

「That said. Gotta run! (てな訳で、後はヨロシク!)」

「♪しつあわせはー あるいてこない だーからあるいてゆくんだねー」

エヴァに乗つて使徒を追撃する少女は、上機嫌で歌いながら地下通路を進んでいた。

「♪いっちにちいっぽ みつかでさんぽ さーんぽすすんで につほさがる じーんせいは わんっー ばんち」

仮設5号機は車輪の付いた四本の脚を使って、地下通路を高速で移動する。

「うおっ来たあ！フィールド展開！」

目標を確認した少女は攻撃態勢に入る。

『Target inbound! EVA Unit-05 is about to engage the hostile. (目標接近。エヴァ5号機会敵します)』

仮設5号機は、トンネルのような通路内で使徒と正面から接近する。少女はスピードを緩めることなく、右手に装備された大型の槍を一気に突き出した。

「うおーりゃあっ！」

使徒は、仮設5号機の一撃をA. T. フィールドで弾いてするりと

躲すと、そのまま仮設5号機が来た道へと走り去って行った。

「あっちゃー！動きが重いっ」

少女は振り向いて急ブレーキを掛けた。

「……てっ。こりゃあ、力押ししかないじゃん」

車輪を逆回転させて火花を散らしながら機体をストップさせた少女は、勢いを付けて使徒の後を追う。使徒は目から光線を照射して壁を破壊すると、空間が開けた場所へ辿りついた。そして、頭上に光の輪を作り、施設の天井と結合させると、引っ張られるようにして上階へと上がって行った。

Upper outer wall integrity compromised. (上部外壁破損)」

「The final seal is about to be breached. (最終境界が破られます)」

オペレーションルームの女性オペレーターが使徒の状況を伝える。使徒は天井の外壁を押し出して、それをいとも簡単に切断すると、上空へと上っていく。

「Target has broken through Limbo area. (目標は辺獄エリアを突破)」

「Now moving into Acheron! (アケロンへ出ます!)」

オペレーターが報告する状況に苛立ち、司令官の一人が声を上げる。

「Get Unit 5 to do something! (5号機は何やつとる!)」

ようやく使徒の上っていった縦穴の出口に辿りついた仮設5号機は、勢いを付けてジャンプした。

「逃げんなーっ！おりゃあーっ!」

勢い良く外に飛び出した仮設5号機は、槍を突き出して使徒を柱に串刺しにする。使徒は首の骨を突かれてぐったりとする。しかし次の瞬間、ぐねぐねと動き回った後に仮設5号機に向かって光線を発射する。

の様なモノが刺さっていた。意識が朦朧とし、身体から力が抜けていく。

「こっつ、……れは、……いったい？」

そこで加持の意識は途切れた。彼に変わって光学迷彩の様なローブを被った人が姿を現し、操縦を変わる。そのまま飛行機は飛んで行った。

緊急脱出した少女は、エントリープラグごと海に不時着した。

「……いってて……。エヴァとのシンクロって聞いてたよりきついじゃん……」

少女は、プラグのハッチから出ると、ヘルメットを脱いで長い髪を風に当てる。

「まあ、生きてりやいいや。自分の目的に大人を巻き込むのは気後れするなあ」

そして、プラグの上に立って戦闘跡地に高く上った光の十字架を眺める。

「さよなら……エヴァ5号機。お役目ご苦労さん」

ガチャ。ガチャ。ガチャ。

少女が音に振り向くと、周りは重武装した兵士達に銃口を向けられ包囲されていた。

「……あり？」

とある日本の墓標地帯。

「親父。来たんだね？」

「ああ、そうだな」

ゲンドウとシンジはユイの、母の墓がある場所へ訪れていた。地平線の向こうまで続く砂漠地帯。そこには無数の石碑がサボテンのトゲのように立っていた。シンジは、母の墓前に花束を手向け、ひざまずいていた。

「シンジ……強くなったな」

「ああ、……親父に捨てられる様に親戚に預けられた後、強く生きようと思った。その後、僕の事を引き取ってくれる別の親戚が来てその人達の世話になった。親父が与えてくれなかったモノは全部、式瓶叔父さんがくれて、親父って言う立場の男がどんなモノか判ったよ。もちろん、母さんの事は忘れてないから此処に来た」

「……そうか」

シンジは立ち上がり、ゲンドウを見る。

「人は思い出を忘れることで生きていける。だが、決して失ってはならないものもある。ユイはそのかけがえのないものを教えてくれた。私はその確認をするためにここに来ている」

ゲンドウはユイの石碑から一步引いたところに立って淡々と語る。

「そうだね、大事だね。母さんの事。でも、母さんはもういない。過去は変えられない。後戻りはできない。残った親父も、僕も前へ進むしかないんだ。僕は母さんが残してくれたこの命を抱いて前に進む、過去が過ぎ去るものなら、僕は明日が欲しい」

「……シンジ」

シンジの耳に何かが飛んでくる機械音が聞こえてきた。目を向けるとNERVの垂直離着陸型の輸送機こちらへ飛んでくるのを確認する。そしてシンジはゲンドウに背を向けて歩き出す。

「シンジ。お前は何処へ行く？その心で、どんな世界へ行くつもりだ？」

シンジの背中にゲンドウの声が飛んでくる。シンジは立ち止まり少し考えた後、話す。

「みんなと一緒にバカ騒ぎしたり、一緒にご飯食べたり、そんな事が当たり前な所。そんな場所に行きたい。ミサトやレイと、みんなで。それだけだよ」

「……そうか」

「じゃあ、行くよ。またね、親父。司令官の仕事、頑張つてね」

一通り話した後シンジは歩き出す。その背中をゲンドウはただ見ている。いつの間にかこんなに変わった『息子』の存在を、強くなつた。逞しくなつたそれだけに尽きる。

「……ユイ。これがお前の永遠に残したかったモノなのか？」

ゲンドウも輸送機の方へ歩みを進めた。それ以上何も言う事なく乗り込み、輸送機は飛んで行った。

シンジは輸送機が飛んでいく音が遠くなっていくのを聞き流しながらも歩みを進め車に寄りかかって待っていたミサトの所へ行く。

「どう？シンジ君。会っちゃえばどうってことなかったでしょ？」

ミサトは、車の中で黙って外を見つめているシンジに向かって話しかけた。

「んー。そうだね、まだ少しあったけどいいや。次の機会に」

「……そう」

シンジは、片肘をつけて助手席の外に流れる景色を見続けてながらミサトに父親との会話の感想を話す。ミサトは何処かスツキリしているシンジの声色を聞いて、良かったと心の中で安堵した。車は箱根の山間部をゆっくりと通り抜けていく。

「きつとお父さんも、シンジ君を認めてくれてるのよ」

「ごめん。ミサト、そんな事なかった。親父は僕の事……なんか、鬱陶しいヤツとか、何でお前なんだとか、よくわからない不快な感情で見えていた感じだったよ」

「シンジ君……そんな事」

「でもありがとう、ミサト。連れて来てくれて、話が少し出来ただけで十分だ。でも親父は本当に僕の事、息子として認めてるとか、そんな事なかったって事が判ったよ。でも、だからと言って僕は逃げる事も、歩みも止めない。だから大丈夫だよ」

そう言ってシンジはミサトに『仕方ないよね』を含んだ笑みを浮かべる。ミサトは何か言おうとしたが、言葉が思い浮かばなかった。すると、ミサトが付けているハンズフリーの通信に呼び出しが掛かる。

「はい葛城」

ミサトが声を正して応答した瞬間、突然空から戦艦の砲台が飛来してくる。そして、ミサトの進行方向の目の前に落下した。

「うわあああっ！」

「おっ!?!...と」

ミサトは、突然の出来事に声を上げながらも、何とかハンドルを切って衝突を回避する。シンジは咄嗟にサイドバーに掴まり、一瞬の浮遊感に声を出す。

「なんですって!?!」

ミサトはスリップ音を響かせながら車体を立て直す。

その頃、海上では戦艦が巨大な移動物体と交戦していた。それは紛れもない使徒だった。使徒は長い2本の脚で水面を移動し、仮面のような頭部を反時計回りに回転させていた。そして、使徒が頭部から光線を放つと、そのエネルギーによって海水が間欠泉のように吹き上がり、次々と戦艦を持ち上げて破壊していった。

「相模湾沖にて、第7使徒を捕捉。第2方面軍が交戦中。3分前に非常事態宣言が発令されました」

ミサトが受け取ったのは、第1発令所のシゲルからの報告だった。

「こちらでも肉眼で確認したわ。現在初号機パイロットを移送中。零号機優先のT A S K—03を、直ちに発動させて」

「いえ、すでにT A S K—02を実行中です」

マコトの報告によって、事態はミサトの予想よりも早く進行していることが分かった。

「T A S K—02?まさか!」

ミサトが驚いて空を見上げたタイミングで、上空に飛来していた輸送機からエヴァが切り離される。

「やはり2号機!」

「赤色だ...」

ミサトは車の窓から身を乗り出して、空を舞う赤い機体を見上げた。輸送機から飛び立った2号機は、使徒に向かって急降下していく。途中、輸送機から落とされたクロスボウ型の武器を拾おうとするも、使徒の攻撃に阻まれて回収を失敗。攻撃を回避しつつ2度目のアプローチで回収を成功させる。武器を手にとった2号機はすぐさま使徒に向けて発射。その弾道は、見事に使徒のコアを捕らえた。

「やるね、コアに命中した」

シンジはその戦いぶりを見て素直な感想を言う。しかし、助手席のシンジの方に体を寄せて窓から顔を出したミサトは、まだ使徒が倒されていないことを見抜く。

「違う、デコイだわー!」

使徒は、一旦体を撒菱状のパーツに分離するが、直ぐに再結合すると、下にぶら下がっていた本物のコアを振り子のようにして上部へ持ち上げた。2号機は怯まずにクロスボウを連射する。しかし、今度はA・T・フィールドで完全に弾かれてしまう。効果の見込めない武器を捨てた2号機は、回転して勢いを付けた後に、飛び蹴りの姿勢で使徒へ突っ込んでいく。

「どをりゃああああーっ!」

2号機の脚から突き出したニードルが使徒の本体を捕らえる。そして球体の内部にめり込むと、貫通して反対側から飛び出した。2号機のニードルにはしっかりと使徒のコアが刺さり、勝負はここで決まった。使徒のコアが真っ赤な液体を撒き散らすと同時に、巨大な十字架の光を放って爆発する。2号機は体を回転させて華麗に地上へと着地する。しかし、運悪くそこに駐車していたミサトの車は横転し、2号機の足にぶつかって大破する。2号機は腰に手を当てて零号機の前に立つと、自信満々な態度を見せる。そして2号機のパイロットは「状況終了!」と告げる。

「ミサト……生きてる?」

「ええ、……なんとか、ね」

シートベルトでぶら下がっている二人は互いに状況を確認する。

戦闘が終わりエヴァの機体が陸路で回収される。

『第4地区の封鎖は全て完了』

「ふえー……。赤いんか2号機って」

目の前を通り過ぎていく2号機を見上げてトウジが声を上げた。その横にビデオカメラのファインダーを夢中で覗くケンスケと、ぼうつと立っているシンジの姿があった。その隣にレイも立って一緒に2号機を見上げていた。すると、突然高飛車な少女の声が響いた。「違うのはカラーリングだけじゃないわ。所詮零号機と初号機は、開

発過程のプロトタイプとテストタイプ。けど、この2号機は違う。これこそ実戦用につくられた世界初の本物のエヴァンゲリオンなのよ。正式タイプのね」

2号機の上に仁王立ちで現れた少女は、気の強い眼差しで少年たちを見下ろす。その少女は、明るい栗色のロングヘアと青い目をしていた。

「紹介するわ。ユーロ空軍のエース、式波・アスカ・ラングレー大尉。第2の少女。エヴァ2号機担当パイロットよ」

遅れて到着したミサトが一同に少女を紹介する。

「はっ、ほっ、よっ」

アスカは、第9番停車場に運び込まれる2号機の上をびよんぴよん飛んでミサトの所まで降りてくる。

「久しぶりね、ミサト」

「ええ、アスカも背が伸びたんじゃない？」

「そっ！他の所もちゃあ〜んと女らしくなってるわよ？」

それを示そうというのか胸を張る。レイはアスカの胸を見て自分のを見る。少し眉が動く。

シンジの直ぐ隣にいるレイを見つけて近づくるアスカ。

「アンタがエコヒイキで選ばれた零号機パイロットね？それで、どれが七光りで選ばれた初号機パイロット？そっちのメガネ？それともジャージ？」

「彼女は綾波レイ。それでその隣にいる彼が初号機パイロットの碓シンジ君よ」

そう言つて、ミサトがシンジの所に歩くと彼がそうだと教える。

「僕だけど？」

レイを少し下からさせたシンジが返事をする。そんなシンジの声に反応すると一歩踏み出し人差し指を突き出して言う。

「ふーん。あんたバカあ？肝心な時にいないなんて、何て無自覚」

アスカはおもむろに足払いを仕掛ける。その動きにシンジは反応し、軽く避ける。

「っ!？」

次にパンチを繰り出すがシンジは瞬時に手首を掴んで止めた。振り解こうとするが、アスカの手首はシンジの握力によって『固定』された様にビクともしなかった。実力のある少女の腕を出会って間もない少年の腕力に通用しなかった。

「っ！このおっ！」

「や、止めなさいっ、アスカっ！」

空いた手で正拳を繰り出そうとしたアスカを、ミサトが慌てて二人の間に入り止めに入る。シンジは手を離し、距離を取る。

「離しなさいよミサト！コイツ、ナマイキよっ！」

「やめなさいっ、大人げないっ！」

「……」

自分を気に入らない目で見て来るアスカをシンジは目線を逸らさない。ジッ、と見て何をしてくるか様子を見ている顔付きを見てアスカは少し冷静になり、これ以上の攻撃はやめた。ミサトはアスカが大人しくなったのを見てホッとして緊張を解く。

「とにかく、これ以上のイザコザは許さないわ、良いわね？」

「ふんっ！」

ミサトの注意におもしろくないと言わんばかりにそっぽを向くアスカをシンジは警戒を解いてレイの所に歩いた。その様子を陰から見ている少女がいる。少女が見ていたのはシンジの方に視線を向けていた。

「……へー、あれが、『オオカミ』くんかー。おもしろそうだね♪」

シンジ、レイ、トウジ、ケンスケの4人は駅の改札口へ向かってエスカレーターに乗っていた。

「何やあの女、センセー。大丈夫かいな？なんか、えろう態度デカイヤツやったわあ」

「ん、平気。(モグモグ)」

トウジがアスカの振る舞いに腹を立てながらも、シンジを気遣う。そんな彼はいつもの実を食べていた。

「それにしても、同い年にして既に大尉とは、凄い！凄すぎる！飛び級

で大卒ってことでしょ？」

怒るトウジとは裏腹に、ケンスケはアスカに憧れを抱いたことを隠さない。

「失礼」

二人の話を他所に今日の晩御飯をどうするかと歩いていたシンジは、唐突に声を掛けられる。

「ジオフロントのハブターミナル行きはこの改札でいいのかな？」

そこには、大きなケースを持った加持が立っていた。

「うん。4つ先の駅で乗り換えがあるけど、それで合ってる？」

「うーん……たった2年離れただけで、浦島太郎の気分か……」

加持は天井からぶら下がった路線地図を眺めてしみじみと言った。

「ありがとう！助かったよ。……ところで、葛城は一緒じゃないのかい？」

加持はシンジの方に振り向いて例を言うと、突然意味深な態度を取り始める。

「……ミサトを知ってるの？」

警戒を強めるシンジの反応に加持は何もせず話す。

「古い友人さ。君だけが彼女の寝相の悪さを知っているわけじゃないぞ。碇シンジ君」

何も言わず加持を見るシンジを他所に彼は改札口の奥へ消えて行ってしまう。

「……………」

「碇君？」

レイは改札口の方を見ているシンジの様子がきになり、彼の制服の袖に触れる。

「寝相って……」

ケンスケが妄想を膨らませて顔を赤くする。

「なんやアイツ」

トウジは怪訝な表情をする。

NERV司令室に到着した加持は、ゲンドウと冬月に接触してい

た。

「いやはや、大変な仕事でしたよ。懸案の第3使徒とエヴァ5号機は、予定どおり処理しました。原因はあくまで事故。ベタニアベースでのマルドゥック計画はこれで頓挫します。すべてあなたのシナリオ通りです。で、いつものゼーレの最新資料は、先ほど……」

「拜見させてもらった。マーク6建造の確証は役に立ったよ」

冬月は一面に張られた窓から見える景色を見ながら言った。

「結構です。これがお約束の代物です。予備として保管されていた口ストナンバー。神と魂を紡ぐ道標ですね」

加持は持参した大きなケースを開けて、ゲンドウに中身を開示する。

「ああ、人類補完の扉を開くネブカドネザルの鍵だ」

ゲンドウは、頭のない人型の神経組織とカプセルのようなものが入った中身を見て不敵な笑みを浮かべる。

「ではこれで。しばらくは好きにさせてもらいますよ」

加持はふらりと身を翻すと、司令室から出て行く。

「加持リョウジ首席監察官、信用に足る男かね？」

冬月は外を眺めたままゲンドウに問いかける。

リツコの仕事用の机には2匹の黒猫の置物が置かれている。気の利いたものはそれぐらいで、あとは吸殻で一杯の灰皿と、コーヒーの入ったマグカップくらいだった。

「ちよつと痩せたかな？リっちゃん」

加持は作業中のリツコを後ろから抱きしめると、耳元で優しく囁いた。

「残念、1570gプラスよ」

リツコは一瞬驚いてから、直ぐに誰だか察知して肩の力を抜く。

「肉眼で確認したいな」

加持はリツコの頬に手を当てて、自分の顔の方に向ける。

「いいけど……この部屋、記録されているわよ」

リツコは少し声を低くして答える。

「ノン・プロブレム。既にダミー映像が走ってる」

「相変わらず用意周到ね」

「負け戦が嫌いなだけさ」

いつまでも身を引かない加持に対して、リツコはガラス窓の方に視線を送って見せる。

「でも、負けよ。怖いお姉さんが見ているわ」

それを聞いた加持が窓の外を見ると、ミサトが廊下側からガラスに張り付いて鼻息を荒くしている姿が見えた。

「リヨウちゃん、お久しぶり」

リツコは体を離れた加持に、何でもなかったような声を掛ける。

「や、しばらく」

加持はいつものことのように、しれっとした態度でやり過ごす。

「何でアンタがココにいるのよお！ユーロ担当でしょっ！」

ドアが開くと、ミサトがツカツカと音を立てて部屋に入ってきた。

「特命でね……しばらく本部付き。また三人でつるめるな、学生の時みたいに」

加持はリラックスした雰囲気で、リツコの机の横に腰を下ろす。

「昔に帰る気なんてないわよ！私はリツコに用事があったただけなの！アスカの件、人事部に話し通しておいたから。じゃっ」

ミサトはピリピリした空気で、早口で用件を伝えると、さっさと部屋を出て行ってしまった。

「ミサト、あからさまな嫉妬ね。リヨウちゃん、勝算はあるわよ」

リツコは、ミサトの態度を見て加持に話を振る。

「さて、どうだろうなあ」

加持は両手を広げておどける。

「碓君、帰っちゃおうの？」

「うん、ミサトにご飯を作ってあげなきゃいけないからね。部屋も清潔にしないと」

レイがシンジの手を掴み玄関に向かうの引き留めているのをシンジは少し驚き、彼女の方に向き直りその頭を撫でる。

「大丈夫、明日も会える。僕はまた来るよ」(ナデナデ)

「……うん、また碓君に会いたい。一緒に話したい。また、ね。碓君……」

不安が消えたのか、掴んでいた手を離すレイ。使徒との戦いからしばらく、シンジとレイの交流の機会は、ほぼ毎日と言っても良い。会えなかった時もあったが、次の日には二人はいつも一緒だった。

「うん。またね、レイ。今日は『豆腐のから揚げ』だからご飯と味噌汁に合うよ」

そう言っつて、レイのキッチンの小鍋に出来立ての味噌汁があったり、ハイテクの炊飯器があったりと、先日の洞木ヒカリとの買い物で自炊の道具を一通り揃えたのだった。ハイテク炊飯器、それはお米を入れるだけで洗ったり、炊き込む事も可能になった。と言うほどのハイテク。それを手にする為にシンジは『戦場』へと飛び込んだ事があるがそれはまた別の話。

夕方。帰宅途中のシンジは道路を歩きながら、今日であった少女のことを思い出していた。

「式波・アスカ。2号機すごかったなー、そう言えばバルバトスの左手……大丈夫かなあ」

ミサトの家に着いたシンジは、いつも通りのつもりで玄関のドアを開けた。

「ただいまー……ミサト? いないのー、ん?」

シンジは自分の部屋が見知らぬダンボールで埋まっている光景を見て考える。

(これは……僕に対する何かの『挑戦状』? ミサト……)

「あら、帰って来たのね。七光り」

キッチンの方から姿を現したアスカは、瓶に入ったドリンクをゴクゴクと飲み干す。

「……式波? 来てたんだ。どうしているの?」

普通に聞いてくるシンジに向かって、アスカは聞こえるように大きなため息をはく。

「あんたバカあ？あんた、お払い箱って事よ。ま、どっちが優秀かを考えれば当然の結論ね」

アスカはシンジの立っている方に近づいて、部屋の入り口に肘をついて寄りかかる。

「ふーん」

「しかし、どーして日本の部屋ってこう狭いのかしら。荷物の半分も入り切らなかつたわ。おまけに、どうしてこう日本人で危機感足りないのかしら。よくこんな鍵のない部屋で暮らせるわね。信じられない」

アスカは部屋の扉を何度も動かしながら、自分の不満を遠まわしにシンジにぶつけるように言う。

「日本人の心情は察しと思いやりだからよ」

いつの間にか帰宅していたミサトが、二人の背後から声を掛ける。

「うわああああ」

「あ、ミサト。お帰り」

驚くアスカとノーリアクションのシンジ。アスカはそのまま壁の方へ身を引く。

「ただいま、シンジ君。ごめんね、突然で」

「うん。式波も此処に住むの？」

「はあ!？んなわけないでしょ、さっさと『ゴミ』と一緒に出て行きなさいよ」

シンジの台詞にアスカが近づいてジロリと睨み、嫌悪気味に言う。

「ええ、そうよ。シンジ君。悪いけど、ご飯の事お願いね」

ミサトはシンジの質問にあっさりと告げる。

「えええっ！」

アスカはシンジの肩越しに身を乗り出して、あからさまに嫌な顔をする。

「アスカとシンちゃんに足りないのは、適切なコミュニケーション。同じパイロット同士、同じ釜の飯を食って仲良くしないとね」

ミストは二人を前に立たせて、これからやろうとしていることを説明する。その話を聞いて、シンジはアスカに視線を向けて表情を見る。

「ふんっ」

アスカはシンジから顔を背ける。

「式波って、朝はお米とパン、どっちが好きなの？」

「は？何言ってるの、アンタ」

「朝食。式波って外国から来たから、朝はいつも何食べるの？」

シンジはアスカが怪訝な表情で見ているのを気にせず話す。アスカはシンジの曇りない眼に少したじろぐ。

「そ、そうね……パンよ。日本では和食の様だけど、アタシは絶対、パン」

「チーズは食べられる？」

「え、ええ。って、ここの食事アンタが作るの？」

「うん。ミストは家事の殆どが出来ない。掃除も洗濯、全部。僕がやっている」

「マジっ!?!……ミスト、あんた……」

シンジの話しを聞いて、信じられない目でミストを見る。肝心のミストは顔を背き冷や汗を流す。

「ところで、ミスト。式波の台詞で思い出したけど最近、部屋の掃除してる?……まさか」

シンジの声が低くなったのを感じてアスカとミストがビクツと身体が強張る。ミストはヤバイと直感した。

「……ミスト。部屋、見させてもらおうよ」

「あつ待って、シンジ君っ!違うの」

ミストの話しを聞かず、シンジはスタスタと進みミストの部屋とかテール周りを見る。そこにはゴミ、ゴミ、ゴミ。があつた。シンジは静かなため息をした。ミストとアスカはその様子を見てこの部屋の温度が冷えた気がした。そして、ミストの方へ顔を向ける。ミストは「ひっ」と思わず声を上げて、両手を上げた。

「ミスト。僕、言ったよね?常に掃除は心掛ける様にとか、一瓶丸飲み

とか、身体に悪い事だと。口を酸っぱくして言ったよね……」
「は……ハイ」

そして、シンジは荷物を降ろし、少し身体を動かす。その意味を理解したミサトは目を見開き、そして。

全速力で逃げた。

「ミサトっ!?!」

シンジはシャツを瞬時に脱ぎ捨て、タンクトップ姿で追跡を続行。その光景をアスカは呆然と見ていた。少しすると、ミサトの悲鳴が聞こえてきた。何が起きてるのかと思えばアスカも外に出てみると。

「やめてえっ!!シンジ君っ!!悪かった、私が悪かったっ!!だから、だからああああああああっ!!」

シンジがミサトを筋肉○スターを炸裂してマンションの4階から地面に着地して極めた姿だった。アスカは驚いた。とにかく驚いた。驚愕のあまり自分の目の前で何が起きてるか理解出来なかった。ただ、わかった事は碇シンジはガツチリした筋肉をしていたと言う事とシンジがミサトに伝説の技を繰り出した光景であった。周りの人達もその光景を見た。そして誰もがシンジの繰り出した技を見てこう叫んだ。

『筋○バスターあああああああああああああああああああああ
ああああああああっ!!』

喝采、大喝采がシンジの周りにいた通行人達から浴びせられていた。

「あら、葛城さん。また彼に極められた。何度目かしら?」

「これで4回目よ。やっぱアレね。片方がダメだと、もう片方がしっかりしてるのよ。バランス取れてんの世の中」

「ウチの旦那もアレぐらいなっ欲しいわ」

同じマンションの住民なのだろうか、この事が起きたのが今日だけじゃないらしい。ミサトが粗相をしたらこうなる事が起きていると事が日常的になっっている事がよくわかったと、アスカは思った。

「ええー……？」

さらにミサトに巩固を極めるシンジ。苦しむミサト。隣にセコンドの様な人もそこにいた。

「ギブ？ギブ？」

「あいたたたたたたっ！！勘弁してくださいっ！！」

時々、この様にシンジが伝説技から始まるこの異様な空間と空気の人々は飲まれ、この刹那を楽しんでいた。

そんなシンジとミサトの一幕である。

その日の夜。第3新東京市は静かだった。レイは自室で一人きり、電気も点けないまま月明かりに照らされてた。ベッドに横になり、手が届く所にある小さいタンスの上に置かれているカップ状のキャンドルは火が付いていて、ほんのりとした灯がレイの心を落ち着かせる。そしてシンジが貸してくれたウォークマン。

『♪もしも世界に一つだけー叶うなら♪』

耳に付けたイヤホンから流れて来る、音楽を適量な音質で聞いている。彼女は、"NERV ONLY"と書かれた薬の袋からカプセルを取り出して眺める。

(碓君……私、生きて良いのね？私は……私が本当に人でなくとも)

リツコの研究室。

「……………」

リツコはある資料を見ていた。その内容は初号機の左義手の設計資料であった。前の戦いで初号機の左手が無くなり、今では付け根までは再生出来たが、左手の再生が遅い。破壊された左側の部位を調べてみた結果、素体の細胞が壊死している事が判明。修復に困難の結果が出てしまった。そんなおり、左手を義手にしようと提案して来たのは篠山開発部長であった。彼は部下を引き連れ、NERVへと来て。司令と『よく話した』らしい。義手の案をそれぞれ、知恵を出し合い。アタッチメントを追加した頑丈で強い左義手が出来るよ。と篠山開

発部長は盛り上がった。初号機専用の左腕部210mm滑空砲。ガントレット。切札に仕込みパイルバンカーを込んだ義手へとなった。その案は見事を通り、初号機への結合工程へと進んでいる段階である。篠山のスタッフ達の協力もあって、思ったよりも早く完成の目処が立った。そして、今考えているのは前の戦いで篠山開発部長と別れ際、話した事である。

「赤城君。今日は素晴らしいモノを見せてもらった。やはり初号機のATフィールドは質が違う。流石はユイ君の子だ」

「っ!? 貴方、何を知っているの?」

篠山開発部長の発言に驚き、リツコは思わず問い詰める。すると、付き人がリツコを壁際まで誘導し、追い詰める。そして人差し指を立て、静かにとジェスチャーする。リツコは思わず黙ってしまう。そして、付き人はリツコの耳元で声を潜めて言う。

「ここにある、監視システムは全て無力化しています。しかし、長くは持ちません。だから我々は貴方に知ってる事を少し話します」
「っ!?」

「我々は知っている。『全て』知っています。碇ゲンドウの『目指すもの』を、我々は知っています。初号機の事も、『蟲』の事も知っています……」

リツコはその台詞に目を見開き、驚愕する。付き人はそのまま話す。

「本当は、使徒の事も、EVAの事も、知っているんだ。初号機の自己進化の真実を知りたくないかな? シンジ君の背中の蟲も知りたくないかな? 知っている。教えます。ここにコールすれば、我々とコンタクトが取れる」

付き人は素早く、リツコの白衣のポケットにメモシートを入れた。

「それから、これだけは教えます。ゲンドウの計画は『もう、崩壊』しています。あの男は近い内、破滅します」

「っ!? それ、どっ……」

リツコが言う前に静かにとジェスチャーする付き人の無言の圧力にたじろぐ。

「見たくありませんか？」

「……」

「その、光景を、見れますよ。貴方の母を蔑ろにした男が破滅するのも、積み上げて来た計画が台無しになるのも見れますよ？我々と一緒に……『天国』へ行きませんか？」

これが、リツコと篠山開発部長達との別れ際の会話だった。そして今、リツコは手元のメモ用紙をジッと眺める。

シンジがアスカに振る舞う今日の晩御飯。『オムライス』。ミサトに振る舞う晩御飯。『小豆と野菜のスープ』を調理し、二人へと料理を与えた。

「し、シンジ君。私だけ、野菜スープ？」

「ミサトはライスも付けてるから、大丈夫」

「で、でもシンジ君……」

「大丈夫。そして、これはミサトの為のビールじゃない飲み物。これを代わりに飲んでね？食後に」

「……ハイ。いただきます」

ミサトは自分とアスカに出されたポリユームの違いに『少しの勇氣』を出して言葉を発したが、シンジの圧力に簡単に屈した。そして『小豆と野菜のスープ』を食す。すると、僅かに鶏肉の旨みを感じた。（あら？よく見たら奥に鶏肉がある。ご飯が進む！ごめんねーシンジ君。次は絶対、掃除こまめにするからっ！）

そう思いながら食事のスプーンが進んだミサトであった。

（なによ、アイツああ見えて料理とか出来るなんて。まあ、口に合わないかったらトコトン文句言わせてもらおうわ）

そう思いながらアスカはスプーンを持ち、卵の表面に切り口を入れようとする、沈む様にあっさり切れた。

（なに？この柔らかさ、プロが作る様な感じみたい。それにこの焼いた卵の香り、色鮮やかと言い、文句の付けようがない……トマトケチャップの掛け方も、悪くないじゃない。ちゃんと美味しそうじゃない。でも、見た目だけ、味はどうかしら？）

シンジの方をチラ見して様子を見てみると、何か作っている。恐らく自分の分だろう。改めて切り分けて掬う。そして中から熱気と共に現れる。トマトケツチャブと米で作れたとは思えない程のオレンジ色と艶が出ていて思わず唾液が出そうになる。何かに吞まれそうだった気をしつかり持ち、改めてスプーンに掬ったオムライスを口に運ぶ。

(旨いっ！な、なによこれ!?これを、あんな七光りが作るわけっ!?絶対、なんか・・・なんか)

そう考えながらも、この感動にアスカはぐうの字も出ない程スプーンを進める。スプーンの上で揺れる焼いた卵、その淡く繊細な味を上にかけてられたケチャップが引き締める。黄色と赤色でこんなにも美味しく感じる事をアスカは今までなかった。

(炒められた野菜が香ばしくも甘味を帯びていて、噛み締めると塩気を含んだ肉汁を出す鶏肉。チキンライスがそれらを全て受け止めて旨みを吸って逃がさない！旨みと香りが豊富なマッシュルーム。何よこれ！ホントに美味しいっ！)

一緒に出してくれた小さめの野菜スープが更にオムライスと合い、食欲を引き立たせる。

(スープもいける！何よ・・・ホントに旨いわね)

「ごちそう様っ!!シンジ君、ホントに美味しかったわっ！いつもありがとうっ！」

「ミサトはいつもお酒を飲んでるから、今晚は野菜スープにした。鶏肉は慈悲だよ」

「スンマセンシタ。でもすっきりした味わいで身体中に染み渡るわー♪」

「それじゃあ、お皿下げるね」

「はい、はい。あ、アスカはどう？美味しかった？」

ミサトの食器を片付けに入るのを他所にミサトはアスカにシンジのオムライスの感想を聞く。アスカは皿を仏頂面で見、少し言い淀むが・・・。

「わ、悪くないわ・・・まあまあね！」

そんな事を言いながらも、アスカは見事にオムライスを綺麗に完食していた。一緒に出したスープも完食してくれたのを見てミサトは微笑む。

「そう、良いでしょ？シンジ君の料理。絶品なんだからっ！お陰で、毎日の御つまみが美味しいのよっ！」

「ふーん。そう」

横目でシンジがお皿を洗うの背中を見る。ふと彼のタンクトップの背広から出ている何かの手術跡を見た。

（よく見たらコイツ、すごい筋肉してるじゃない。だけど・・・何かしら、あの傷？妙な傷痕ね。それになんか・・・少し突起の様なモノがあるわね。何なのコイツ）

アスカの視線をシンジは特に気にする事無く、皿と食器を殆ど洗い終えた。

「ペンペンく。ぐ飯だよ」

シンジが皿に盛った手作りペットフードを用意し、この部屋にいる住民を呼ぶ。

「クエエエエーツ!!」

すると向こうから、一匹のペンギンが駆け寄って来て。シンジの足元に付き、『平伏』のポーズを取る。ペンペンは知っている。この部屋で一番『上』の存在をそして今日もペンペンは服従するのであった。

「な、何よこの生き物っ!？」

「温泉ペンギンって言う鳥だよ。名前はペンペン。ミサトのペットだけど最近僕に懐く」

「そうなの、何で?」

心当たりがありそうにミサトはシンジに出された『なんちやってビール』をグビグビと飲む。素早く飲み終わり、ミサトは「お風呂、先にいただくわっ!」と言って逃げた。それを見てアスカは察した。

（ミサト・・・あなた、どうしようもないわね）

そう思い、アスカはジト目で風呂場へ消えたミサトを見る。そしてシンジへと視線を移すとペンペンの食べ終えた皿を洗っていた。

「ペンペン、新しい仲間が出来たからよろしくね」

「クワツ」

シンジの台詞にペンペンは羽をバタつかせ了解と言う様に鳴く。そしてアスカへ視線を向けた後、駆け寄り挨拶のジエスチャーを取る。

「ふーん。よく睨けてるのね」

そう言つて、何となく頭を撫でてみたアスカ。意外と触り心地が良いと思ひながら触る。

「もともと、物分かり良い方ペンギンなんだ。良く出迎えてくれたりするし、器用に自宅警備をしたり、カラスを追っ払足りしてくれる」
「そこまでっ!?!」

アスカのツツコミを他所にペンペンはアスカの元を離れ寢床に帰還して行くのをシンジは見ながら答える。

「そう言えば、アンタのご飯はどうしたの?」

「僕のは後で良い。作っている間から、二人が食べ終わるまで余裕がある」

「・・・そう。アンタ、いつもミサトとあのペンペンって言うペットにご飯作ってんの?」

「そうだけど」

そう言つてシンジはマイカップに入れたインスタントコーヒーを飲む。一口飲んだ後、アスカと向き合う位置の席に座る。

「さつきも、言ったけどミサトは家事も掃除も駄目だから僕がやってる」

「・・・ウソでしょ?アンタが、七光りが家事を全般やってるなんて・・・下着も洗ってるの?」

「下着?あー。最初の辺りはそこら辺にほったらかしにしてたから、叱つてやった事もあったなー」

シンジは過去を振り返る様に視線を上空に向けながら思い出す。そう言つて珈琲をもう一口飲む。

「アンタ、もしアタシのに手を出したら許さないからねっ!!」

机をバンツ!と叩き、シンジに強気な視線を向けて話す。

「どうして?」

「変な事されちゃあ、たまらないからよっ!」

「変な事って?」

「それはーアレ。アタシの下着を見てけがって言わせんじやないわよっ!!」

そうやって指を突き出しながら、シンジに怒鳴るアスカを見たシンジは普通に「しないよ」と言う。

「ふんっ!どうだか」

「それって・・・」

シンジは珈琲を一飲みした後、次の台詞を話す。

「自分の洗濯物は自分で洗ってくれると言う事だよね?」

シンジはジッとアスカを見る。矛盾をも感じない眼がアスカを見る。その視線にアスカは少し怯みそうな気持を隠し、平然と言う。

「あ、当たり前よ。あと、風呂覗こうとしたら許さないから覚えておきなさいっ!!」

「うん、覗かないよ。でも替えのタオルを届ける位は良いよね?タオルがないと身体も拭けないしさ」

「そ、そうね。あと、ちゃんとノックと声を搔ける事もしっかりしなさいよっ!!」

「うん。わかった」

そうやってシンジは自分で淹れた珈琲を飲んで一息付く。

(なによ、こいつ。何か調子が狂うわね・・・でもこの七光りが何であらうとアタシが来たからには、思い通りなんてさせないんだからっ!)

そうして、葛城庭の夜を更けていった。

「ミサト。酒瓶を抱かえながら寝るのはカツコ悪いって何時も言ってるでしょ」

「おねがいつ!その一瓶はお気に入りなのっ!!」

「何してんのよっ!うるさいわねっ!!ミサトアンタそんな寝方してるのっ!?!信じらんないっ!!」

「見ないでっ!!こんな私を見ないでええええええっ!!」

更けて行つた。シンジに日本酒を取り上げられ、それを取り戻そうと抗うしてドタバタしている音が気になって来たアスカにその醜態を晒しながら葛城庭は『賑やかに』更けて行つた。

第1話・生き血よ育て。天に召されよ。

第3東京市に新しい朝が来る。太陽が山のふもとから顔を出すと、集光システムが備え付けられたビルが稼働を開始する。街が動き始める。早朝、シンジの朝は早い。

「……っ！……っ！」

マンションの屋上で筋トレから始まり、骨休めからの朝食の準備。住人が一人増えたので朝食のバリエーションを考える。朝ランチの本を軽く読む。

(ドイツかあ、一度どんな飯があるか見てみたいけど。まず式波のご飯をどうするか?)

アスカはパンが良いと言った。朝食。朝食。とシンジは思考する。「クエ」

「ペンペン。おはよう、何?」

鳴き声に気付くとペンペンがシンジにある本を見せる。本のタイトル『食パンから始まるほっこり飯』。

「なるほど、ありがとうペンペン」

そうやってシンジはペンペンの嘴の顎の下から頭部へと撫でる。いきなり頭から撫でようとすると小さい動物は驚くとかシンジは叔父に教わったのを思い出す。次にペンペンはシンジに腹を見せ、服従のポーズを取った。それを横目にシンジは朝食の準備を始めた。

「良い匂い。もしかして七光りもう起きてるの?」

ふと朝の食欲をそその香りに目を覚ますアスカ。ラフな格好で起きてキッチン方へ行ってみる。野菜を切り刻み。卵の殻を器用に片手で割り。中身の黄身をかき混ぜ。

フライパンで焼き、箸も使い器用にひっくり返す。トーストを焼き、ベーコンを焼き完成したのが……。

「こんなモンか……」

スープ。サラダ。トースト。そしてオムレツと焼いたベーコン。完成したのがオシャレなカフェで見かける程の『モーニング・セット』である。

「七光り、これ全部アンタが？」

「うん。おはよう、式波。朝食の準備終わったから食べて良いよ」

「これ、全部？」

「うん。式波のご飯。要望通りパンを主軸にえらんだ品だから食べてみて」

色鮮やかに並べられた朝食にアスカは内心驚き。ボロが出ない様に虚勢を張る。

「まあ、七光りにしてはよく出来てるじゃない。外見は良くても問題は味よ。アタシはうるさいわよ？」

「うん。わかった」

顔を洗い、軽く整えると席につく。改めて見るシンジの『モーニング・セット』

「式波」

「ん、何よ？」

「ご飯は食べる前に手を合わせて『いただきます』と言うのがこの国の食前の挨拶で大事な事だからちゃんと言うんだよ？」

「はいはい。わかったわよ。いただきます。これで良い？七光り」

「シンジでいいよ」

そう言つてシンジはアスカに優しく微笑んでミサトの分の料理を準備する。

「アンタ……」

「僕たち、これから一緒に使徒を倒していく仲間でしょ？だから、名前が良いよ」

振り向き様にアスカに明るい表情を向けて、マグカップをアスカの朝食の隣に置いた。

「何よ、コレ？牛乳……いやスムージ？」

「うん。口に合うと思うから飲んでみて、不味かったら飲まなくていいよ」

「……そう。じゃあ、冷めるうちに食べるわね？」

そう言つてアスカは食器を取り、食べ始める。

「うん。召し上がれ、そろそろミストを起こす時間だ行つて来る」
「わかったわ」

そう言つてアスカはまず、オムレツから食べ始める。オムレツの真ん中にスプーンを突き立てると抵抗なくスプーンが入る。

(柔らかくて、ふわふわしてる。アイツもしかしてプロ?)

スプーンで掬つて眺めていると、柔らかくふわふわしたオムレツがそこにある。

(こうして見るととろけてなくなりそうね。食べちゃおっ!)

そして口の中に入れて噛み締める。すると、どうだろうか口の中で柔らかく。優しい香りに胸の中がいつぱいになる。

(野菜なんて、綺麗な水浴びしたみたいに爽やかさ!)

色鮮やかに水洗いしたサラダ。

(ん! しつかりと油が乗つてるベーコン! 香ばしさと塩辛さが最高じゃない!)

オムレツと一緒に皿に乗せられたベーコンの肉の旨味がアスカにこの上ない喜びを与えた。こんな味をアスカは今まで食べた事はない。そう、『食べた事がないのだ』。

「ふあ。おはよう、アスカ。シンちゃん、私の分出来てる?」

「すぐに出来るから、コレでも飲んで」

そう言つてシンジはマグカップをミストの席の机に置いた。

「あら、今日はスムージなの? どんな味かしら」

「バナナ一本と小松菜を1/2本。あとは牛乳で作った」

そう言つてシンジはミストのモーニング・セットを持って来て机に並べる。シンジもまた、自分の朝食を用意しており席に着く。そして二人そろつて「いただきます」と言つて食べ始める。

「? アンタ、変わったモノ食べるのね。何なのそれ?」

「おにぎりと味噌汁。こっちは鮭。こっちは梅。そしてこれは昆布だ。美味しい」

二人のモーニングセットに対し、シンジはおにぎりと味噌汁と言う変わった日本飯を食べるのを不思議そうに見る。特に味噌汁を見る。「ご飯と味噌汁。この国の定番よね。特にシンジ君の味噌汁は出汁

が良いのよね〜」

「ふーん。ちよつと味見させなさいよ」

そう言つてアスカはシンジの御椀を取る。そして一啜り。

「っ！意外と美味い……出汁は何よ？」

「愛情と絶妙な味噌加減」

「アンタ、本気で言ってるの？」

ジト目でツツコミを入れるアスカを他所にシンジはもぐもぐとおにぎりを食べる。

「あら、トマトつて聞いたわ。ホントに美味よね〜」

「ちよつと、何勝手に飲んでるのよっ!？」

何時の間にかミサトはアスカからシンジの味噌汁を鮮やかに取り味わう。そして、その味噌汁をシンジは普通に取り戻し食べる。

「トマトなんて、ホントに美味しいの？」

誰もが抱く疑問にシンジは食べているおにぎりを飲み込んだ後、アスカを見て答える。

「叔母さんが教えてくれた事だけど、『トマト』は出汁に使えるランキングに入っているんだって」

「へーそうなんだ。意外」

シンジはやがて、ご飯を食べ終えた後「ごちそうさま」と言つて自分の食器を片付ける。その後、シンジはいつもの様に弁当の仕込みを始めた。ミサトは家事壊滅。アスカは言わずもがな。アスカの分、ミサトの分、自分のは適当に作った。そして……

「出来た……」

それぞれの弁当を色違いのナプキンで包む。数は4つ。アスカが制服に着替え、準備を終えた後、それを『偶然』に見てしまった。

「アンタ、弁当の数多くない？これはミサト、これはアタシ、んでこのおにぎりみたいなのはアンタで。一つ余るわよ？」

並べられた弁当を数えながら、不思議に思うアスカ。その問いにシンジは答える。

「レイの弁当はオレンジ。式波のは赤色。ミサトは藍色。僕のはコレ」

シンジは自分のとレイの弁当を鞆に入れながら答える。

「……エコヒイキにも作ってるんだ？」

少し不機嫌な表情でシンジに問うアスカ。シンジは特に臆する事無く答える。

「レイはちゃんとした食事を取ってなかったから、僕が来るまではビタミン剤で済ませた。悪く言えば、家ではロクな飯を食べられなかった。人が食べる食事じゃない。見れたもんじゃない。だからお弁当もご飯も作る機会があれば作る。それだけだよ式波」

シンジの話したレイの食生活の内容にアスカは驚きの表情を浮かべた。

「ビタミン剤……？」

「僕と出会うまで、レイは最低限の住居と水、ビタミン剤だけで生きて来たらしい。今は少し改善してるって聞いた。僕はそんな食事法、嫌いだからレイが料理が一通り出来るまで作るつもりだよ。昔、女性には優しくしなさいって教えてもらったから、だから僕はレイの弁当もそれまで作る」

シンジはその時を思い出したのか少し苦い表情をする。レイの弁当を鞆に入れて当校の準備が完了した。

「なによ……それ、最初に選ばれた子でしょ？優遇されてるんじゃないの？そんな扱いを受けてあの綾波レイって子はEVAに乗ってるの？何でよ？」

「親父にみんなに必要なとされたかった。純粹にレイはただ親父に見てもらいたかった。でも親父はレイを自分の都合の良い道具としか見てなかった。親父は自分の為になら、誰でも利用する。そんなずるい大人なんだ。息子の僕としては、ホントに残念だよ。そんな大人の都合でレイもみんなを犠牲にさせたくない。だから、僕は抗う。この戦いが続く限り、バルバトスに乗って戦う。その先にみんながいる居場所を残したいから」

シンジは思い出す。初号機のケイジで見たゲンドウの目付きと顔をそして、自分に向けた心のない言葉をシンジは知っている。かつて生きていた前世での理不尽な大人達の行動と身寄りもない子供達の

苦痛と孤独と飢えをシンジは『知っている』。

「そろそろ、行こうか遅刻するよ、式波」

「っ!?そ…そう、ね」

瞬間、シンジの雰囲気がころりと変わる。目の色が柔らかいモノへ変って、アスカが今知ってる『少し何考えてるかわからない少年』の空気に変る。

「あと、それから…」

アスカも弁当を鞆に入れて当校の支度を終えるとシンジが玄関を少し開けようと手を掛けてる途中で彼女へ話す。

「僕の言うみんなの中にはこうして知り合った式波も入っていると思ってるから、これからよろしくね?」

「え?」

アスカの方を振り向き様に笑顔で答えて玄関を開けてシンジは先に行った。アスカはシンジが消えた玄関を見て呆ける。

「…なによ、アタシも仲間って事?何で…そんな事言えんのよ。アイツ」

(シンジ君…私、何やっているのだろう?いい大人が子供を戦わせてるなんて)

アスカは口元を抑え、顔が赤くなり。ミサトは少し座り込み、シンジの存在の大きさを改めて思い知った。これじゃあ、あの時自分のやった事は無意味なお節介だったのかと、己の無力を噛み締めた。

第3東京市の世界。河川敷を走るランナーの姿。モノレールが稼動を始める。出勤する人々。NERV本部に向かうマヤの姿。シンジは学校へと向かう。その途中でレイと合流しそのまま学校へ向かう。そしてトウジとケンスケ。洞木ヒカリと一緒に歩き始める。教室でレイに弁当を渡すと、彼女は嬉しく微笑む。アスカも丁度来たところであった。シンジの弁当を受け取った様子のレイを見て、不機嫌な顔をする。その後、顔を背き自分の席に着く。

(あの子が零号機パイロットの綾波レイ…何よあの子。七光りとあんなに仲良く話して…どんな関係かしら?弁当だつて作つて貰つて…何か親しげに話してるし…何でアタシ、こんなにイライラし

てんのよ！別に七光りなんて、なんとも思っていないんだからっ！」

横目で二人の様子を見た後、直ぐに自分の鞆の整理をする。そんな彼女の様子をレイは見て、考えていた。

（式号機パイロット・・・碓君を傷つけ様とした人・・・好きじゃない。でも碓君は気にしないでって言った。碓君は強い。じゃあ、私は・・・私は碓君と一緒に生きたい）

ネルフ本部。

シンジはバルバトス、もといEVA初号機に乗り。ある試運転を行っていた。大破した左腕部に義手を取り付け、更に改良を施して出来た。新たな左手である。追加武装を内蔵した左手の稼働テストをシンジは受けていた。その様子を表示されたモニターでコンソール越しの椅子に座ったマヤと立って見ているミサト。別の椅子に座って珈琲を飲むリツコは見ていた。

「これが新しい、初号機の腕ですか・・・聞いた話では機械で出来た義手みたいなモノだと」

「資料に寄れば、あの篠山が提供したEVA専用の武器を内蔵した腕らしわ。隠し武器搭載の腕なんて、何処まで通じるか見ものね。設計の構造も・・・」

そう言って、初号機の新たな左手の設計資料に目を通すリツコ。

「篠山グループ・・・最近、あそこからの技術提供が気持ち悪い位に協力的なのよ。何が狙いかしら？」

「他にも、此方の支部に協力的な姿勢を見せる企業が多いですね？ヤシマ作戦の時もそうでしたけど、今回は更に訓練システムの改良や、新しい武器。人員の派遣まで、ですよね・・・」

「そうね・・・」

ミサトはインカムを掴み、シンジに通信を飛ばす。

「シンジ君、どう？新しい腕は」

初号機は改良した己の左義手を動かす。指を親指から、順番に折り曲げる動作。続いて、武装の展開。前腕部の手首部分が動いて、内蔵

されていたパイルバンカーの武装を展開。次にパイルバンカーをしまい義手の前腕部は元の左手の形へと戻る。

『悪くない。良く反応してくれるし。思い通りに動くよ、ミサト』

「そう、良かったわ。そろそろ終わりにしましょう、シンジ君。そのまま休んでいて、後は此方でやっておくわ」

「うん。みんなお疲れ様」

そうやってシンジはシートに身を預け一息つく。その後、自分の左手を見る。掌を開いたり、閉じたりして自分の腕の動きを確かめる。シンジは特に違和感がない事を確認した。これにてシンジの今日のEVAの実験は終わりを告げた。

「やあ、君が碇シンジ君か？」

「ん？アンタ確かミサトの知り合い」

「加持リョウジだ。よろしくシンジ君」

着替えを終えたシンジが部屋から出て来ると、飄々とした色男を思わせる男性が話しかけて来た。

「何か様？」

「なに、君はすごい子だと聞いてな。興味を持った。良ければ一緒に話さないか？」

ネルフ・休憩所。

「ほい、シンジ君。これ、最近入った新商品だ」

加持から貰ったのは自販機に新しく入った商品なのか、サンプルには新作のロゴがあるのを選んでシンジに渡す。『ネルフのイチゴ・オレ』と言う甘党が好きそうなデザインの缶飲料水である。

「甘いモノは好きかい？今の君ならそれが良いと思っただけど」

「うん。丁度いい。ありがとう、加持さん。どんな味か気になっていた」

加持は無難に珈琲を選び。シンジに特製イチゴ・オレを手渡した。シンジはプルタブを開けて、早速一口飲む。

「あ、美味しい。もつと甘いのを想像してたけど。イチゴとミルクの組み合わせが美味しいよコレ」

「それは良かった。奢った此方としては嬉しい限りだよ。君の口に合わせて本当に良かった……」

加持もプルタブを開けて、珈琲を飲む。互いに一息ついた後、加持の方から話す。

「君の資料を見させて貰ったよ。初出撃で逃げ遅れた民間人を救い、使徒を圧倒。おまけにATフィールドを武器に使ったり、まるで自分の手足の様に初号機を乗りこなせたなんて、本当に君は何者だい？」
「僕は、僕さ。EVAは頭で考えれば動かせる。慣れていけば簡単だったよ。ATフィールドのメイスはバルバトスが教えてくれた」

「EVAが君に？」

「うん。初めて乗った筈なのに、何処か懐かしい感じがした。僕とEVAは何処かで出会ってた。そんな気がして、そしてそれは確信へと変わった。アレはバルバトスだって」

「バルバトス……ソロモンの72柱の序列8の悪魔の名前……シンジ君、君はその悪魔の名を持ったEVAが初号機だと言いたいのかな？」

「まーね、加持さんはさあ、前世って信じる？」

そう言っつて、シンジはイチゴ・オレを一口飲んだ後その缶を座っているベンチに置く。

「僕が前世でバルバトスに乗って、戦って死んだ。そんな前世……信じる？聞きたい？」

シンジの目が加持を見る。加治リョウジの目をまっすぐに。加持は彼の放つ空気とその目に飲まれそうになりながらも、シンジのどこか真剣な表情に好奇心が動く。

「そうだな……良ければ、聞かせてくれないか？君の前世と言うヤツを」

「ん……わかった」

そして、シンジは話す。バルバトスと共に、かつての仲間と共に進んだ世界と自信の結末を。

「そうか……そんな事が君に」

「信じてくれるの？」

「君の目が虚言も嘘を言っているとは思えなくてね。だから……君は強く。迷いも、躊躇いもなく、まっすぐ進んでいくんだね。シンジ君。君はすごい奴だ……そう、これなら」

加持は少し独り言を話す。その様子を見たシンジが何か彼に影の様なモノを察した。

「加持さん？」

そして、加持はいきなり立ち上がると、シンジの目の前に来て、シンジの目線に合わせて、彼の両肩に手を乗せる。真剣な表情でシンジを見る。その目線をシンジの目へと合わせて。

「シンジ君。君に頼みがあるんだ。葛城を……ミサトを頼む」

第12話・語る男。現れる者。

「シンジ君。俺と葛城は君の想像通り、昔つき合っていたんだ。でも……長続きはしなかった」

「どうして？」

「俺じゃあ、葛城を幸せに出来ない……葛城も思うところがあって自然とな」

シンジは今、加持の車に乗せてもらい。自宅へと帰路を走る。その中で二人は主に加持はシンジに自分の過去を話す。

「俺はセカンドインパクトによって生まれた浮浪孤児達のグループの一員だった。地獄だった。両親は死に、俺と4つしたの弟が残った。親を亡くした子供が溢れ、小さな施設はすぐパンクした。食料も衣類も不足して、寝る場所だって奪い合いだ。やがて我慢ができなくなり俺たちは養護施設から脱走した。その後は何でもした。盗みもひったくりも、生きる為に必死だった。ちようど食糧が足らなくなった時が来て。駐留軍の倉庫に食糧を盗みに入った際に捕えられ拷問を受けた。そして俺は自分が助かりたいが為に仲間も……弟も、全部話した。その後、俺はスキを見て脱出したが結果は……もう、わかってるだろう？」

「加持さん……」

「葛城は好きか？シンジ君」

運転しながら加持はシンジに尋ねる。助手席に座っているシンジは少し考えた後、ミサトの事を口にする。

「だらしない所はあるけど、それでも嫌いじゃない。それに、ミサトと一緒にバカ騒ぎしたりするのも楽しいから、だから……ミサトとはこれからも一緒に良い。僕に何処まで出来るかわからない。だけど、絶対に守る」

「そうか……ありがとう。シンジ君」

そうこう話してる内に、加持の車は葛城のマンションの近くに着いた。

その頃、ゲンドウと冬月は、月面に展開するゼーレ関連施設の上空を飛んでいた。

「月面のタブハベースを目前にしながら、上陸許可を出さんとは……ゼーレもえげつないことをする」

「マーク6の建造方式は他とは違う。その確認で充分だ」

ゲンドウは流れに逆らわずに落ち着いた態度で話す。

「しかし、5号機以降の計画などなかったはずぞ？」

ゲンドウと冬月は、宇宙船の小さな窓から月面の様子を覗き見ながら話す。そこでは、「Mark. 06」と呼ばれるエヴァに拘束具を取り付ける作業が行われていた。

「おそらく、開示されていない死海文書の外典がある。ゼーレは、それに基づいたシナリオを進めるつもりだ」

「だが、ゼーレとて気づいているのだろう。ネルフ究極の目的に」
二人の乗った宇宙船の前を、ロンギヌスの槍を運ぶ巨大な輸送船が通り過ぎて行く。

「そうだとしても、我々は我々の道を行くだけだ。例え、神の理と敵対することになろうとも」

その時、ゲンドウはエヴァの指の上に座っている少年の姿を確認する。少年は上半身裸の状態で、宇宙空間に存在していた。

「人か？まさかな……」

冬月もゲンドウが見ている方確かめる。

「初めまして、お父さん」

月面の棺から目覚めた少年・渚カヲルは、ゲンドウたちが乗る宇宙船を見てそつとつぶやく。

「社会科学見学？加持が？」

帰宅したシンジがビールを飲んでくつろいでいたミサトに話をする。
「うん。みんなの事も誘うといいつて。行こうよ」

シンジはダイニングテーブルの上に鞆を置いて荷物を整理する。

「アイツに関わると、ロクなことないわよ」

「でも、楽しそうだよ。今回の社会科見学。二人も行こうよ。いざという時、僕がなんとかする」

ミサトはビールの缶をテーブルに置いてシンジの話を聞く。アスカもゲーム機をプレイしながら聞く。

「僕は昔、魚が苦手だった。何故かって？目がこっちをずっと睨みつけてる感じがして好印象が持てなかった。だからその頃は目ん玉くり抜いて魚を食べてた」

「わー。変わった、食べ方ー（棒）」

ミサトがその光景を想像してしまった。

「もちろん、なんか怒られた。それ以降、食べ方を改めた」

「そりゃあ、ね」

シンジの話すオチにアスカもなんか思う所が声に出る。

「今は、どうなのよ？」

「普通に食べられる様になった。ただ……やっぱり少し苦手。でも料理は出来る」

「ふーん。アンタ、ホントに変ね。それで？どうしてアンタの魚が苦手な話が社会科見学と関係あるの？」

荷物 of 整理を終えて、改めて二人を見るシンジ。

「なんでも、日本の海洋？生物の研究所なんだ。色々な海の生物が見れるって加持さんが教えてくれた。海の生物がどんなのか気になるから、見てみるのも損はないよ。行こう？」

「うーん。ごめんなさいシンジ君。私、その日仕事入ってたの思い出しちゃった。ごめんねっ！」

「えっ!？」

ミサトが手を合わせて謝る仕草をシンジに見せる。

「だから、二人で行って来て？」

「……そうか」

シンジはミサトの発言に少し残念そうに答える。

「ごみんっ!!この埋め合わせ必ずするからっ！」

「じゃあ、私パス」

アスカはゲームをプレイしながら言う。

「だーめ。和をもって尊しとなす。アスカも行きなさい」

ミサトはアスカも参加するように促す。

「……それも命令？」

アスカはプレイ中のゲームを持ちながら、不満そうな顔を覗かせる。

「そんな事言わずに行こうよアスカ。僕、弁当も作るし海の生き物なんて滅多に見れないって加持さん言ってた」

「ふーん」

「だから楽しみ。行ってみようよ？弁当、美味しく作る」

シンジもまた、アスカの参加にしてほしい様に促し更に『弁当』を引き合いに出す。

「だから、行こう。海洋生物研究所」

(妙な圧感じるなくシンジ君)

日本海洋生態系保存研究機構。

「凄い！凄すぎる！失われた海洋生物の永久保存と、赤く染まった海を元に戻すという、まさに神のごとき大実験計画を担う禁断の聖地！その形相の一部だけでも見学できるとは！まさに持つべきものは友達ってカンジ！」

ケンスケは海に浮かぶ巨大な施設を目の当たりにして、まるで羽が生えたように飛び回っていた。

「ホンマ感謝すんでえ」

トウジはシンジの肩に腕を回して、満足げな顔をしている。

「お礼だったら加持さんに言ってよ」

アスカは不満そうな態度で腕を組んでいた。レイ以外は私服姿だが、レイは制服姿で参加していた。

そして何故かペンペンも同行していた。既に施設の中に入っていた加持が窓の向こうで手を振って合図を送る。管理区域のゲートの前に到着した一同に向かって、モニター越しの加持が事前に断りを入れる。

「もつとも、こっからがちよいと面倒だけどな」

「ん？」

——長波放射線照射式滅菌処理室

一同は下着姿にされ、レントゲンのようなフラッシュを浴びる。次に、熱蒸気による滅菌室に入れられて、熱い思いをさせられる。

——有機物電離分解型浄化浴槽式滅菌処理室 LEVEL—01

続いて一同は、巨大な水槽に張られた液体の中に放り込まれる。次に、低温による滅菌処理で寒い思いをさせられる。

——有機物電離分解型再浄化浴槽式滅菌処理室 LEVEL—0

2。

再度水槽の中。更に、巨大な送風機が壁を埋め尽くす部屋で強風に晒される。

——有機物電離分解型再々浄化浴槽式滅菌処理室 LEVEL—

03。

再々度水槽の中。……チン♪まるで電子レンジで料理が出来上がったかのような音が鳴る。

全滅菌処理工程完了

人間 — 5名

鳥 — 1羽

入室 可（第3段階滅菌区域まで）

入念な滅菌処理で、シンジたち一同は施設に入館する前から体力を奪われたぐったりとする。しかし、そんな気持ちを一気に吹き飛ばしてくれる美しい光景が目の前に広がっていた。色とりどりの魚の群れ、イルカが踊り、クジラがゆつくりと泳ぐ巨大な水槽。

「うほー！でっかい水槽やなあー！」

トウジとペンペンははしゃいで走り回り、ケンスケは早速ビデオを回す。

「凄いいー！」

シンジは少し身体を解し、水の世界を見つめる。

「これがセカンド・インパクト前の生き物か……」

その水槽には、クラゲや海ガメ、サンゴまでもが生きていた。

「クワーツ！」

ペンギンの群れを発見してペンペンが大喜びする。ペンペンが身振りを加えて姿勢を正すと、ペンギンたちから拍手喝采を浴びる。

「ほえー！生きとるー！」

「凄い！凄過ぎるー！」

「おっ背中に何か背負ったやつもおるぞっ」

「カメって言うらしいよ」

トウジとケンスケはテンションを上げて施設を歩き回る。

「子供がはしゃいじやって、バツカみたい」

アスカは、一人でその輪から外れて配管の上に座り込んだ。その時、アスカは円柱の水槽を眺めていたレイの傍にシンジが歩み寄っていく光景を目撃する。アスカは持つてきたゲームを取り出すと、不満そうに「ふんっ」と言つて電源を点けた。

「レイも来れて良かった。・・・身体は大丈夫？」

シンジはレイに声を掛ける。

「うん。ノルマは終わったから、碓君と一緒にいられる」

「そうか・・・」

レイは天井まで伸びる円柱の水槽に手を当てて中を眺めていた。

「何か、狭そうだなあ。もっと広い所で泳げれば良いのに」

「無理。この子たちは、この中でしか生きられないもの。昔の私と同じ」

シンジも水槽を見つめて、レイに問いかける。

「今は？」

「今は・・・そう、碓君となら一緒に何処へでも行ける気がする。碓君の言っていた、居場所にも。碓君、私最近身体の具合が良いの」

「ほんと？」

シンジが水槽から視線を外し、レイを見る。

「うん。全部、碓君のお陰。ありがとう碓君」

レイもまた、シンジを見て感謝を口にする。

「いっただつきまーす！」

昼食のためにシートを広げて、一堂はシンジが用意した弁当を囲

む。

「んんっ！」

おもむろにおかずをほおぼったアスカは、思わず声を上げる。

「やっぱり・・・ウマいわね」

「おお、見事な焼き方と味付けだなあ」

加持もシンジの料理を誉める。

「あの9割人造肉が、調理次第でこうも美味しくなるとは、まさに驚愕だよ」

ケンスケもその味を絶賛する。

「シンジい、隠れた才能やなあ」

シンジは間に受けないようにして、水筒の味噌汁を紙コップに注ぐ。

「ミサトはレトルトばかりだから、僕が作るしかないんだ。ヤレヤレ」

「シンジ君、台所に立つ男はモテるぞお」と加持が箸を振って言う。

「だってさー！」

ケンスケはトウジの方に話を振る。

「ん・・・いいやつ！ワシは立たんぞお！男のすることやないっ！」

ベンチに腰掛けていたトウジは、おにぎりを急いでたいたらげると、腕を組んでそっぽを向いた。

「前時代的、バツカみたい」

アスカが軽蔑するような目でトウジに突っかかる。

「なんやとおっ！ポリシーは大事なもんなんやで」

「益々バカっぽい」

「んんなんやとおおっ！」

「いいから、食べよう。それからトウジ。後でシメるから」

「せ、センセっ!?!」

シンジは弁当箱を差し出し、その場を鎮めた。トウジはシンジの台詞を聞いて驚き、固まった。彼の未来を知ったのかケンスケはトウジに合唱。

「大丈夫だよトウジ。ただ僕は料理が出来る事は良い事だって教えていただけだよ。ホントに大丈夫、手加減するから」

「センセっ!!目が笑ってないでえっ!!わかったワシが悪かったっ!!セ
ヤからジャーマンは堪忍してえ!!」

シンジはトウジに笑みを見せるがその目は笑っていない。

トウジは直感した。この後、シンジが自分をどんな目に合わせる
か・・・曾てワンパンチで峠を見て来た様に。そして彼は謝った。と
にかく謝った。その様子をレイは小さな弁当箱の料理を食べながら
見ていた。今日も彼女はシンジの料理が美味しいと思うのだった。

「あら?アンタ、変わった弁当ね。肉入ってないじゃない」

ふと、アスカがレイの弁当を見ると自分達とは違うのを食べてる事
に気づく。シンジはトウジを諷めた後、アスカの方に意識を向ける。

「アスカ。レイはベジタリアンだから肉は食べられないんだ。だか
ら、海藻とか大豆とか野菜寄りにした」

「ふーん。アンタ人生の半分を損してるわよ?コイツの作った肉料理
も食べれないなんて、いずれ食べれる様になった方が良いわよ。生き
物はね生き物食べて生きてんのよ!全部食べつくしなさいよね」

立ち上がったアスカはレイを見下ろして持論を展開する。しかし
レイは何も言わずに少し困った表情を向けるだけだった。

「碓君、私・・・肉も食べた方が良いの?」

次にシンジへと申し訳なさそうに言う。

「大丈夫、無理しなくて。レイはまだ食べられないだけだから、それに
レイはちゃんと食べてくれてるよ。海藻も、大豆も、野菜も、同じ命
の一部だから。レイも僕達と同じ健康に生きてるよ」

「うん・・・私もちゃんと碓君の料理、全部食べられる様になる。お
肉、食べられなくてごめんなさい」

「気にしてないよ。僕も色々工夫するから」

謝るレイにシンジは彼女の傍に腰を降ろし頭を撫でる。それを見
たアスカは不機嫌な態度で腕を組む。

「バツカみたい」

シンジは水筒を取り出し二人分のカップに注ぐ。一つはレイにも
う一つは

「アスカ、とりあえず落ち着いて腰を降ろそう。まだあるから」

「何よソレ？」

「味噌汁。弁当のオカズにベストだって、温まる」

シンジは自分にカップを差し出す様子を見て、アスカは席に着きシンジのカップを受け取る。隣でレイがカップを受け取り味噌汁を口の中にゆつくり入れて一口飲む。

「・・・美味しい、碓君」

レイはカップを両手で包み込むように持って、豆腐とわかめが浮かんだスープを嬉しそうに眺めた。その様子を見てアスカも口の中に入れて一口飲む。

「！何よ・・・ホントに美味しいじゃない」

その頃、ゲンドウたちの乗った宇宙船は、地球を背景に無重力空間を飛行していた。

「これが母なる大地とは・・・痛ましくて見ておれんよ」

冬月は、南極点付近にぽっかりと穴を開けた地球を眺めていた。「だがしかし、この惨状を願った者たちもいる。人さえ立ち入ることのできぬ、原罪の汚れなき浄化された世界だからな」

ゲンドウは、冬月とは違って窓の外を見ずに天井を見つめていた。

「私は人で汚れた、混沌とした世界を望むよ」

冬月は地球をまじまじと見続けている。

「カオスは人の印象に過ぎない。世界は全て調和と秩序で成り立っている」

ゲンドウは瞬きもせず一点を見つめている。冬月は、ゲンドウの言葉で顔を機内に戻してつぶやく。

「人の心が、世界を乱すか」

シンジは、加持と一緒に海の水を浄化する施設の開閉ゲートの上に来て、潮風に吹かれていた。

「僕が生まれる前はこの海が青かったなんて想像出来なかったよ」

シンジは青くなった水が溜まっているプール側の手すりに捕まってダムを覗き込んでいた。

「こうして人が生きていける環境だけでも、よくも復元出来たものさ」
加持は後ろ向きになって手すりに肘をつけてタバコをふかしていた。

「この潮風・・・死の臭いがする。腐った感じ。好きじゃない」
シンジは犬のように鼻をクンクンさせて風に乗ってくるにおいを嗅ぐ。

「海の生物が腐った匂いだ・・・生きていた証なのさ。あの何も無い赤い水とは違う。本当の海の姿なんだよ。本来、この世界は広くて、いろんな生命に満ち満ちている。その事を君らに知っておいて欲しかったんだ」

加持はそう言って水のある方に視線を向ける。

「そうか・・・ミサトも来ればよかったのに何でかな？」

「葛城は来ないよ・・・思い出すからな」

「それって・・・」

シンジが何かを察したのかそれを見た後、遠い目をして空を見上げる。

「そう、セカンド・インパクト」

セカンドインパクト。それは、かつて15年前に起こった地球規模の大災害だった。地球面に巨大な穴が開き、そのとき4体の光の巨人が観測されている。光の巨人は、まるで天使のような羽と、頭上には光の輪を持っていた。そして4本の槍。幼い頃のミサトは、父親と共にその光景を目の当たりにしていた。父親は、ミサトを脱出用のシエルターに非難させると、十字架のペンダントを彼女に託す。その直後に父親は爆風に巻き込まれて帰らぬ人となってしまった。

「葛城が、なぜネルフに入ったか聞いたかい？葛城の父親は、研究・・・夢の中に生きる人だったそうさ。彼女はそんな父親を葛城は嫌っていた。憎んでさえいたという」

加持はシンジにミサトの過去を話して聞かせる。

「ミサトはお父さんが苦手なんだ・・・だからあの時」

シンジが前に車で送ってくれた時の表情を思い出す。

「だが、最後はその父親に助けられた。生き残るっていうのは、色んな意味を持つ。死んだ人の犠牲を受け止め、意思を受け継がなきゃいけない。それが一人だったら尚更だ」

加持は海の向こうを見つめながら、目には見えない大切なことをシンジに伝えようとする。

「受け継ぐ……か」

シンジが海を見ながら考える。ミサトの事、父親、これからの戦いの事も。自分に出来る事を。

「僕は大丈夫。ミサトの事、信じてるよ。だから、僕は『前に進む』だけ」

「シンジ君……」

シンジも手すりに肘をつき、空を見上げた。

「進んだその先に、必ずあると信じる。僕達の本当の『居場所』が、ね」
加持は煙草を掴んで取り、口から煙を吹かす。

NERV本部・第1発令所。

「3分前にマウナケア観測所の補足。現在、軌道要素を入力中」

マコトがモニターに映し出された情報を確認する。

「目標を第3監視衛星が光学で捕らえました。最大望遠で出します」

シゲルが使徒の姿を主モニターに回す。

「光を歪めるほどのA・T・フィールドとは、恐れ入るわね。で、落下予測地点は？……当然、ここよね」

ミサトは分かっているわよといった体で、苦笑いを浮かべる。

「MAGIの再計算。NERV本部への命中確率、99.9999%
(シックスナイン)です」

マヤが目標の軌道予測を参照する。その頃、遙か上空では既に使徒への攻撃が始まっていた。

「N2航空爆雷もまるで効いてません」

マコトが言う通り、使徒は全ての爆発をA・T・フィールドで完全に防いでいた。

「軌道修正は不可能か……」

モニターを見つめるミサト。

「A. T. フィールドを一極集中して押し出していますから。これに、落下のエネルギーも加算されます」

マヤがミサトの方を見る。

「まさに使徒そのものが爆弾というわけね」

「第8使徒直撃時の爆砕推定規模は、直径42万GY—1万5千レベル」

「第3新東京市は蒸発、ジオフロントどころかセントラルドグマも丸裸にされます」

マコトがミサトの後ろに立ち被害規模を推測する。

「碇司令は？」

「使徒の影響で大気上層の電波が不安定です。現在、連絡不能」

シゲルはノートパソコンのモニターを見て答える。

「ここで独自に判断するしかないわね……」

ミサトは意を決して姿勢を起こすと、周りにいたスタッフに通達する。

「日本国政府および各省に通達。ネルフ権限における特別非常事態宣言D—17を発令。半径120キロ内の全市民は速やかに退避を開始」

するとシゲルが苦笑いしながら、冗談のように言う。

「問題ありません。既に政府関係者から我先に避難を始めてますよ」

その言葉通り、第3新東京市上空には、イナゴのように大量発生した関係者の航空機が飛び立っていた。陸路は車の列で大渋滞が発生。海の上も艦隊が群れを成して離れていく。

『市内における民間人の避難は全て完了。部内警報Cによる非戦闘員およびD級勤務者の退避完了しました』

素早い対応によって、最悪の事態を想定した対策は完了した。

「MAGIのバックアップは松代に頼みました」とマヤが報告する。
「で、どうするつもり？」

リツコが冷静な口調でミサトに質問する。

「いくらエヴァといったって空が飛べるわけではないですし」

「空間の歪みが酷く、あらゆるポイントからの狙撃も不可能です」

「こんなべら棒な相手じゃ、手の打ちようがありませんよ」

残ったスタッフたちは、消極的な意見を並べる。

席を外して資料室の通路で立ち話をするミスアとリツコ。天井の高さまで立てられたラックが整然と並んでいる通路では、ロボットが世話しなく動き回っている。

「本気なの？」

リツコはミスアの作戦内容を聞いて驚く。

「ええ、そうよ」

「作戦と言えるの？このプランが。MAGIの検証でもしくじる可能性は99%強。たとえ成功しても、エヴァ3体を損失。技術部として、到底受け入れられません」

「可能性ゼロではないわ」

ミスアはリツコに背を向けたまま、自分の主張を通そうとする。

「奇跡を待つより地道な努力よ！リリースと初号機の保護を最優先とすべきです」

リツコはミスアを論理的に説得しようとする。

「待つ気はないわ。奇跡を起こすのよ、人の意思で」

しかし、ミスアは降りようとはしなかった。

「葛城一尉！」

リツコはミスアを睨みつけて声を上げる。

「現責任者は私です。私が判断するわ。それに、使徒殲滅が私の仕事です」

ミスアはあくまで自分の主張を通そうとする。それは、作戦以前に自分自身に課した目的を達成するための執念にも見えた。

「仕事？私怨でしょ？あなたの使徒への復讐は！」

その台詞にミスアの脳裏にシンジの顔が過ぎる。自分を迷いもなく見るシンジの表情を思い出す。罪悪感が胸の内を締め付ける。しかし

「そこまでにしなさい。赤城博士。どの道、あの使徒を倒さねば、この

都市が無くなり、住人達がセカンドインパクト様な地獄を味わう事になるかもしれないから彼女は『戦う』選択を選んだ。ただ、それだけだよ」

すると一人の軍服を着た男性が姿を見せる。口元に髭を生やした、オールバックの特徴が彼を紳士へと思わせる印象を見せる。何よりもその男の風陰気が何処か異質を感じさせるオーラを纏ってる感じだった。彼こそは

「初めまして、私。戦略自衛隊の中将……御神徳四郎と申す」

「貴方は、何故こちらにつ!？」

「なーに。逃げ場なんて何処にもないと思ってね。我々も手を貸しに来た所存……赤城博士、いま第三東京市を失えば国への打撃は大きい。君の言う地道な努力は確かに賢明な判断だ。しかし、今の世界は君が思うほど正解ではない。時間が足りない。我々には地道な努力を許される様な星と世界に立ってないのだ。住民がそれぞれ別の都市へ移ったとしてもパンクして暴動や略奪の様な更なる混乱を引き起こす事受けあいだ。ヒトは新しい環境にいきなり慣れると言われても直ぐには慣れんものだ。我々は葛城一佐の作戦に協力しよう」
そう言って御神徳四郎は敬礼をする。

第13話・襲来の異端使

作戦準備のため、格納されていたエヴァが列車型の貨物台に乗せられて運び出される。転車台が2号機を乗せて上昇したところで3体が揃った。

「ええーっ！手で受け止めるうっ？」

ミサトの作戦を聞いたアスカが大声を上げる。

「そうよ。飛来する使徒を、エヴァのA・T・フィールド全開で直接受け止めるの。目標は位置情報を攪乱しているから、保障観測による正確な弾道計算は期待できないわ。状況に応じて多角的に対処するため、本作戦はエヴァ3機の同時展開とします」

「ムダよっ！私一人で殲滅できるもん！」

ミサトの説明を蹴散らすようにしてアスカが身を乗り出す。

「ムリよ。エヴァ単機では広大な落下予測範囲全域をカバーできないわ」

ミサトはパイロットたちにモニターに映し出されたシミュレーションデータを見せる。

「この配置の根拠は？」

レイがそれを見て質問する。

「女の勘よ」とミサトはサラッと答える。

「何ったるアバウト」

アスカは腕を組んで呆れ顔になる。

「……（モグモグ）」

シンジはナツメヤシの実を食べながらミサトを見る。ミサトもシンジの視線に気づいたのか彼の方を見る。

「シンジ君。何か質問でも？」

シンジの挙動にレイとアスカが注目する。ナツメヤシの実を食べ終えた後、シンジは話す。

「勝ち筋はあるのミサト？」

シンジの質問にミサトはサラッと答える。

「神のみぞ知るってところね」

その博打の予想のような答えを聞いたアスカは、自分を主張するかのようにして声を強く言う。

「フンッ！だから他のエヴァは邪魔なの！人類を守るくらい、私一人で充分よっ」

「このオペに必要なのはシングルコンバットの成績じゃないの」

ミサトは、どうにかチームワークを作り出す方向に持っていこうとするが、アスカが聞こうとしない。

「私の才能を認めないわけね」

「違うわ。あなたたち三人の力が必要なのよ。奇跡を起こす為に」

「奇跡って、そんなのー」

アスカがまだ何か言おうとする前に

「やろうよ、式波」

シンジが強く発言すると場が静かになり空気が変わる。

「七光り・・・アンタ」

「やらなきゃみんながこの街が吹き飛ぶんだろう？トウジもケンスケも委員長もいた第三東京市が、僕達の居場所が無くなるなんて・・・絶対に後悔する。僕は戦う」

(碓君・・・)

「今回の作戦は僕達3人の力が必要なんでしょう？奇跡を起こすんでしょ？なら使わなきゃ、使わないと0だ。何も無い。結果は無くなるだけだ。だから僕の力使わせてあげる。ミサト」

「シンジ君・・・」

「僕はミサトを信じる。この場所、守りたいから。僕は戦う。全力を出すよ。ミサトの方も頼んだよ」

そう言って、シンジはミサトに近づき右手の拳を見せる。その動作を見てミサトは自然と自分の右手を握りシンジの拳へと付ける。

「任せて。軌道修正とバックアップはこちらも全力でやってやるわ。私達で奇跡を起こしましょう！」

作戦決行前。エヴァ3体は、使徒を捕らえるために、それぞれの待機場所に構えていた。

シンジはコックピットの上で精神統一をするようにして目をつむっていた。

(さて……今日は落ち着くな。バルバトス。準備は良いか?……わかっているただ聞きたかっただけ)

その時、発令所内に警報が鳴り響く。

『現在、目標の軌道を補足中。重力要素を入力』

オペレーターが通信が騒がしくなる。

「おいでなすったわね。エヴァ全機、スタート位置」

待ち構えていたミサトは、腕を組んで作戦の合図を送る。

ミサトの合図で、エヴァ3機はリレーの選手のようにスタートの姿勢を作る。

「2次的データが当てにならない以上、以降は現場各自の判断を優先します。エヴァとあなた達に全て賭けるわ」

ミサトは、エヴァパイロットたちに最後の思いを託す。

「目標接近! 距離およそ2万」

使徒が近づいてきたことを、シゲルが伝える。

「では、作戦開始……発進」

ミサトはいつにも増して緊張感のある声で慎重に号令を掛ける。それと共に、エヴァの外部電源装置が切られて、活動限界までのカウントダウンが開始される。

「いよいよ……か」

徳四郎もまたミサトのいる発令所でその様子を見ていた。

「さあ、奇跡を見せてくれえシンジ君……Plus Ultra!」
地を蹴って走り始めるエヴァたち。巨大な足が地面を踏みしめるたびに地響きが起こる。初号機は、市街地を抜け、山を高く飛び越えると、水田の見える景色へと急降下していく。

零号機と2号機は、ハードルを飛び越えるようにして高圧線を跨ぎながら前へ進んでいく。

上空から飛来した使徒は、身にまとっていた黒い空間を剥がして、真の姿を表に出す。

すると、形が変化したことによって影響が発生したことをシゲルが

報告する。

「目標のA・T・フィールド変質！軌道が変わります！」

「くっ！」

ミサトが奥歯を噛み締める。

「落下予測地点、修正02」

シゲルは報告を続ける。

「目標、さらに増殖」

マコトが使徒の変化を捕える。

「何よ！計算より早いじゃない！ダメ！私は間に合わない！」

アスカが上空から落下してくる使徒を見上げる。

「僕がやるっ！ミサトっ!!」

シンジは前を見据えて走り続ける。

「緊急コース形成！605から675」

ミサトはマコトの席に食らい付いて指示を出す。

「はい！」

マコトが指示を実行すると、初号機が走っていた市街地に、巨大な装甲板の足場が何枚も立ち上がり始める。装甲板によって形成されたバンクを利用して、初号機はスピードを緩めずにカーブを駆け抜ける。

「次っ！1072から1078スタンバイ！」

次の指示で、タワー型のボックスがせり上がり、階段状に足場を形成する。初号機はそれを利用して一気に駆け上がると、思いきりジャンプをして距離を伸ばす。初号機は加速を続ける。遂に、超高速で街を走り抜ける初号機の後ろにソニックブームが巻き起こり、駐車していた車を吹き飛ばしてしまう。

使徒は急降下を続けて地表に近づくと、球体だった体を広げて蝶のような形に変化する。10枚の羽を広げた使徒は真ん中に目のような部位を残して、羽の輪郭には無数の触手のようなものを立ち上げた。

「目標変形、距離1万2千」

シゲルは、素早く使徒の変化を報告する。

シンジは使徒の真下に辿りつき、足を前に出して急ブレーキを掛けると、迫り来る使徒を見上げる。

「行くぞお!!バルバトスッ!!」

初号機は天に向かって両手を広げると、全面に巨大なA・T・フィールドを広げた。

遂に地表近くへ接近した使徒は、初号機のA・T・フィールド目掛けて突っ込んでくる。

そして、A・T・フィールドの表面に到達した使徒は、コアがあると思われる中心から人の上半身のような部位を覗かせる。その人型の部位は、両手を伸ばすと、初号機の両手にながちりと手を合わせる。次の瞬間、使徒の手が槍状に変化して初号機の手を突き破った。

「っ!!ぐううう!!」

シンジは激痛を堪えて態勢を踏ん張る。義手の方の手は痛みは感じないが、右手の方の手は確かに痛みを感じた。

使徒は初号機の何倍もある体を、覆い被せるようにして迫る。

「七光りーっ!」

遅れて落下地点に到着したアスカが声を上げる。

「2号機、コアを」

レイがアスカの方を見る。

「分かってるわよっ!私に命令しないで!」

2号機は両肩に装備されたラックからプログレッシブ・ナイフを取り出すと、二刀流で使徒に飛び掛る。

「とおりやあああーっ!」

式号機は一刀目で使徒のA・T・フィールドを切り裂くと、二刀目でコアを突いた。

「外したっ!」

コアは、目のような部分から飛び出した人型の部位の周りを、衛星のようにして回転する構造になっていた。アスカは、その円の上をぐるぐると回転して逃げ回るコアを目で追いかける。

「ちよこまかと往生際が悪いわね!」

活動限界のカウントが残り少ない。

「あと30秒……」

焦りを感じるアスカ。使徒の羽に生えた触手部分は、2本の足と2本の腕が生えた人形のような形をしていた。その人形の腹の辺りに目のようなマークが浮かび上がる。数え切れない程の触手は、海底で揺れる海草のようにゆらゆらと揺れる。初号機が使徒に押しつぶされそうになる。もはや一刻の猶予も許されない状況だった。更に使徒から別の手が生えて来て、初号機に槍状の手を肩筋へと突き立てる。

だが

「いつてええなあ!!」

負けじと初号機のATフィールドが強度を増し更に巨大になる。掴んでいた使徒の腕を握りつぶし、更に押し上げた。すると使徒のコアの動きが鈍るのをレイとアスカは見逃さなかった。

「今だあ!!アスカ!!」

シンジの声に零号機が使徒のコアを掴み動きを封じる。そこへ更に2号機がプログ・ナイフを振りかざして、その刃を正面からコアに突き刺す。両手のナイフをハの時型に突き刺すと、体に反動をつけて更に追い討ちを掛ける。

「どおりやああああ!!」

2号機は、膝に仕込まれたナイフを突き出してコアに膝蹴りを追加した。次の瞬間、使徒のコアはガラスが砕けるような音を響かせて真つ二つに割れると、大量の血を撒き散らして跡形を無くす。

コアを潰された使徒は、力なくぐったりと羽を下ろす。羽に生えた触手は硬直し、本体は黒く変色する。そして、エヴァの何倍もある巨体から血を噴出して洪水を発生させた。

血の濁流は山を下って街を襲い、第3新東京市のビルや民家を飲み込んでいく。その後に残ったのは、真つ赤に染まった街と、使徒の立ち上げた光の十字架だけだった。

「ありがとう……みんな」

発令所で使徒の殲滅を確認したミサトは、なんとか作戦が成功したことで、安堵の表情を浮かべる。

「電波システム回復。碓司令から通信が入っています」

ミサトが気を抜いている暇もなく、シゲルが報告する。

「お繋ぎして」

音声のみの通信ではあったが、ミサトは姿勢を正してモニターの前に立つ。

「申し訳ありません。私の独断でエヴァ3体を破損。パイロットにも負傷を負わせてしまいました。責任は全て私にあります」

ミサトの説明にまず答えたのは冬月だった。

「構わん。目標殲滅に対しこの程度の被害はむしろ幸運と言える。おや？君は確か・・・」

モニターからこちらを見ている冬月が徳四郎に気づく。その反応を見て徳四郎が口を開く。

「お久しぶりです。私、戦略自衛隊、中将の御神徳四郎です」

「まさか、君が此処に残っていたとはいったい何故？」

「なーに。子供が必死で戦っているのに、おめおめ逃げつてのも嫌なのでネルフに『手伝い』と『協力』をしただけです。それより今回の作戦、初号機パイロットが良い働きをしましたよ。録画もバッチリですので見ては如何かと」

徳四郎の話した後にはゲンドウが口を開く。

「ああ、よくやってくれた葛城一佐。初号機のパイロットに繋いでくれ」

「……え？」

ミサトは意外な展開に返事を忘れる。そして、シンジの乗る初号機の元へ通信が回される。

『話は聞いた。よくやったなシンジ』

エントリープラグの中でゲンドウの声を聞いたシンジは、今までなかった発言に対しても戸惑いもなく返事した。

「ああ、どうも。（肩いてえー）」

『では葛城一佐、後の処理は任せる。徳四郎中将、ご協力感謝する』

『いえいえ、ありがとうございます』

『はい。エヴァ3機の回収急いで』

ミサトの指示をマヤが現場へ回す。

『搬入は、初号機を優先、救急ケージへ』

使徒殲滅の現場で瓦礫に埋もれて待機するアスカは、コックピットの中で膝を抱えてうずくまり、今回の戦いのことを考えていた。

「私一人じゃ……なにもできなかった……」

これで誰もが作戦を終え、無事に勝利したと思えただろう。皆は安堵してEVAの回収と街の緊急態勢を解き、終わる作業をこなせば良いだけだと思っただろう。しかし、警報が鳴る！

「まっつてくさいっ!! 上空に巨大なATフィールドの反応ありっ!! これは新たな使徒の反応っ!!」

「なんですってっ!!」

突然、マコトの報告にミサトは、職員たちは驚愕する。

「そんな、在り得ないっ!! 使徒は一体しか現れないはずよっ!!」

リツコの発言に徳四郎は冷静に達観し口を開く。

「どうやら……奴は『様子見』をしに来たようだ」

徳四郎の台詞にミサトとリツコは反応し彼を見る。

「何か知ってるの!？」

『奴』は本来、存在しないはずの使徒だった。だが、『奴』は現れた」「存在しないはずの使徒? 何を言ってるの?」

「あれは今までの使徒とは違う。今、攻撃を受ければひとたまりもない。葛城一佐。現在動ける機体はどれだけかな?」

「そんなの……ないわ」

EVAは外部電源がないと活動時間は5分ジャスト。故に殆どのEVAは動けない状態。電池切れと言っても良い。その意味は新たに現れた使徒に対する対抗手段がないという事だ。通常兵器では使徒を倒しきれない。決戦都市の砲台や防御壁では確実に突破される。まさに絶対的危機である。手を出し尽くし、もはや打つ手無しと言う状況になってしまった。こんな事態を何処かで思う所があるのかり

ツコが何か言う前に通信が飛んで来た。

『ミサト……バルバトスが動く』

「っ!?シンジ君!」

「初号機、再起動を確認。ハーモニクス、シンクロ率安定しています!」

マヤの報告にリツコは信じられないと言う顔をしてコンソールのモニターを見る。

「ありえないわ、活動時間を超えてるのにケーブルも無しに動くなんて!」

「だが、現実にごうして動いている。それに私はある言葉を教訓にしている。ありえない事なんて、ありえない。もはや何が起きてもあんまり、驚かない様になった。それに赤城博士この現象、心当たりあるだろう?」

徳四郎の台詞にリツコは思い当たる事を閃く。

「まさか……蟲がEVAに干渉を?」

「アレはそんな役割を持った代物でもある。だが、もつとだ!碇シンジ。アラヤシキ・モドキ。初号機。この要因が揃っていると何かがまだある!私はそれを見たい!!シンジ君、動けるかね?」

「徳四郎中将?」

突然の徳四郎の豹変にミサトは啞然とする。

『大丈夫。行ける。ミサト僕はどうすれば良い?』

「使徒の注意を引きつけて、そこには活動限界になった零号機と弐号機があるわ。二人を巻き込ませない為にその場から距離を離すのよ。お願いシンジ君!」

『了解』

シンジの返答の後、マコトが次の報告を飛ばす。

「映像、出します!」

モニターが切り替わり、立ち上がっている初号機と上空に発生しているATフィールド写し出される。

「ATフィールドの空域から空間歪曲が発生。何か出ます!!」

マコトの報告でついにその使徒が姿を現す。それは天から降りて

来るかの様に大きな翼を広げ、両手に紅い剣を持ち、白の外装と黒の体積、胸部の中心あるコアをもったヒト型の巨人が顕現した。その姿はたとえば言えば羽を生やしたEVAに似た姿と形をしていた。

「ちよつとアレ、EVAなのか!？」

「いいえ、パターン青。間違いありません、使徒です!」

シゲルの発言の次にマコトが報告を告げる。

「あの使徒は……まさか」

巨人型の使徒の姿に昔の記憶が蘇る。4体の光の巨人の光景を。すると徳四郎がミサトの肩に手を置きながらモニターを見る。

「いや、あれは違う。あの使徒は異端使だ」

「異端使? 何ですかそれは?」

「端的に言えば使徒の亜種と言っても良い。旧時代の記述でそれらしい存在を見つけて我々はそう呼称する。あれは間違いない『奴』だ。セガンド・インパクトを発端に奴は目覚めていた。曾て旧時代の戦いの眠りから……恐ろしい!」

徳四郎はミサトの肩から手を離し、頭を抱える。その目は赤く血走っているほど何処か、『興奮』していた。

「あの使徒は見ているだけで解る。あの使徒は強い。シンジ君でも、何処までいけるか……」

顔を上げ、何時もの様子に戻った徳四郎はモニターに映った使徒を見る。

「シンジ君……」

ミサトは立っている初号機を見て、シンジの無事を祈り、レイとアスラをどうするか思考を巡らす。

シンジは初号機を操作して、使徒に臨戦態勢を取る。ウエポンラックからナイフを握り、引き抜く。そしてATフィールドの武器を形成。メイス状に展開して、構える。

(不思議な感覚だ。この感じ……そうだアラヤシキの時と似てる。お前もまだ止まりたくないのか?バルバトス。じゃあ、行こうか)

使徒はそのまま上空から、ゆつくりと下降して瓦礫の地上に足を着

く。翼が折り畳まれていく。使徒の兜の様な頭部がこちらを見る。

(あの顔……チヨコレートの人が乗っていた……名前なんだっけ？と
りあえず、ここから離れなきゃ。レイと式波が巻き込まれる)

そう考えたシンジは直ぐに行動する。初号機が一気に身を屈め、A
Tスラスターを吹かし後方へ大きく跳躍する。

それを見た後を追う様に自らも大きく飛び上がり、初号機を追跡す
る。初号機は零号機と式号機がいる地点から大きく離れ、別の地表に
着地する。後ろを振り返れば、使徒も着地して、こちらを見る。互い
に沈黙して、使徒は二振りの紅い剣に、初号機はATフィールドのメ
イスを構えて、互いに間合いを計る。

(この使徒、光線とか撃つてこない？そんな能力コイツにはないのか
?)

シンジは使徒を見て考えていた。目の前にいる使徒が何か攻撃性
の能力を持っている可能性を、光線か、音速の鞭か、加粒子砲か、変
化形の武器か、厄介なのを想像する。使徒を見ながら考える。

(テーブルはない。その分動きやすい。再起動した理由はわからな
い。けど、今はどうでもいい。バルバトスが動ければ、それで良い。
コイツが使徒なら、倒すだけだ)

シンジが思考するのを止めると使徒が先に動く。二刀流の剣を内
側に振るい切り付ける。対し初号機はメイスで向かい撃ち互いの武
器がぶつかり合う。そして互いに距離を取り、また鏢競り合いと打ち
合いを繰り返す。初号機のメイスが、使徒の紅い剣が、激しい攻防
を繰り返す。初号機がATフィールドを展開して殴りつける動作
をするとATフィールドの壁が使徒に向かって飛んで行く。しかし、
使徒はその壁を一振りですった切り、砕く。

「なんて戦いだ、初号機にあんな技があるなんて……」

「信じられません。シンジ君はATフィールド武器にも、攻撃にも応
用出来るのを見たのは初めてじゃありませんがここまでだなん
て……あれだけ激しい戦いを繰り返しているのにシンジ君のハー
モニクスが乱れた傾向はありません。彼はまだ、戦う気なんだ……
すばらしい」

オペレーターターのシゲルとマヤがそれぞれ思う事を口にする。

「これが初号機の方……あそこまでの力を以てしてもあの使徒を仕留めきれないなんて、まだいるの？あんな化け物級の強さを持った使徒が」

ミサトの声に徳四郎はモニターからミサトの方を振り向き話す。

「我々が調べた限りでは異端使は旧時代の戦いで殆どが死に絶えた筈だった。アダムと聖なる旧支配者ミステイク・オールドワンの戦争でな。激戦の末、同士討ちで終わった。奴は使徒の中でも上位種に入る存在。ガフの部屋で進化したか、変異して『あの姿』と強さを得た。我々が確認した異端使はヤツ一体だけだが……恐らく、あと3体はいる可能性がある」

「奴を含めて4体!?それにあなた何故、『ガフの部屋』の事を知っているの!?!」

「リツコ?」

リツコの様子にミサトは疑問を浮かべる。

「まあ、そんな事よりシンジ君の戦いの方に注目するべきだろう。私が『ガフの部屋』の事を知っている事を問い詰めるよりも、ね?」

そう言つて、初号機と使徒の激戦が繰り広げられているモニターへと視線を移す。

ガキンツ!!

初号機のメイスの一撃に使徒は剣で上手く防御して後方へ飛んで距離を取る。

(……なんだ?距離をとったぞ)

シンジは警戒して、構えを解かず様子を見る。このまま追撃を考えながら使徒の様子が得体のしれない空気を出しているのをシンジは感じた。使徒は構えを解き、そのまま立ち姿を見せてるのが不思議だった。もう、戦う気がない様な立ち姿に。

「なに、急に様子が変わった?」

「ふむ、あの様子……用は済んだみたいな感じだ。こっからどう出る?」

ミサトと徳四郎の台詞の後にモニターに映る使徒が翼を広げる動

きを見せる。すると使徒は浮き上がり、初号機を見つめた後、そのまま空へと飛んで行った。その様子を初号機は、碇シンジはただ見ている事しかできなかつた。

「飛んでった・・・奴は一体何をしたかつたんだ？」

「使徒の考えなんて、分かりませんよ・・・何れにせよ助かりましたね？」

シゲルとマコトの台詞に皆はホツと一息付く。これで状況が今度こそ終わったと思いい口にする。

「ええ、そうね。でも今回我々は何も・・・できなかった。何も、初号機が動かなければどうなっていた事か・・・反省点がいっぱいよ」
「葛城一佐」

ミサトが右手で目元を抑えて緊張を解しながら落ち込む様子を見せる彼女に徳四郎は声を掛ける。

「そう、気を落とすな葛城一佐。たとえ、一度失敗しても、それを認めて次の糧にして成長する事が出来るのが大人の特権だ。いや、人類の特権とも言うべきだろう」

「徳四郎中將・・・」

「マヤ。初号機の様子は？」

「初号機、活動停止。シンジ君は無事です」

リツコの声にマヤが現状報告をする。そして活動を停止した初号機のコクピット内でシンジは

「ZZZZZ・・・」

寝ていた。

とあるエントリープラグのモニターには初号機と使徒の激戦が写し出されていた。それを見た少女はただ啞然とするしかなかった。

（これが、あの七光りの力・・・何よあれATフィールドを武器に使うとか何なのよっ!?)

この映像に式波アスカはシンジの実力を知り、心に騒めき覚えた。そしてもう一人綾波レイはシンジの無事にただ安心して愛おしそうに見ていた。

「．．．よかった。碇君。無事でホントに良かった．．．碇君。私
強くなる。碇君と一緒に生きたいから」

第14章・天使と悪魔に紅い実を人類に愛と希望。

「徳四郎中将、貴方にはお聞きしたいことがあるわ」

「おや、赤城くんどうしたのかね？」

戦いを終え、これからシンジの元へ向かおうとして廊下を歩いている徳四郎に話しかけるリツコに振り向く。

「貴方は何処まで知ってるの？ガフの部屋の事」

「言ってもいいのかね。聞いたら後悔するかもしれないよ？」

リツコへ向き直る徳四郎は首を傾げて見る。

「異端使の事や、ネルフの知り得ない情報を貴方は知っている……そして蟲の事も、徳四郎中将貴方は知っているのね？使徒の事も『すべて』をだとしたらゼーレは戦略自衛隊は今誰の思惑で動いているの？」

リツコの真剣な眼差しに徳四郎は視線を真上、右下に動かした後に話す。

「そうだな……その事には関しては話せるもんなら話したいが、そうだな君になら——」

次の徳四郎の台詞の続きにリツコはゴクンと喉を鳴らして話を聞くが彼は

「教えてあげない!!」

と以下の台詞でリツコに笑顔を浮かべて言った。

「はっ!!」

「じゃ、そーゆ事ですから私は行く。早くシンジ君を一目見たいし私は行くー!」

そう言って徳四郎はリツコに背を向け、歩き出す。

「待ちなさい！まだ話は終わってな——」

「大丈夫」

いつの間にかリツコの近距離まで詰められ、左手の人差し指を口元に触れ、右手人差し指で『静かに』とジエスチャーする。

(いつの間にも!?)

徳四郎の顔がリツコの耳元まで近づき右手を自分の口元に添えて話す。

「すまない、今はまだ話せない。だが時が来たら話そう。君がゲンドウと決別してまで知りたいのなら話そう。だから今はまだ話せない。異端使の情報については後に送るとしよう。我々は全面的に協力しよう。使徒殲滅は我々の本懐でもあるからね」

そう言って徳四郎はリツコから距離を取り、両手を後ろに組み笑顔を浮かべて彼女を見る。

「徳四郎中將……貴方はいったい何者……そんな事が本当に出来るの？」

「上層部からの認可は既に下りている。問題はない。それではまた」
後はそれ以上話す事はないのか徳四郎は今度こそ背を向き歩き出す。心なしか彼の歩き方が何処か『誰かに会うのが楽しみ』の様な足取りの歩き方なのをリツコは啞然と見て溜め息を付く。

さてきて、ひとつ戦争の話しよう。大昔、君の世界で起きていた戦争だ。

「……………」

300年前に勃発したこの戦争は惑星間規模を巻き込んだ戦いだ。
ズクツ

規模は余りにも大きく、地球圏の統治機構は崩壊、月は荒廃する壊滅的な打撃を受けた。

何より注目するべきなのはこの戦争の敵が『機械』だと言う事だ。モビルアーマー。機械による自動化で人類は豊かさも、戦争も自動化を推し進め効率化を求めた。しかしかな人類は効率を求めるあまりとんでもない殺戮兵器を生んでしまった。それがモビルアーマー。

あたかも機械が人類を見切りをつけた様にモビルアーマーのAIは人類を鋭利に攻撃するように反応し、人類は己の行き過ぎた業が生んだ結果と言えよう。

シンジは見ていた。椅子に座って、目の前の変わりゆく世界を。

背中が疼く。厄災戦の話しに反応するかのよう。

だが人類はいつまでもやられっぱなしではなかった。モビルスーツを開発。これにより人類はモビルアーマーと熾烈な戦争を始めた。それこそが『厄災戦』だ。月を穿ち、人類の疲弊、惑星間への大打撃。その中で特にモビルアーマーとの戦いで活躍したのが『ガンダム』。特別なモビルスーツだった。全機72機にも関わらずそれぞれは確かな戦果を挙げて、ついには勝利を人類に齎した。厄災戦は君のいた世界の年号P・D・0001年にギャラルホルンが発したヴィーンゴールヴ宣言を各国が受諾したことにより戦争は終結。4大勢力の均衡維持で平和が保たれたと言う。

「昔の話をして、どうしたいの？」

いや、なに。ちよつと注目して欲しい所があつてさ。モビルアーマーには天使の名が記されていたそうだ。君の戦った事がある、あのモビルアーマーもまた同じ。名前は『ハシユマル』。

目の前に『彼』が倒したモビルアーマーの巨体が現れる。巨大な鳥の様な形状をした機械の塊が頭部の部分がシンジを見つめる様だと『彼』は感じた。

ズクンッ！

背中が疼く。天使の名を冠したソレに反応する様に。

対してガンダム・フレームは『悪魔』の名を冠していた。厄災戦は正に人類を殺す天使と人類を勝利させる悪魔の戦いだつた。そして君は今、天使の名を冠した怪物と戦っている。これってさ……ある意味、人類対天使の戦いだよね。

「アレが天使……なのか？」

使徒はまだ襲来する。異端使も含めて君の住む街に進撃して来る。特に異端使は君を狙うかもしれない。

「どうして？」

『悪魔』の因子をその身に宿し、異端使は君に計り知れない可能性を感じた。そして異端使はこう考えて君の前に現れる……『悪魔を殺す』とね。72柱の悪魔の名を冠した因子を持つている君を。オールド・ワンが生み出した巨人の力。いずれ来るであろう時まで、進み続ける『美しい』人の子よ。

プラグのハッチを開ける音で目を覚ます。シンジは自分がさつきまで寝ていた事に気づく。若干、ぼーっとする頭を振り、周りを確認する。

「よお、大将。大丈夫か？」

ネルフの整備員が目を覚ましたシンジの様子を見る。

「んー。少しスッキリした感じ。使徒はどうなった？」

「大将たちのお陰で殲滅は完了。もう一体は飛んで逃げた。だが、大将が戦ってくれて俺たちは無事だ。ありがとうな」

そう言っつて、整備員の彼はシンジに手を差し伸べる。

「そうかな？」

「そうだよ。大将、さて整備するから。さっさと降りた、降りた。俺達が整備するから大将もシャワー浴びてゆつくり休みな。後は俺達に任せろ」

シンジは差し出された手を掴み、引き揚げてもらい。アンビリカルブリッジに降り立つ。そこへ丁度いいタイミングで徳四郎がシンジの元へやって来た。そして彼に軽く手を少し上げ、挨拶する。

「やあ、君が碇シンジ君だね？初めまして、戦略自衛隊中將の御神徳四郎と申す。一目君に会いたくてここに来た」

「はあ、そうなんだ。それで用件は？」

シンジは少し身体を慣らす。身体に少し違和感を感じたのか肩を少し回す。

「大丈夫かね？」

「うん。直ぐに『良くなる』」

「そうだったな……君はそう言う体質だった。どうだね？アラヤシキは違和感はないかな？」

その言葉にシンジは反応する。

「知ってるの？コレのこと」

「ああ、良く知っている。君の叔父や叔母の事も……ユイ君の事も」
「母さんを知っている？」

徳四郎の口から母の名が出たのを聞いてシンジは興味を持つ。

「ああ、もちろん。君の母とは良き『友人』だった。今でも思い出すと私は君の母と出会えてよかった。その出会いは実に素晴らしかった。そして君との出会いは更なる喜びだ！」

何処か懐かしそうに話す徳四郎にシンジは何処か回りくどいモノを感じて切り出す。

「それで、僕に何か様？」

「あー。すまない。君を見ていたら何処となくユイ君の面影を感じてね。是非会って話がしたくて君の元へ来た。そして、これだけは聞いてくれ。私は君だけの『味方』だ。何か相談があれば是非、私を頼ると良い。何時でもはせ参じる。その事を覚えて欲しい。よろしくシンジ君」

そう言つて徳四郎は懐からメモ用紙を出し連絡先を書くと言つてシンジに渡す。

「なんで僕にそこまで話すの？あんた母さんのなに？」

「友達だよ。ユイ君の遺したものを守り徹す。それが私のすべき事は出来る。そしてサポートが私と我々の限界だ。だがそれでも、私は君の助けに全力を尽くす。そして、その先にある君の未来を見たい。シンジ君の迷いのない、矛盾もない、真つ直ぐな君の目が美しい。君の一貫性が、怯まない君が、その覚悟が素晴らしい！鬼神の如きの戦いも、何とも言えない美しさだった！シンジ君！ネルフに来てくれてありがとう！戦つてくれてありがとう！この世に生まれて来てくれて本当にありがとう！」

徳四郎は演説気味な話と感謝を贈る言葉としてシンジに話す。ネルフ職員は引き気味だけど、シンジは動じず彼の話を最後まで聞いた。

「……そう」

「戦略自衛隊はこれからもネルフのサポートする場面で動くつもりで行くからね。よろしくシンジ君」

徳四郎が手を差し出し握手を求めのに対し、シンジはそれに応じた。互いに握手して徳四郎は満足そうに笑顔になり。シンジも少し笑って答える。そして互いに手を離す。

「実に有意義な時間であったよ。ありがとうシンジ君。君の未来にPlus Ultra!」
「うん。じゃあね」

その夜。静けさを取り戻した第3新東京市。アスカはミサトの家に戻ったアスカは、布団に包まって眠れない時間を過ごしていた。アスカは何度か寝返りを打ったあと、月明かりに照らされる窓を見つめる。

「ずっと、一人が当たり前なのに……孤独って気にならないはずなのに」

アスカはシンジの部屋の扉をゆっくりと開けると、静かにシンジの部屋に入り込んだ。シンジは寝息を立てて眠りについていた。アスカは、おもむろにシンジに背中を向けて布団の上に寝転ぶ。

「ん、式波? どうしたの?」

物音に気づいて目を覚ましたシンジは、異変に気づいて振り返ろうとする。

「こっち向かないで」

アスカはシンジの動きを声で封じる。

「……わかった」

とりあえずシンジは普通に横向きに寝る。アスカに背を向けて。

「七光り……ちよつとだけ居させて」

アスカは息を吐くように小さな声でこつそりと喋る。シンジの手元には握力を鍛える握りグリップが転がっていた。

「眠れないの?」

「別にそんなんじゃないわよ。ただアンタに言いたい事があるだけ」
「そう」

「今日、ドサグサに紛れて名前呼んだでしょ。特別にアスカでいいわよ。あたしもバカシンジって呼ぶから」

「バカシンジ・・・僕の事は普通に名前で呼んで良いけど？」

「うっさい！バカシンジ」

アスカが布団に視線を移す。

「ねえ、あんたってどうしてEVAに乗るの？」

「そんなの決まってるじゃん。前に進む為だよ」

「進むって何処によ？」

少し興味が出て来たのかアスカは少し動く。

「みんなとバカ騒ぎしたり、楽しんだり、学んだり、一緒にご飯食べた
り、そんな事が当たり前の様な居場所。その為に僕は死なない。その
場所に辿り着くまで僕は止まらない。使徒も、あの使徒も全部倒して
前に進む。最後まで戦って、この場所を守りぬく」

「・・・バカシンジ・・・何よそれ、カツコつけちゃって良くそんな
台詞言えるわね。そんなに普通の日常が好きなの？」

「好きだよ。使徒を抜きにすれば、ミサトやアスカやレイとトウジ、ケ
ンスケと委員長・・・みんながいる日常が僕にとってはとても楽し
い」

「・・・そう。アンタってそう考えているのね」

アスカは声のトーンを下げ、話す。

「アスカもどうしてEVAに乗るの？」

「そんなの・・・自分の為よ、EVAに乗るのは」
「そっか」

シンジの問いに素っ気なく答えるアスカにシンジはそれ以上は聞
かず、そのまま寝ようとするが・・・

「ちよつと、もう寝る気？」

「ん、もう寝ないと明日の弁当作れないかもしれない・・・まずい
飯を作る訳にはいかないし。それともまだ話したい？」

シンジはそう言って視線をアスカへ移す。

「……っ、もう、いいわよ。バカシンジ！」

「うん。おやすみ、アスカ」

少し頬を赤くしシンジの視線から目を逸らし、話を切り上げるアスカ。シンジの次の意外な言葉に虚を突かれる。

「アスカ。一緒に戦ってくれてありがとう。これからもよろしくね」

「あんたってホントバカ……」

アスカは、シンジの言葉を聞いて、少しだけシンジとの距離、自分の中の自分との距離を見つめなおす。

翌朝、空は快晴、学校は生徒で賑わっていた。

「さあてえ♪メシやメシい！学校最大の楽しみやからなあ」

トウジは購買で買ったパンを両手一杯に抱えて、満面の笑みを浮かべて教室へ戻る途中だった。トウジが教室へ入ると、奥の方からアスカの声が聞こえた。

「相変わらず、美味いわね。あんたの弁当」

シンジの机にもう一つ机をくっ付けて一緒に弁当食べながら話すアスカ。

「うん、ウインナーが上手く焼けた。タコのように切ったから面白いでしょ？タコさんウインナーとカニもあるから。よく噛んで食べてね。明日はもつと別のバリエーションにしようかな？」

弁当を見て、シンジは少し考える。

「あんだただったら、どんなものでも作りそうね……この前は像とか作ったわよね。すごいわ」

そんなやり取りをする二人を見てトウジは冷かしを入れる。

「なんや？今日も夫婦の日か、ええ仲やで」

「夫婦？」「違うわよっ！」

アスカは顔を真っ赤にして否定して、シンジはそう見えるのか？を浮かべる。

次の朝。シンジはミサトの家のキッチンでウインナーを焼いてみ

んなの分の弁当を作っていた。

「アスカあー洗顔フォーム貸して」

洗面所からミサトが大声を出す。

「いい加減にしてよミサトおっ！自分で買ってきなさいよっ！」

「けちん坊！」

お昼を知らせるチャイムの音が校舎に鳴り響くと、トウジはいつも通り上機嫌になって足取りを軽くする。

「さあて、メシやメシ」

「んん〜美味しい。今日はイカの形に切ったのがあるわね。アイツ筋肉のだけじゃなく、料理も出来るなんて何者なのよ」

教室でシンジの作った弁当箱を開けたアスカは、一人でもくもくと食べ始める。その時、アスカの席の前に一人の女子生徒が歩み寄る。

「あの、アスカさん？一緒に食べてもいい？」

恥ずかしそうな顔でアスカにお願いするその女子生徒は、学級委員長のカヒカリだった。

「いいけど、弁当は分けないわよ」

アスカは不思議そうな顔をしてから、さっと弁当箱を手持って隠すように後ろへ下げる。それでもカヒカリは、嬉しそうな顔をしてアスカに自分の弁当箱を持って見せる。

「レイ、今日も作って来たよ」

窓際で席を作って弁当を準備したシンジがレイにオレンジ色のナプキンに包まれた弁当箱を渡す。結び目には箸入れが刺さっていた。

「ありがとう、碓君。いつもありがとう」

「うん。今日は身体の具合は平気？」

「大丈夫。検査も異常なしと出たから、これからも碓君のお弁当が食べられる」

「そっか、それじゃあ僕も味を落とさない様にしないとね。今度、レイの所へ行って料理教えてあげるよ」

「うん」

シンジとレイが話している様子をアスカはじつとりと眺めていた。カヒカリは嬉しそうにアスカに話掛ける。とても不機嫌そうなアスカ

はそれどころではない様子だった。

「ヒカリ……だっけ？残り、食べていいわよ」

アスカは食べ残した弁当を、ヒカリの方へ肘で押してよこす。

「え……？」

「ふぁーお腹満腹っ！ご馳走様でしたっ！」

NERVの食堂で弁当を食べ終わったミサトは、両手をパチンと合わせてお辞儀をする。

「遅い昼メシだな」

そう言っただけで加持はミサトのテーブルに缶コーヒーを置くと、後ろからぐるりと隣の席へ回り込む。

「あ……ありがと」

「シンジ君に作ってもらってるんだって？ま、キミは手料理ってガラじゃないしなあ」

加持は冗談を言いながらミサトの隣にある椅子を引くと、いやに近い距離に腰を下ろした。

「……そうねっ。暇のあんたと違って現場の管理職はたんまり仕事があんのよ」

ミサトはおもむろにノートパソコンを開いて、加持から目を背ける。

「相変わらず真面目だなあ。まあそこが葛城のいいところだが、弱点でもある。この前の時だっけりっちゃん

とやり合ってたって聞いたぜ？もうちよつと余裕持てよ」

「あいにく私の器は責務でいっぱいなのよ」

ミサトはノートパソコンのトラックパッドの上で指を持て余していた。

「緊張感ありすぎると男にモテないぞ？」

「余計なお世話よっ」

カチンときたミサトは加持の方を睨みつけようとした。しかし、ミサトをじっと見つめる加持の目を見て、照れで怒りを吹き飛ばされてしまう。

NERVの指令室では奇妙な会合が行われていた。御神徳四郎と碇ゲンドウの会合である。

「いやはや、久しぶりだね。ゲンドウ君。何年ぶりだろうか？」

「……ああ、まさか君が戦略自衛隊の中將までになつているとはな」「こんな世の中だ。私もまた人類の証を残す為に色々頑張つたよ。その先にある未来へ繋げる為に」

指令室の机で両肘を付けながら前屈みなり、手を組むポーズをして徳四郎を見る。

「色々手を回してくれてるそうだな。何の真似だ？」

「何も、我々は一つにならなければならぬ。武器の開発やサポートを全面的にやるだけだよ。新しい兵器もそちらに提供した。これなら、使徒との戦いもなんとかできるはずだ。篠原閣下のベイビーはお墨付きだ。敵には使徒だけでなく異端使も出て来た。これからの戦いは苛烈さを極めるだろう。ネルフだけの戦力では確実にやられる。君の言うシナリオも狂い始めているのではないかな？」

「……何の事か知らんが、我々の目的は使徒殲滅だ。深入りはやめてもらおう」

徳四郎が少しゲンドウに近づき、視線を合わせて笑いかける。

「ゲンドウ君、時にハリガネムシを知っているか？」

「カマキリに寄生する虫か……どうしたんだい突然？」

徳四郎の台詞に冬月が返答する。

「カマキリやコオロギ、カマドウマが水の中にいる事があるだろうか？アレは全部ハリガネムシの所業だ。可哀想に。水に飛び込んで気づいた時には、溺れ死ぬか。魚に食べられるかの道しかない。宿主をマインドコントロールして、成虫なる時まで体内で成長していた。そして期が熟すとハリガネムシは宿主の脳を操り行動を起こさせる。宿主が入水すると、大きく成長し成虫となったハリガネムシが宿主のお尻から、にゆるにゆるにゆると、でてくるのだよ。そして無事に川に戻ったハリガネムシは交尾をして、また産卵をする。そして宿主にされたカマキリやコオロギ、カマドウマは……ああ、なんて可哀想

なんだ。今まで操られていたなんて、特にカマキリは昆虫の中で強い分類に入ってるのにまさか、その身が寄生されて操られて死ぬなんてとても、とても哀れだ」

「何が言いたい？」

「ゲンドウ君。君は今も自分が『正常』で今此処で生きていると思ってるのかね？ いやいや、君はもう、手遅れなのだよ。ゲンドウ君。君がお山の大将でいられるのは『彼女』がいるからなのだよ。都合よくコントロールをしてね」

「何の話をしている？」

ゲンドウから怒気が籠った空気が出るが、徳四郎は気にせず話し出す。

「まだ、察しができない？ 可哀想に。君は初号機で既に会っている筈だ。『彼女』にそして、『種』を植え付けられた時点で君は詰み。そして君はこの先、礎としてその責を全うするだけの傀儡として未来を終える。解るか？ お前は自分の息子の踏み台だ。シンジ君は登って行く。ゲンドウ君はそれを見ている事しか出来ない」

ゲンドウは腕を動かそうとして気づいた。自分の腕を『誰かに掴まれている』感触を。そして気づく、身体が動かない。いや、『動かせない』事に気づいた。何故だと思ひ、自分の腕を見る。そこには、白い腕が、『自分の身体から生えた白い腕がゲンドウの左腕を掴んで離さない。更に別の手が出て来た。その白い腕はゲンドウの身体へと纏わり付き動きを封じる。服の隙間から。上着の袖の中から。女性の白い手がゲンドウの動きを封じていく。

(なっ!!?なんだこれはっ!!?)

気持ち悪い。恐ろしい。そんな現実が今、ゲンドウに起きていた!! そしてさらに、腕からまた別の腕が出て来て、ゲンドウを抑え込む。何よりその光景を冬月と徳四郎は満面の笑みで達観していた。

「哀れよのー。哀れよのー。ぶっぶっ！ ホントに哀れよのー!! ゲンドウ君!! いいよ、いいよ。そのキモさ。とても哀れで、ツボに入りそうだっ!!」

「ああ、さすが○○君、恐ろしい事を考えるものだ。これ大丈夫なのか

ね？」

「平気です。終われば元に戻りますので、ご安心ください」

そう言って徳四郎はゲンドウに距離を詰める。そして姿勢を机に抑え込まれているゲンドウの顔近くまで下げる。

「どうだね？ゲンドウ君。寄生されて身体をコントロールされてる気分は・・・気持ち悪いですか？最悪ですか？楽しいですか？わかるかね？これが寄生された生き物達の気持ちだ。これも蟲の効力だね。怖いんだよ」

「：はい。とても・・・最高です。（何を言っているんだ私は!?!）」

「うんうん。そうかそうか。解るかなゲンドウ君、この状態こそが正に・・・」

徳四郎はゲンドウを立たせて、自分に身体を向けさせる様に動かす。なんと彼は指の少しの動作だけでゲンドウの身体を自分へと直立の姿勢に立たせて向き直させる。そして彼はゲンドウに近づき、肩を組んで顔を見せた。その表情は・・・

「寄生されて哀れな死へ向かう、救いのないカマキリ!!」

憐憫の相・狂笑。

そこでゲンドウの意識はブツリと消えた。

床に倒れ伏しているゲンドウを座布団の様に胡坐をかいて座り、冬月と話をする徳四郎。

「それで、そちらの進捗はどうかね？作っているんだろう」

「まあね、篠山開発部長の方は楽しく作っている。完成はもうすぐだ。他の根回しもやっていると報告が届いた。初号機の他にも式号機、零号機の部品もちゃんと届く手筈を作っている。この戦いEVAの整備がちゃんとしてなければ我々は勝てない。パイロットのメンタルもしつかりせねばならん。近直EVAの整備始めなければならん。どうやら、ゲンドウ君や他の上層部は満足に部品の手筈をしてないみたいだからね」

「ああ、それねえ……ぶっちゃけて言うとお金と資材がね。こんなご時世だから調達がどうにも上手く行かなくてね。すまない。それに初号機には」

「わかってるとも、冬月副指令どの。この計画には初号機が必要不可欠だと言う事も全部知っている。だが、異端使が生きていた以上。我々は一丸となって戦わなければならない。その為の地均しはしてある。部品も、資材も取れるさ。それにこの戦いは初号機が必要だ。装甲に変異をもたらす程の自己進化を続けるあのEVAがね」

「初号機の自己進化……これは『彼女』か望んでいるのか？」

「『彼女』だけじゃないさ。初号機自身も……いや、バルバトスも望んだ結果かもしれない。使徒や異端使を倒す為か、或いはシンジを守る為かだ。あの様子だとダミープラグは受け付けない様になっているだろうし、既に初号機はシンジ君の専用EVAに様変わりしている。封印も危険だ。他のパイロットで動かしてみようものなら精神汚染や、拒絶反応などを受ける可能性がある」

「そこまで……ならば、シンジ君を別のEVAに乗せた方がいいのでは？」

「やめた方が良く。動かせたとしても、シンジ君の阿頼耶識の器にならない。簡単な話、シンジ君の反応に機体が付いて行けない。それだけシンジ君はすごいのだよ。だから我々は『彼女』の望んだ通りに役目を果たせば良い」

「そうだな。ところで、ソレの座り心地はどうだ？」

「ん……ぶよぶよする。怠けた肉の感触だ。冬月くんも座るかな？」

「いや、遠慮しとく」

その日の夜シンジは鍋を煮込んでいた。良くかき混ぜて、小皿に少しのスープを注いで味見する。

「うん。いいかな」

そう言っただけでシンジは鍋の中のスープを皿に盛り付けた。ご飯の上にかけて料理を完成する。

「今日の晩御飯何なの？いい香りね」

「あら、アスカは初めてかしら。この香りは私達にとっての国民的料理の定番カレーライスよ。それもシンジ君特製のね」

カレーライス。

材料。豚バラブロック。ニンジン。玉ねぎ。じゃがいも。カレールー。水。サラダ油。隠し味???

アスカの反応に仕事を終えて帰って来て服を着替えたミサトが料理名を答える。

「今日は少し隠し味を入れてみたから、良く味わって食べると良いよ」

「あらホント？それじゃあさつそく、いただきます」

『いただきます』

手を合わせて、食べる前の挨拶をする3人はスプーンを取り一口味わう。

(これは、辛い？けど・・・)

(旨い。そして仄かに甘い感じもして、これはもしかしてチョコを入れているのかしら。だとしたら、シンジ君、けっこうな拘りがあるわね。とても美味しい！)

そして、もう一口を入れる。噛み締めた米の甘味。良く煮込まれ脂の乗った豚肉。カレーに溶け出した玉ねぎの旨味と形を残した玉ねぎに火を通して生じた甘味。二つの玉ねぎ味が混ざり合い舌をやみつきにさせる！

(オレンジ色のニンジンとジャガイモ柔らかく味がしみ込んでいる。なるほど様々な食材の旨味が次々とはじけて混ざっていく。これが

カレーライスね!」

時折福神漬けで口を休ませ、さっぱりとしたレモン水で初心に立ち戻る。

アスカとミサトは今、額や鼻の頭から汗を感じつつも手が止まらな
いでいた!

また匙ですくっては頬張り味わう!

(旨い!何なのよこの味。もうこれ、店を出しても良いくらいの味
じゃない!)

(これがホントのカレーライス……やみつきになる味、シンジ君恐ろ
しい子!!)

複数の旨味や辛味が重なり生じる圧倒的な美味!そして二人は、

『おかわり!!』

見事なシンクロでシンジに二皿目を求めるのだった。

「まかせて。(この調子なら今日でなくなるかな?) お皿取るね」

「はーい。お願いしまーす!」

ミサトの調子良さそうな声にシンジは顔がほころびる。

「これがバカシンジの作るカレーね。あんた、EVAパイロットやめ
てレストランのコックになっちゃえば?」

「いや、僕の料理は特技みたいなものだから、店を開くほどの意欲はな
いよ。それに誰が此処の家事をやるのさ?」

シンジの台詞にドキリとミサトが固まる。そしてアスカは残念そ
うにミサトを見た。

「それじゃあ、まだあるから待っててね」

二人の皿を持ってシンジはキッチンへと戻って行って、二人のカ
レーライスを持って来る。

そうして、3人の晚餐は過ぎ去って行くのだった。

第15話・命に定めを持つ者が栄華を歌う時

某所

「初号機の変異と自己進化……それに異端使の襲来か」

「これも、『彼女』の意思か。それともEVA自身か。いずれにせよ、これは見過ごせない事案だ」

「3人目を別のEVAに乗せ換えるべきだ。初号機が計画に障害を及ぼすほど変異する可能性がある」

「そこまでの変異は『彼女』の望む事はない。むしろこの変異が良い方向へ向かっていると見るしかない。使徒や異端使に対抗できるほど自己進化を続ければ計画は進んでいける。それに初号機と3人目を離すのは危険だ。自立起動する兆候が見られる。別のパイロットを乗せた場合精神汚染の危険がある。封印も凍結も危険だ。そんな機体を3人目、碓シンジは使いこなしてる。彼と初号機の戦力は貴重だ。これからの戦いは激しいモノになる、もはや『彼』の言う通り、条約がどうのう言っている場合ではない様だ」

「それでは……」

「『彼』の言っていた様に今のNERVの戦力を増設し、協定も条約も見直す必要がある。もう神話の様な戦いが始まった。我々の望みはそれからだ」

NERV医療区画。

綾波レイは検査を受けていた。身体の異常や、遺伝子の状態や、細胞の変化。リツコは彼女の事を知っている。『生まれ』も知っている。そして『何処から』来たのかも、今日は随分長い検査だと彼女、綾波レイは検査用の寝台にその身体を寝かせて考えていた。下着一枚でその華奢な身体には煽情的な雰囲気を感じさせる様だった。

「レイ。もう良いわよ」

彼女の声を合図に検査する機械が停止して行き。リツコが来て、降りやすい様に機械を退かしていく。そしてレイが降りて、地面に足を着く。リツコから服を受け取る。

「ごめんなさいね、レイ。今日はこんな検査をして疲れた？」

「いえ……大丈夫です。私もありがとうございます。様子を見ていただき」

「良いのよ。これも仕事だから、この検査で身体の調子がどうなっているか解るから。貴方はもう行つて良いわよ。後は私がやつておくわ。お疲れ様、レイ」

「はい……失礼します」

そうしてレイは医療区画の更衣室で服を着て部屋を後にする。リツコは資料を見て医療区画に用意された椅子に座り、珈琲を一口飲む。そして資料の結果を見る。そして他に写真をシャウカステンに張る。

「これは……どういう事なの？レイの細胞が『正常』に生きているなんて。もう調整日を受けなきゃいけない筈なのに何の兆しも起きていない。これはどうして？」

「おやおや、お困りですか？赤城博士」

「ッ!!」

突然現れたこの男、御神徳四郎。最近よくNERVに入り浸る様になつているのがいつの間にか、定着していた。

「いきなり現れるのやめてくれるかしら？心臓に悪いわ。特に貴方の場合」

「おやおや、それは失礼した。その資料に写真、綾波くんのかね？」

その台詞にリツコは眉をひそめる。当たりかと言ひ、徳四郎は笑う。

「最近、シンジ君の料理を食べて栄養がついたから健康になつたかも知れないね」

「まさか、そんな事であの子の身体がここまで健康に維持できるなんて……ありえないわ」

そう言つてリツコは用意してた珈琲を一口飲む。

「まあ、都合がいいじゃないか？EVAパイロットの一人がちやんと乗れる様ならな。それに……彼女の心はシンジ君の方に向いている。『あの』シンジ君にだ。ゲンドウ君からね。ある意味、君にとつて

も・・・ね？」

「どうかしらね・・・貴方が渡してくれた資料のだけど、俄かに信じがたい事ね。異端使が使徒の亜種で、ミスティック・オールドワン聖なる旧支配者を倒す為に変異した個体なんて。貴方の言う旧支配者って何なのかしら？」

ミスティック・オールドワン「聖なる旧支配者。それはこの地球に既に存在し、アダムを薙ぎ払い、リリスをひれ伏せた。そして古代の時代より支配者として人類達を、最大級の恐怖と聖なる狂気と大いなる力を持った『神』さまとして恐れられ、支配して来た。その旧時代、人類はを本物の神様として崇め、ひれ伏し、その支配を受け入れ、甘受して来た。中には反旗翻し支配者を討とうとした者たちもいたが・・・みな無意味に散って行った。可哀想に・・・」

ミスティック・オールドワン「その聖なる旧支配者は使徒なの？それとも強大な『生物』なの？」

「アレを使徒や、怪獣みたいなカテゴリに含めない方が良い。ミスティック・オールドワン聖なる旧支配者とはマギの解析では測れない。それほどの強大で、恐ろしく、絶大な存在だ。そして再び目覚めれば人類は確実に、絶望と、恐怖と、狂気が、何処からともなく現れ、恐ろしい事が待っている・・・それこそが聖なる旧支配者」

徳四郎の話すその一言と言う一言にリツコは圧を感じ、彼のその目には深く恐ろしい『闇』を写し出していた。その見えない恐ろしい理を込めた闇を。リツコはとりあえず自分を落ち着かせる為に珈琲を飲みこみ気持ちを切り替える。

「もしそんなのがいれば、人類は本当に詰みね・・・貴方の言う旧支配者なのだけど、その言い分は今眠ってるって事かしら？」

「そうなんだよね。今は眠っていて何もしない事を選んだかの様にいるのだが、本当は目覚めていて我々を見ているかもしれない。あるいは、我々やリリスなどに飽きて寝ているだけかもしれない。まあ、何れにせよ今は使徒の襲撃に備えてのテストや整備のスケジュールで一杯かな？」

「ええ、そうね。最近『誰かさん』が部品提供を良くしてるモノだから何とか次の決戦に備えられるわ。何が望みなのかしらね？」

リツコは椅子から立ち上がり、歩いていく。そんなリツコの背中に

徳四郎は包み隠さず言う。

「勝利だよ。リッコ君。我々は『勝利』して、前に進まねばならぬ。だから、ゲンドウ君の事はいつでも手を切れるんだよ?」

その台詞にリッコは立ち止まる。

「言ったはずだよね……ゲンドウ君が破滅する所を見せてあげようかと?」

「まさか……貴方が!?!」

徳四郎の台詞にリッコは驚愕して、振り向く。その様子を見ながら徳四郎は微笑み次の台詞を言う。

「真実を少しだけ見せてあげようか? ミサト君や、シンジ君達を誘って『ピクニック』なんてどうだい?」

NERVシンクロナテスト施設。

L. C. L. に浸けられたエントリープラグが並ぶ巨大なプールで、実験が行われていた。

『パイロット、2次シンクロナ状態に異常なし。精神汚染濃度、計測されず』

シンジ、レイ、アスカの三人は、データ収集のためエントリープラグ内に入り込んでテストを受けていた。

「あーああ。退屈ねえ。使徒が来ないとチェックばっか! まいっちゃんぐね」

アスカは聞こえるように不満を漏らす。コントロールルームでは、ミサトがオフィスチェアに乗ってぐるぐる回りながらそれを聞いていた。

「いーんじじゃないのお? 使徒の来ない、穏やかな日々を願って、私らは働いてんの、よっと」

「昨日と同じ今日、今日と同じであろう明日。繰り返す日常を謳歌。むしろ、感謝すべき事態ね」

リッコはコンソールに寄りかかりながら、コーヒーを飲んでいた。その時、何かを知らせるアラームが入る。

「チェック終了です。モニター、感度良好」

マヤの報告を受けて、リッコはパイロットに通信を入れる。

「お疲れ様。三人とも上がっていいわよ」

アスカは、L・C・L.の中でモニターに映されたシンジを見る。しかし、直ぐに通信が途切れてしまう。

『L・C・L. 排水開始、3分前……』

「はい、はい。あーそうですか。わかりました。それではその様に報告します。はい。ありがとうございます」

従業員用の列車に乗って徳四郎にミサトとリツコ、マコトとマヤは移動中だった。

「どうかしましたか？徳四郎中将」

徳四郎の携帯電話での会話を気にしてたりツコが話しかける。

「うむ。常任理事国・非常任理事国全ての会議である決議が決まった。それをこれからネルフ、延いてはミサト作戦指揮官殿や赤城リツコ博士に報告をと……」

「な、なんだって!？」

徳四郎の台詞にマコトが驚きを露にする。

「それで、なんて報告なのですか？」

ミサトの言葉に徳四郎は彼女の方を見る。徳四郎は彼女を見て笑顔で答える。

「君達にとつての嬉しい結果と報告だ」

ある一室で二人の男が報告書を見ていた。ゲンドウと冬月。ゲンドウは何時もの様に司令室のデスクに座り何時もの手を組むポーズで見ている。

「良かったな、碇。これで『我々』の計画は上手くいくな？いいんだ。いいんだ。君は何も言わなくても直ぐに解るから。もう良いんだ」

「君がシンジ君を捨てたあたりかな……それからしばらくして、私は『彼女』に逢った」

冬月は思い出す。白衣を纏った女性が失望の中で忽然と現れた時と過去を。

「私はあの時、『彼女』は私に『真実』を見せてくれた。だから、私は

この先、『彼女』の未来へ付いて行く。○○君の『明日』へ。君とはまあ、その時まで付き合っ行って行き。だから……」

冬月はゲンドウ頭を掴み、自分の方へ向かせて顔を見る。

「君はまた、記憶を都合よく『リセット』され明日を迎えると良い。でもこの報告書の内容は覚えておくんだぞ」

報告書にはこう書かれていた。

『使徒殲滅の為、建造中のエヴァンゲリオンの優先所有権を全て日本に優先するものとする』

『これは常任理事国・非常任理事国全ての可決が通った決議であり、ヴァチカン条約より上位とするものである』

『アメリカで建造中の『3号機』『4号機』、月で建造中の『6号機』も完成次第ネルフに輸送する』

「他にも、我々に力を貸してくれる所もあつてな。正に至りつくせりだ。良かったな碓」

「計画に支障がなさすぎない……冬月、お前もシンジを崇めるのか？」

「崇める？君にはそう見えるのか？可哀想だ。私はただ○○君の望んだ世界を見たいだけだよ」

そう言つて冬月は笑う。ゲンドウはサングラス越しから彼を睨む。

「大丈夫だ。碓。我々は進んでいるよ。『人類』の『救済』への道へとね」

「……ああ、そうだな」

ゲンドウの目付きが力なく緩んだのを見て、冬月はゲンドウの頭を掴んでいた手を離す。

「大丈夫だ、碓。『君は何も不安に思わず自分の計画が上手く進んでいるのだと思えばいい』大丈夫だ、碓。全て上手く行く」

そうして、ゲンドウは肘を付き手を組むポーズをして他の報告書に目を通すのであった。

NERV身体トレーニング施設。

「……ッ！……ッ！……ッ！……ッ！」

シンジは上半身裸で懸垂を続けている。かれこれ10分以上。そ

んな彼の周りにはNERVのスタッフの日向と青葉が体力の限界にねを上げ、へばっていた。

「し……シンジ君。きみ、すごいね。ぜつ！……はっ！こ、ここまでとは」

日向が息切れしながらも、未だに懸垂を続けてるシンジに声を掛ける。

「さ、さすがに……参った！……ぜツ！……これが14歳の子供……かよ？」

青葉は仰向けに床で寝て、息切れ。日向同様に限界に達しシャツが汗で濡れていた。ことの経緯は身体トレーニング施設でシンジを見かけた二人が思い切って声を掛け、一緒にトレーニングをすることに。

「うん……ッ！何時もやっているから、これぐらい普通でしょ？」

「いやいや、君の回数。尋常じゃないでしょ。ぜえ、ぜえ、その筋肉もすげーよ。幾つぐらいから、鍛えてた？シンジ君」

「んー。物心ついた時かな、こんな時が来るんじゃないかと予想していた事もあるけど、強くなきゃ生きてけないと考えているから、何時も鍛えてる」

「そりあ、凄いなあ。だからそこまで仕上がっているんだな……」

そうして、懸垂を終えたシンジは鉄棒のトレーニング器具から手を離し降りる。そして上着を持ち、二人に近づき手を差し伸べる。

「……すまないね」

その手を日向は掴み起き上がる。青葉の方はまだ休むと笑い。そのまま仰向けのまま寝る姿勢をとる。

「シンジ君、やっぱり君はすごいよ。良く鍛えている」

「そうかな？」

「ああ、一人の男として断言するよ。だから、あんなに強い訳だ」

「そんなに、強かったかな？」

「ああ、強い。それなら使徒や、異端使に勝てるかもしれない」

そう言っただけ日向は立ち上がり掴んでいた手を離し身体をほぐし背筋を伸ばす。

「そうだ！シンジ君。知ってるかい？実は先日大きな会議があつて僕達の日本支部が優先的に戦力が大きくなるらしいんだ！」

「それって、新しいEVAとか、武器が来るって事？」

「それだけじゃないぜ。聞いた話じゃ、あの篠山グループを筆頭に様々の技術部門が俺達に協力してくれて、新しいシミュレーションやら、設備が出来るらしい。至りつくせりだ」

息を整えて休んだ日向と青葉とがシンジに情報を話す。

「これなら、使徒との決戦に備えが色々出来るかもしれないから、シンジ君もそこんとこ頭に入れてくれ。もしかしたら新しい武器が出来たり、EVAが整備できるかもしれない。それで最近、EVAの整備がちゃんと出来て整備の連中から嬉しい声が来てるんだ」

「そうなんだ」

「ここだけの話、前は部品をやり繰りして真面目な整備が難しかったんだよ。初号機を優先した整備で式号機や零号機はギリギリだったんだ。それが改善出来て本当に良かった」

日向はその時の苦勞を話し、どれだけ改善されたか良く話す。そんな二人と雑談をして、シンジはその場を後にして、更衣室で着替えて、帰り道に付いた。

ミサト宅。

「御神徳四郎？あの国連軍の中将からの誘いがアタシたちに？」

「そう。リツコがさあ私達も来なさいだって、何でも観光みたいなモノらしいのよ。どうせ何らかの見せ自慢したいものなんでしょうけど、断りたかったけど。リツコがどうしても来なさいだって」

「徳四郎中将ね・・・無駄弾を浪費してた国連軍のヤツがアタシ達にお誘いね・・・どんな所へ案内するのやらバカシンジアンタはどう思う？」

「さあ、とりあえず弁当の準備はしとかないとね。ご飯、もうすぐ出来るからー」

『はい』

リビングの間でミサトとアスカはテーブルにそれぞれの席に付きシンジの料理を待つ二人。そんなシンジが作った今日の晩御飯

は……

「おまたせ『キムチ鍋』だよ」

豚バラ薄切り肉・300g

白菜・1／4株

長ねぎ・2本

えのきたけ1袋

ニラ・1束

豆腐・1丁

エバラキムチ鍋の素300ml

水・600ml

この食材と材料のレシピにより作られたシンジの『キムチ鍋』

「おおー、これは随分と美味しそうじゃない！今日もありがとうシンジ君！」

「豆腐と豚肉は特売セールでなんとか手に入れたから良く食べると良いよ。野菜の方もすっかり食べてね？」

「そうなの？確かに帰って来た時、少しボロボロだったのつてもしかして……」

ミサトが見たのはシンジの笑顔だがその顔は戦場を生還した勝者の様な微笑みだった。

「あれは、頑張ったよ。だから……しっかり噛んで食べてね？」

その気迫に二人は思わず「はい」と声を合わせて答えた。

（さすが、シンジ君。私も一緒に付き合わせて来た事があったけど、あれは本当に戦場だったわ……もう私、シンジ君に完全に逆らえない気がして来たわ……どうしよう）

（これが、キムチ鍋と言う料理ね。一応、箸の持ち方練習したから問題ないと思うのだけど……食べてやろうじゃない！バカシンジの料理を！）

鍋敷きの上に置かれたシンジが作ったキムチ鍋に食欲がそそる二人。シンジも自分の席に付き手を合わせるのを見たアスカとミサトも手を合わせて。

『頂きます』

そうして食べ始める3人はそれぞれの小皿にすくい網やレードルをなどを使い、ぐつぐつと言う鍋から具を掬って食べ始める。

「それにしても赤いわね。コレが日本で言う鍋料理なのかしら？」

「これはその中で韓国で広められていた鍋料理で辛口の鍋料理とスープ料理なんだ。ピリ辛さを堪能して食べる鍋料理。肉だけでなく、豆腐も、野菜も、染み込んでいるから。アスカは辛いのが平気？」

「そうねえ、アタシを美味しいと言わせる程かどうか味わおうじゃないの」

「まさか、鍋料理をこんな形で食べられるなんて思わなかったわ♪食べましょう♪」

そうして、3人は小皿に乗せた具を白米と共に食べ始める。シンジ曰く、白米はキムチ鍋の音もとも言われてるらしい。そうしてアスカはさつそく豚肉と豆腐の具を食べる。すると濃い旨味と辛味が二人の味覚を刺激する。

（ピリ辛い！でも旨い！それに何よ、この豆腐と言う柔らかい美味しい!?!）

（野菜も上手く染み込んで、更に他の具材まで箸が進んでいく！やっぱり美味しい!!それにご飯も進むわ!）

そうして、シンジの調理した『キムチ鍋』は彼女達の舌に快感と歓喜を齎し。瞬く間に鍋は底を尽き3人の胃袋へと消えて行った。

『ご馳走様でした!』

食後の満足感に浸る二人を他所にシンジは食器洗いを開始する。

「それじゃあ、私お風呂入るわね!今日も美味かったわーシンジ君!」

「どういたしました。ミサト、今日は晩酌のオカズ作ったから」

「ホントツ!」

「たまには労わらないと思うし、今日は多少のだらしなさは瞑ってあげる」

食器洗いを止めてミサトの方を見て片目を閉じて言う。

「ありがとうシンジ君っ!愛しているわ!!」

そう言っつてラフな格好しているミサトはシンジに抱き着く。その豊満な胸にシンジの顔が埋まる感じに。

「んっ、まだ食器洗うから離れてね」

「あら、ごめん」

しかし、シンジは無反応だった。

(あれー？シンジ君、こーゆ事には興味がないのかしら?)

とミサトは自分のスタイルの自信がシンジに通じなかつた事に少し落ち込む。そんな二人の様子を歯磨きを終えて戻って来たアスカが見ていた。

「ちよつと、アタシの前で何やっているのよ?」

「あ、あら、これはまた失礼しました。あははーじゃ、私風呂入るわねー!」

その場をはぐらかしミサトは風呂場へと進んでいった。そんなミサトをアスカはジト目で見送るとシンジへと向き直る。

「ねえ、ミサトって何時もアンタに対してあんな感じなの?」

「あれはミサトなりのからかい方なんだと思うから、それに今日はミサトに労いを与えたいから大目に見てよ」

「ふーん。ま、アンタがそこまで言うならアタシもそうしますけど・・・アタシにもなんかないの?」

「実はアスカにも今日は作っておいたモノがある」

「ホントツ!」

シンジは冷蔵庫からあるモノを取り出す。小皿に乗せたそれは・・・

「これも特売のイチゴを使った。デザート。既に仕込んでおいたモノその名も『練乳クリーム掛けのイチゴミルク』」

「こ、これは・・・」

そう、それは先日かシンジが仕込んでおいたイチゴのデザートの一つである料理。

材料。

イチゴ 8個〜10個

練乳 適量

ミントの葉 適量

イチゴは分量外の塩少々を入れた水でサツと洗い、水気をきる。へ

タを取り、大きい場合は半分に分ける。器にイチゴを盛って練乳をかけ、ミントの葉を飾る。

完成。デザートイチゴミルク。

シンジはフォークを用意してテーブルに置く。そしてアスカを見る。アスカはフォークを使いさつそく一口食す。すると、アスカの口の中が歓喜する。それはイチゴならではの甘さと旨味。それに練乳が更にその味を極み美味しさを増す。

「な、なかなかじゃないの、アンタの腕がここまでだなんて……ホント料理の腕は誉めてげるわよ。けど、調子に乗らないでよね？まだアタシはアンタを認めちゃいないんだからね！」

そう、棘のある台詞を言いながらもアスカはシンジの作ったデザートを食べ始めた。シンジも席に付いてテーブルに頬杖を付きアスカがデザートを食べる様子を温かく見守っていた。

「……………」

「な、何よ？」

「いや、美味しく食べてくれて嬉しいと思つてさ」

「ふ、ふんっ！本当に料理の腕はあるわねっ！このアタシ食べさせる事に成功した事を光栄に思いなさいよねっ!!」

「うん、そうだね」

「ところで……その、『シンジ』。アンタ、徳四郎の言う旅行みたいなもの行くの？」

「行くよ。なんか気になるし、弁当が必要みたいだし、その日の為に今日はオカズになりそうな食材をトコトン買つて来た」

「そうなの……そう言えばアンタ今日、少し疲れた顔してたわね。やたらと買い込んでいたみたいだし何を作るのよ」

アスカはデザートを食べ終えて、空の器を突きながらシンジに聞く。

「おにぎりと沢山のオカズ。仕込みは色々出来ている」

「よし、解った！アンタ、エスパ―ね！絶対そうでしょ!!」

当日。駅前。

「やあ、みんな良く集まってくれた。実に感謝する。今日はとことん、ツアーするから『楽しんで』くれたまえ」

集合場所の第三東京市の駅前に御神徳四郎を中心に集まるシンジ達。

(まさか、コイツまで呼ばれてるなんてね……まあ想像してたけど)
(碓君と一緒に住んでる式号機パイロット……もやもやする、好きじゃない)

レイとアスカはそれぞれ思いを抱きながらもその場に留まる。

「それで、徳四郎中将。今日は何処へ連れてってくれるのでしょうか？」

ミサトの質問に御神徳四郎は答える。赤城リツコもそれに気になる。

「向かうは第14村。その場所までは特別な列車で乗車して向かう」

「第14村ってまさか!？」

「どうしたのリツコ?」

驚愕するリツコの様子にミサトは不思議に思う。それに答える様に御神徳四郎は答える。

「指定コード619の名の下に『封印』された村だ。このコードと情報は一部の人間達しか知らない事だ。そうだとしたら赤城リツコ博士?」

「まさか、貴方があの村の事を知ってるなんて……そこに何かあると言うの?」

「ちよつと、何なの?」

リツコの様子にミサトはただならぬ空気を感じたがそれに構わず徳四郎は話す。

「真実だよ。赤城博士。この世界に古くから実在した『神様』眠る聖地へのご案内さ。そろそろ列車が来るだろうし、行くとしますかな?」

そう言つて徳四郎はガイドの様にみんなを先導する様子を見てアスカがシンジに尋ねる。

「なんか胡散臭いわね。付いて行って大丈夫なのかしら?」

「どうだろうね。だけどまあ、気になるから行くこうと思う。それに疼くんだ」

「疼くって……何がよ？」

「背中のアラヤシキが、だから行こうと思う」

シンジが自分のうなじ辺りを触る。それを見たレイがシンジの近くに寄る。

「碓君、背中痛いのか？」

「いや、大丈夫だよレイ。心配しなくてもだから安心して」

「……うん」

その様子を見たアスカはあからさまに不機嫌な様子で声を掛ける。

「ちよつと距離が近いわよエコヒイキっ！バカシンジもデレデレしない！」

「私はそんな名前じゃない。私は綾波レイ。碓君の名前もそんな名前じゃない」

「何よ、そうやってポイントを稼いでいるのかしら？意外とセコイのね！」

「私はそんな事してない、式号機パイロットは碓君にひどい事言っている。やめて」

「何よっ!!」

「ちよつと、やめなさい、あんた達!!」

レイとアスカが口論を始める。シンジを挟んで、その様子を見たミサトが流星にと止めに入るがその前にシンジが口を動かす。

「二人とも、やめて」

ぞわり……。ただそれだけの台詞なのにシンジの言葉にその場の全員が圧を感じた。空気がまたガラリと変わる。

「アスカもレイも喧嘩はやめて。二人とも喧嘩をする為に此処に来たんじゃないでしょ？」

そう言っつてシンジは交互に見て、少し前に出て二人を見る。

「今日はそんな日じゃない。僕達はEVAパイロットで仲間だから戦って行くんだから。二人にはそうなって欲しくない。だから喧嘩も仲間割れもやめて、でないと……」

シンジはずつと持っていた風呂敷を二人に見せる。

「今日の昼飯、二人とも抜きにしちゃうぞ？」

「ぐっ!!」

「.....」

シンジの台詞に固まるアスカと、無動のレイ。二人の胃袋はシンジの料理に掴まれているのとシンジの圧でこれ以上の口論も喧嘩も無意味だと言ふ意識が芽生えた。

「ま、まあーしようがないわね!」

「ごめんなさい碓君」

「うん。仲良く行こうね?レイ、アスカ」

シンジが収まった二人を見て、空気が変わる。シンジが穏やかになるのを見てミサトはホツとした。

「大丈夫かい?シンジ君。このまま案内を続けても」

「うん。いいよ。行こうか?ミサト、レイ、アスカ」

「ええ、そうね。行きましょ列車も来るし、貴方たちもほどほどにしないよ二人とも?」

ミサトの台詞にレイは頷き、アスカは不機嫌に顔を横に向く。

そうして6人は駅のホームへとたどり着く。そこへ丁度、赤い列車が来てシンジ達のいるホームへと止まる。

「さて、それではみんなに渡したいモノがある。みんなはいどうぞ」

そう言つて徳四郎は何処からかある物を取り出し、みんなへと配る。それは.....

「これは.....『銀の弾丸』のペンダント?何故これを?」

不思議に思うミサトに徳四郎は話す。

「これは『すぐく必要な物』だ。第14村に入ったら付けてくれ。絶対にだ。手放したら危険だからね」

「これは、魔除けの類のモノかしら何故これを?」

リツコの質問に徳四郎は真剣な顔付きで話す。

「その『シルバードレッド』には確かな魔除けのまじないを施している。何か悪寒や、気分の悪さや、気がおかしくなりそうなら、その弾丸に念じて、意識をしつかり持て、幾分楽になる。だから絶対に無くすんじゃない。正常にいたかつたらね。そうじゃなければ.....意識を『持つてかれる』だけでなく恐ろしい事が君達を待っている」

「それって、ピクニックじゃないわよね？」

「まー要するにだ、何があっても銀の弾丸を手放すなと言う事だわかったかね諸君？」

「いったい何なの？第14村って？」

ミサトはとりあえず銀の弾丸の首飾りを付けて徳四郎へと話しかける。

「聖なる旧支配者《ミスティック・オールドワン》の眠る聖地だよ葛城くん。そしてシンジ君のアラヤシキと大いに関係のある場所だ」

第16話・祖は天を揺るがし地を砕き・摂理の怒りを知らしむる

ガタン・ゴトン。ガタン・ゴトン。そんな音と静かな揺れの中、徳四郎中将の手配した紅い列車に乗ってシンジ達は曰く付きの村『第14村』へと向かって行く。車両の中は徳四郎中将とシンジ達御一行しかいない。村に着くまでに徳四郎中将は『第14村』の事について話す。

「えー皆様、よくぞお集まりいただきありがとうございます。それでは皆様はこれから『第14村』に一泊二日の観光案内とその暮らしを体験してもらいます。しかしながらこの村、本当に色々『起きます』のでそのシルバークレジットは決して離さないでください。因みにそのペンダントは『第14村』の通行許可書のようなモノなので絶対に無くさないでください。もしも本当に紛失した場合、そのお客様の精神とその身の救済と処置は保証が出来かねますので悪しからず」「ちよつと、私達どんな所に連れて行かれるのよ!？」

「そんな所にパイロット達も連れてくなんてどう言うつもり?!?それに『第14村』は無くなった筈よ!？」

ミサトとリツコの抗議に徳四郎中将は狼狽える事なく答える。

「大丈夫。ちゃんとシルバークレジットを付けていけば大丈夫だ。それに予備のシルバークレジットもちゃんと用意してるから。無くした場合、私に言うの良い。出来るだけの処置をしよう。でも出来る事なら絶対に無くさぬ事を願う。今回のピクニックはパイロットのお三方にも是非体験して、良く観て、適度に学んで欲しい。あの村に祀られている神と村に伝わる伝説と慣わしをね」

「アタシそんなの興味ないわよ、変な宗教を学ばせるわけ?」

アスカがジト目で徳四郎中将を見る。

「いや、ただの観光旅行だと思えば良いよ。式波大尉。では皆様方の外の景色とお手元の駅弁を食して、お楽しみください。やっぱ電車の中での駅弁もなかなかのものだー!いただきます」

「いや、いただきますじゃなくて!!」

「アスカ、このえび千両ちらし美味しい。レイは菜食弁当だよ。食べよ？」

「アンタもなんか言いなさいよっ!しかも、しっかり食べてるしい!!
他のみんなも一緒かよお!?!」

シンジとレイはもぐもぐと弁当にありつき、ミサトとリツコはとりあえずお茶を飲んでシンジと同じくえび千両ちらし弁当を食べ始めた。

「ちよつとこの魚類、大丈夫でしょうね?人類の海がどうなっているか分かっているわよね?」

「もちろんですとも赤城博士。私の伝手でご用意しました。ごく貴重なモノなのだがこの時の為に『準備』しました。原産地は言えませんが味も鮮度も安全も保証します。さあ召し上がってください」
「そう・・・大丈夫なのね」

徳四郎の説明にリツコはそれ以上何も言わず食べる事にした。

「リツコ、こんな駅弁食べるの初めてーっ!!生きてて良かったわ!!」

「ミサト。あんたねえ」

「難しい事は考えずミサトはえび千両ちらしを有難く食べる様子を見て呆れる。

「まあまあ、そう難しい事は考えずに食べてこれからの事に備えましょう、赤城博士。これから色々な事を体験するのですから」

「そう、色々ね・・・楽しみだわ」

そうして各々は滅多に食べられない駅弁を食し、列車は第14村へと進んで行く。

それから時間が経過し列車は第14村の駅へと到着した。シンジ達は列車から降りて身体を解す。駅の周りはしっかりと整備されているが、人の気配がない。そして生い茂る自然の森林は穏やかに涼し気な空気を運びその幻想的な感じを醸し出す。

「此処が第14村の入り口かしら?」

「行ける手段は今の所、この列車と限られている。時には車などで来

れる事も出来るが・・・道が入り組んでいて迷いやすいのだよ。でもたまにあるんだよね。人が迷い込んでこの村の住民になる人が」

「迷い込んだ人はどうなるの?」

「言った通り、住民になって幸せに暮らせたりしたけど、中には出ようとして動いた人もいた様だ」

徳四郎中將の何か含んだ返答に皆何かを感じ取る。

「出ようとした人はどうなったの?」

アスカの問いに徳四郎中將は少し苦笑いな顔で彼女を見る。

「残念な結果になったよ・・・皆、想像通りに死んだ」

「ちよっ!?!」

「しかし、大丈夫。我々は普通に観光客や、お客さんの扱いをしてくれるから大丈夫。それに今は治安部もいるから大丈夫。今は少し普通の村として認識する程の治安レベルだから平気だって!」

「貴方の言うその安全基準が不安なのよっ!!やはりこの村は危険なのね!?!」

「いやいや、大丈夫だって。平気だから私と共に一緒に第14村へ行くこう、ホントに平気だって、ちゃんと話すとこ話すからっ!安全は私の名において約束する!」

ミサト達が鋭い所を責めて来るのを徳四郎中將は穏やかそうな顔で話して安全を主張する。そんな彼の様子にリツコは溜め息を出す。

「本当でしょうね?」

「うん。うん。大丈夫っ!それでは行きましようっ!」

そうして、シンジ達は第14村へと足を踏み入れた。しばらく幻想的な道なりを進むとトンネルが見えて来た。その両脇には重武装をした警備員がいた。トンネルにはバリケードがあり、監視カメラも設備されてる程の様子だった。警備員が徳四郎中將を確認すると敬礼し、バリケードを開門する。

「この先が第14村だ。此处で話しておこう、この村では守って欲しいルールがある」

「そんなのがあるの?」

「ああ、実に守って欲しい『ルール』だ。でないと命に関わる。精神の

発狂だつてありえる。だから絶対に守つて欲しい」

ミサトの質問に徳四郎中将の雰囲気は真剣なモノに変わる。

「一つ、深夜に外を絶対に散歩してはいけない。二つ、『聖域』と言う場所に許可なく入つてはいけない。三つ、サイレンの音が鳴ったら必ず帰る。これを絶対に厳守して欲しい。そうしなければ・・・恐ろしい事が待っている。命が惜しければ絶対に守るのだ。頼む、絶対にこの三つを守つて欲しい」

そう言つて徳四郎中将は5人の方に向き、頭を下げて誠意を示す。

「ちよつと、何よそのルール。守らないと本当に命に関わる訳？」

「関わる。絶対に死ぬ。絶対に発狂もする。恐ろしい側面がすぐ隣にあるのがこの村の姿だ。このルールを守れていればこの第14村は住み心地がよい村だ。空気も綺麗。畑も良い。飯も美味い。楽しい事もある、そんな村なんだよ。この第14村は、でも大丈夫。君達の安全は私や『みんな』が保証する。そこは信じて欲しい」

徳四郎中将の話に5人はそれぞれの不安を持ちながらも、最初に声を発したのはリツコだった。

「貴方の言う安全がどの程度のモノか知らないけど私は行くわ。此処が本当に第14村ならどうしても、知りたい事があるの」

「リツコ・・・アンタ本気？」

「僕も行くのかな・・・三つのルールを守ればいいんだよね？」

「シンジ君！」

「ちよつとアンタも行くつもり？」

「うん。此処に来てから背中が疼くんだ。それに・・・」

シンジが自分の背骨辺りを摩る。そんなシンジの様子を見てアスカは気になる。

「碓君・・・何かあるの？」

「呼ばれている気がする。この村にある何かがそんな気がするんだ」

「はあ？何それ、アンタどうにかなつちやった？」

アスカの台詞の後に徳四郎中将がシンジに近づき距離を詰める。

「シンジ君、シルバースレットは身に着けているな？」

「持つてるけど」

そう言つてシンジは首に提げているシルバーブレスレットを見せる。

「それを額に当てて念じるんだ『自分は大丈夫』だと」

((近い))

「知つてる・・・こうだよね? (近い)」

そう言つてシンジは自分のシルバーブレスレットを額に当て念じる。

「そうそう、合つてる、合つてる。良いよシンジ君。それで気分は」

「少し楽になった」

「やり方は前の住まいでかな?」

「まあね、二人が教えてくれた。此処の空気は何処か懐かしい気がする」

「うんうん。それは良かった。ちよつと失礼するよシンジ君」

徳四郎中將はシンジの目元を触り、目尻を確かめる。

「あのー何をしているのですか?」

「健診みたいなものだよ。大丈夫の様だな。行けるかい?シンジ君」

「大丈夫だよ。あと近い」

シンジの声に徳四郎中將は「おっと」と言い、距離をとる。

「いやー失礼した。まさか、まだ入り口までなのにシンジ君に変化が起きたのかと不安だった」

徳四郎は両手をひらひらさせて、安心する。そして第14村の入り口へと向き直る。

「それじゃあ、行こうか? ミステイックオールド・ワン 聖なる旧支配者の眠る聖地へご案内」

そうして徳四郎は警備員と少し話すと彼らはバリケードを人が通れる位まで開ける。そのゲートを6人は通りトンネルを通る。しばらく歩いて行くとトンネルの向こう側なのか光が見えて来た。

「あの先かしら? その第14村つて言うのは」

「ああ、もうすぐだ。みんな気分は大丈夫だね? しつこいけどシルバーブレスレットは離さない様にね」

そして、全員がトンネルを抜けて見た光景は如何にも日本ならではの村々であった。田圃や野菜の畑もあり、村の人が耕したり、収穫し

たりと村人達は動いている。一見普通の村の様子だった。

「ここが第14村？見たところ普通ね」

「今はね、とりあえず泊まる所に行ってそれから教会へ向かおう。神父様には私から話しておこう」

「そうね、まずは一泊する所から見てみましょう」

「そうだね。まずは荷物を置いてから案内をするとしよう」

そうしてたどり着いた一軒家の宿ここは他の家と比べると幻想的特徴がある宿であった。

「まあ、何と言うか古風があつて良いじゃない。落ち着くわ」

「これが日本のホテルみたいな場所？少し殺風景みたいなどこだけど」

「それも含めて良いモノだと思つて見方が変わるわ・・・」

その時リツコは見たこの宿の柱の所に貼つてある御札の存在をでも、徳四郎は気にせず業務員と話を付ける。

「それではお部屋へと案内します。こちらへ・・・ああ、御札は気にしないでいいですよ。アレはただの結界の札ですよ。出来れば？がささないでくださいね。『夜』が大変ですから」

「何かあるんですか？」

「あなた方第3東京市から来たんでしょ？でしたら知らないのも無理もないわ・・・この村はね『夜』なると『お化け』が出るのよその結界の札はその為のモノなのですよ」

従業員の説明に徳四郎が続く。

「特に『深夜』なんかは危険だ。君達、今日は教会の視察は時間を取るかから終わつたら此処に戻ろう」

そうして皆は宿泊する部屋へとたどり着き一息つく。部屋は広く日本ならではの風格を現し彼らの心を落ち着かせる良い部屋であった。

「思つてたよりもいい部屋ね。何か和むわ」

「此処が日本の宿泊部屋ね、まー悪くないじゃない」

「部屋の広さも悪くないじゃないもしかしてVIPの部屋かしら？」

ミサトやアスカとリツコが各々に感想を言う。

「僕もこの部屋に泊まるの?」

「もちろんだ。それにいざと言う時は君の行動が頼りになる。この村の空気には覚えがあるだろう?」

「……まあね」

「ちよつと!この筋肉ダルマも寝泊りする訳!」

「大丈夫だよ式波大尉。シンジ君は信頼出来る。この徳四郎中將の名に懸けてその身の安全を保障しよう少し休んだら教会へと案内しよう。因みに私は別室で寝泊りするのでご安心を」

「そう……バカシンジ!何かしたら許さないわよ!」

「まあ、シンジ君なら私は大丈夫かな。私もそこは保障するわ。私がどんなにラフな格好でもシンジ君動じないのよ」

「アンタのその黄昏てる表情で言っていると本当みたいね」

3人を他所にシンジはレイを見る。

「レイは平気?」

「私は碇君……シンジ君と一緒に良い」

そう言つてレイはシンジの傍に寄りシンジの手を握る。

「怖い?」

「誰かに見られている気がする。得体のしれない何か……怖い、シンジ君」

そう言つてシンジは改めてレイの手を見ると幽かに震えていた。

「レイ、シルバーブレスレットを握つて……それから額に当てるんだ」

「うん」

レイはシンジに言われてシルバーブレスレットを握り、その後額に当てる。そうするとレイの顔色が少し良くなったのをシンジは見た。

「レイ、大丈夫?」

「何なのよ?どうかしたの?」

ミサトとレイの問いにシンジは答える。

「みんな、シルバーブレスレットを使った方が良い。何かいる」

「と、言うか見られている様だ。私も感じた」

徳四郎も何かを察したのかシルバーブレスレットで清める動作を

する。それに押されて3人もそうすると周りの空気が少し和らいだ気がしたのを3人感じた。

「何よ何処をどう見たって何も……」

そうしてアスカが窓の方を振り向くとそこには、大きい3つ目の何かが彼らを見ていた。その瞬間レイはシンジにしがみ付く感じで飛び付き。アスカは驚いてバランスを崩し腰が抜けた。3人は驚愕し身構えたまま立ち尽くす。そこには窓に張り付いて此方を見る3つ目の巨人の様なモノはぎよろぎよろとシンジ達を見た後、窓から離れ何処かへと飛んでいった。

「なっ……何よ、あれ」

「言っただろう、この村のルールを守って欲しいと言う理由がこれだ。アレは『狂気の化身』まさか、こんな感じで接触してくるとは……」

「レイ大丈夫？」

振るえるレイを抱きしめ宥めながら聞いてみるシンジ。そうしてレイが顔を上げると目尻に涙があったのでそれを拭うシンジ。

「シンジ君、私……」

「大丈夫。僕がいる。だから大丈夫」

「……うん」

レイは落ち着き、大丈夫なのを確認したのを見て次はアスカの元へ行く。

「アスカ、大丈夫？」

「……何よあれ、あんなのがこの村にたくさんいる訳!」

「いや、アレは別だよ式波大尉。どうやら今日は聖地の調子が良いらしい」

「何か起きてるの?」

徳四郎の台詞にシンジは尋ねる。

「どうやら、我らがミス聖ティなックる・オ田ール支ド配ワン者は我らに興味を持つたらしい。ちよつと教会へ行つて来るからみんなは少し休むと良い」

そう言つて徳四郎は部屋を出て行く。その後ミサトとリツコの二人はへたり込んだ。

「な、何よあれ、あれが『お化け』?」

「いずれにしてもあんなの普通じゃないわ、これが曰く付きの原因かしら？」

「アスカ立てる？大丈夫？」

「何なのよ、アレ。何なのよ……」

「アスカ……」

アスカは頭を抱えて蹲っていた。そんなアスカを見てシンジはアスカの傍に付き頭を撫でながら落ち着かせる。そうして撫でているとアスカの落ち着きが戻り、隣にいたシンジに話しかける。

「アイツに見られた時、何か嫌な不快感を感じた。まるで……何か突き刺さった様な感じ。何なのアイツ。何なのよ」

「大丈夫だよアスカ、大丈夫」

「バカシンジは平気なの？」

「ゾっとした。でも、アレの話しを聞いたことがある」

「それって何なのシンジ君」

アスカを撫でているシンジにミサトは声をかける。

「叔父さんの受け売りだけど、人間の中にある『狂気』の集合意識の様なモノだと叔父さん言ってた。アレの名は『狂気の化身』とも言われてた。奴は何処にでもいて、何処からでも現れると聞いた。それが何時から生まれたのかはわからないらしい」

リツコはシンジの話聞いて落ち着きを取り戻すため、煙草で一服する。

「私も感じたわ、アレの不快感。いったいこの村で何があるのかしら？」

「そう言えばシンジ君背中はどうなの？」

ミサトの問いにシンジは自分の首筋辺りを触って答える。

「少し……疼いてる感じ。大丈夫」

某所・教会の地下室。

「何事かね？この惨状は」

「はい御神中将!!なぜか急に活性化し始めました。何人かが発狂してしまい。今は落ち着いています。発狂した者は鎮静剤を打てば治り

ますが・・・それよりこちらをご覧ください」

白衣を来た研究員が徳四郎にあるモニターを見せる。そこには巨大な背びれの様なモノが写し出され、別のモニターにはそのグラフが表示されている。

「ここ最近です、まるで『彼』が来たのを待ち望んだ様に・・・」

研究員が言い終わる前にドクンと音が鳴る。そう、これは生命の鼓動。

「アレに変化は？」

「まるで心臓の様に脈動を繰り返してます。何かを待ち望んでいるのでしょうか？」

「おそろくな・・・これも『旧支配者』の御心のままに、か」

「どうします？やはり彼をここに・・・」

「ああ、神の子と『絶対神』を引き合わす。これはミステイク・オールドワンの導きだ」